

マームットの嵐は細いカイベル峠を上り下りすると疾風のやうにラホールの市街に躍りこんだ。ある部隊は佛教の遺跡といはず印度教の寺院といはず、あらゆる宗教的な施設を破壊した。また或る部隊は金銀財寶の掠奪に専念した。いやしくも抵抗するものは殺戮され或ひは捕虜とされた。彼等は充分満足するまで滞在すると、子供がおもちゃに飽きたやうに、ふりむきもせず再び風の如くに去つて行つた。捕虜は勿論ガズニへ連行されて、奴隸として仕へねばならなかつた。偶像は持ち運べるものは持ち歸つた。それは回教寺院の敷石となつて、参拜する回教徒にふみつけられた。第二回の遠征軍はベシャワール原頭で昔馴染みのジャイパール王の軍と對面することになつた。だが、回教徒に一度も勝つたことのなかつた印度王は、また此處でも——しかも今度こそ徹底的な敗北を喫した。王みづから及び彼の家族がマームットの捕虜として、カイベル峠を越えて異境の土を踏まなければならなかつた。後に王は許されて歸國したが、印度の習慣として再度同じ敵に征服された君主は統治する資格を失ふ——といふ古來の慣習を守つて、彼は自ら火中に投じてその不遇な生涯を閉じた。彼の王國はその子アーナンドパールによつて繼承されたが、ベシャワールの地はもはやマームットの領地と化してゐた。

マームットの第四回遠征の目的はムルタン市の占據にあつた。この戦ひは一〇〇五年の末から翌

六年にかけて、二年ごしに行はれた。例によつてマームットの騎兵は無人の境を行くやうに、その蹄下にムルタン市を蹂躪した。何よりもアーナンドパール王の恐怖はひどかつた。彼は「殺戮、幽閉、強奪、劫掠及び兵燹の魔の手が蔽ひかゝりありとあらゆる潜伏所は狩り立てられ追求される」のを、如何に逃れるべきかと唯それのみに奔走した。

反撃と劫掠——十七回の侵入

ムルタン市で生命の危期を辛うじて脱したアーナンドパールは自己の軍勢では到底マームットの回教軍に敵し得ないことを身をもつて経験した。そこで彼は中印、西印の諸王に激をとばして相ともに侵入軍を邀撃する同盟軍の結成に成功した。ウジャイン、グワリオール、カーランジャール、デリー、アジュメールの諸王の選ぬきの大軍がマームットの定期的な遠征を待ちうけてゐた。

第六回の遠征はかういふ時（一〇〇八年——一〇〇九年）に行はれることになつた。マームットの軍はベシャワールから先には行けなかつた。其處には既にこのことを期して配備された印度人の大軍が控へてゐた。そこで、兩軍は相對峙したまゝ四十日をすごさねばならなかつた。

その間といへども、印度軍には續々と援軍が到着した。カナウジのラージャペーラ王も麾下の軍

を率ゐて加はつた。その上、兇暴をもつて鳴つた三萬のコーカール部隊が來着した。これは何より有力な援兵であつた。全印度兵はこの一戦に外敵の殲滅を賭けてゐた。貴婦人は裝飾品の寶石を賣り拂つて軍資金を獻金した。貧しい女は綿を紡いで軍費を調達した。こんなに全印度が一致して、軍費や糧食を戦場に送つたといふのも、今までのマームットの侵入が、いかに猛烈をきはめたかを知らしめるものであつた。

一方、マームットの遠征軍には後援部隊といふものがなかつた。そこで形勢はマームットに不利であつた。彼は塹壕を築いて防戦に努めなければならなかつた。幾度びか小競合がくり返されて、いよいよ雌雄を決する日が近いことを物語つて來た。戦場の風は凜烈なヒマラヤ風であつた。

總攻撃が始まつた。三萬のコーカール軍は尖兵となり、先頭を切つて進んだ。各所で白兵戦が行はれ、回教軍の運命は危殆に瀕した。たしかに三萬近い回教徒が殉教の血に倒れた。マームットも敗戦を自覺した。印度軍の勝利はもはや動かぬところと見えた。

だが、何といふことだらう、アーナンドパール王の乗つた象が俄かに敵に後を見せて退却しはじめた。動物の氣まぐれであつたかも知れない。が、全軍は着々と勝利を占めてゐたにも拘らず、これを退去の表象と見て、一齊に散を亂しはじめた。回教徒軍は思ひがけない敵の潰走に、二晝夜も

追撃を續けた。八千人の印度人が戦死し、三十頭の象が生どりとなつた。この決定的な勝利に續いて、マームットはナカルコットの要塞を占領した。

その分捕品の中、重なるものは當時の富豪の家屋を模した純銀の家屋であつた。其間口は三十碼、奥行は十五碼であつて、組立直すことのできる装置になつてゐた。

(スミス「牛津印度史」)

その後、一〇一四年のターネスワル地方の侵入は、巨億にのぼる財寶と二十萬の俘囚とを戦利品として凱旋し、マームットは次ぎの年の恒例侵入地をカシュミールと定めた。そしてカシュミールへ向ふ騎馬隊が常勝の軍を進めると、マームットは意外にも頑強な抵抗をうけた。カシュミールの藩侯は豫て尙武をもつて聞えてゐたが、それは抵抗といふよりも寧ろ反撃であつた。必死の防戦であるとともに執拗な邀撃でもあつた。常勝を誇るマームットのこれが唯一の敗戦となつた。彼は掠奪を斷念して軍を引きあげたが、その歸途は敵中を横斷する心細さであつた。マームットは辛うじて身をもつて逃れたと言はれてゐる。

一〇一八年十月、第十二回目の侵入は印度教の聖市マスラと北部印度の帝都とも言はれるカナウジがその目標とされた。ガズニの本據を發した回教徒はベンジャブ地方の諸川を渡渉し、十二月二日には早くもジャムナ河を横切つて破竹の勢を示した。これはヒマラヤ山脈を迂回した作戰の成功であつた。印度教の中心地マスラはかくて、マームットの馬蹄下にあつた。

「王は宣言する。一切の寺院に油をそそぎ、火を放ち、もつて荒野たらしむべし」

そして、その通り實行されたのである。マスラを荒廢せしめたマームットは、自ら馬首を東に向けてカナウジに殺倒した。この時の捕虜は數十萬にのぼり、中央亞細亞、西南亞細亞の奴隸商人はカプールのガズニ城に雲集したと傳へられてゐる。

マームットの遠征中もつとも冒險的であつたのは一〇二三年十二月に行を起したソムナートの劫掠であつた。ソムナートには印度教濕婆派の神廟が、その壯麗な堂宇を蒼穹にそびへさせてゐた。これが破壊の對象であつた。マームットの軍は三萬の騎馬隊を率ゐてインダス河の中流ムルタンに到つた。そこで三萬の騎兵は三萬の駱駝隊と變じて、長い印度沙漠の横斷となつた。その行軍は渴と餓とに苦しめられた決死行であつた。約四ヶ月の困苦を極めた進軍は、やがて陽春三月、目的地に近づいて來た。

折からソムナートの神廟では、婆羅門が敬虔な祈をさしつけてゐた。子女は寺院に詣で、庭前に歌舞を催して、平和な一日が始まつてゐた。その時、恰も津波のやうに押し寄せたマームットの軍は全市中を蹄にかけ、當るを幸に破壊して行つた。二日の後には、ソムナートは廢墟と等しい街となつた。掠奪と殺戮は常の如く、神聖な寺院は完全に倒壊され、その主な部分はガズニへ持ち去られたのである。

彼の印度遠征の最終回は一〇二七年に行はれたジャッツの攻撃であつた。これはインダス河上の海戦であつたと言はれてゐる。そして一〇三〇年四月、マームットは印度侵入十七回、戦を交ゆること二十五回といふ記録を留めて、この世を去ることになつた。彼こそ己れの宗教に忠實であつた君主もなく、彼ほど勇敢に戦ひ、且つ完全な破壊と掠奪に成功した軍司令官もなかつた。

マームットの性格

マームットの性格は多くの史書によれば、狂信的で貪慾、血に飢えて破壊を好み、まさに取得がないと記述されてゐるがかういふ空想畫は歴史の眞實性から遙かに遠いものと言ふべきであらう。彼こそは自ら稱するほどの回教の戦士であつたし、その偶像破壊に對する宗教的熱情は疑もない。志

氣を鼓舞するために彼が語つた夢の話は、粗野なしかし大膽な戰士たちの心に泌みるのであつた。

彼の見た夢とは斯うであつた。——その夢の中に豫言者マホメットが現はれて、ガズニ王國は善行の報ひとして汝に譲られしものなりと言ひ更に「汝自身の徳行を掘り下げるばかりでなく、なほ人類に對する大らかな仁惠を施すことに汝の全力を用ひよ」と告げた——といふのであつた。

波斯の大詩人フィルダウジに對するマームットの惠與はこの詩人の貪婪な期待には達しなかつたが、マームットは彼の宮廷の學者には物惜みをしなかつた。さらに彼の首都に建てた圖書館、博物館、無数の回教寺院、公共建物などには一層大まかに國幣を費やした。彼の征服によつて得た掠奪品は凡て國民の前に展覽され、その大部分は彼等に分配されてゐた。

マームットの公平な裁きに關する逸話は澤山あるが、次のものもその一つである。

ある男がマームットに訴へた。マームットの甥が彼の家へ不法侵入をして不都合な行爲を働いてゐる、と言ふのである。しかも彼は警察が犯人の身分の前には無力であると附け加へた。

マームットは怒つた、そして公平な裁きをその男に約束した。

マームットは甥を現場で捕へると燈を消して、甥を殺した。それから、彼は水を一杯もつて

來い、と叫んだ。

彼のいくらか奇警な行爲を説明して、マームットは言つた。自分は甥を愛してゐる。だから憐憫の情が自分の義務の實行に當つて彼の手を留めることのないやうに燈を消したのだ。また、自分がかの訴へを聞いた瞬間から、犯人が刑罰をうけるまでは飲むことも食へることもしない」と神に誓約した。だから、これがひどく咽喉が渴いた原因だつたのだ、と。

(ユサッフ・アリ「印度の建設」)

マームットには、印度侵入にあたつて領土的な野心などありはしなかつた、彼はたしかに敬虔な回教王であつたのだ。パンジャブ地方やインダス河の下流沿岸が彼の領土となつたのも、その地方の民衆が回教徒として改宗したからに他ならない。彼がカイベル峠から東に軍隊を駐屯させたのも僅かに防衛的な姿勢だけであつた。むしろ、マームットは印度の文化に深く打たれた。彼の嫌悪する偶像の、藝術的な彫刻は時に彼を壓倒した。印度教寺院の壯麗な規模は、そのまゝ移しかへられて、首都ガズニの輪奐の美を形づくつたのであつた。

その後のガズニ朝

マームットの歿後、ガズニ王朝はマドス一世によつて繼承された。しかし國內の内訌はマームットの雄志を繼ぐものなく、僅かにカプールのガズニ王國のことにのみにかゝはつて、パンジャブ一帯の地、ハンジ、ターネスワル、ナカールコットなどの父祖血涙の地をデリーの君侯に奪還された。いまや、印度に残されたガズニの領地はラホールのみとなつた。

系圖といふやうなことに興味がどの位かけられるものか、若し煩雜さを厭はなければ、ガズニ朝代々の系譜は次のやうな連名によつて續けられたのである。

マームットの後繼者マドス一世は僅か八年のあひだ王座を愉しんだだけで去り、モヅド（一〇三八年即位）がこれに續いた。その後の王統は、マドス二世（一〇四九年）、アリ（一〇四九年）と同年に二人の王を歡送し、ラシッド（一〇五二年）、フェロクザート（一〇五三年）、イブラヒム一世（一〇五九年）、マドス三世（一〇九八年）、シャイザート（一一一五年）、アルスラン（一一一八年）を経て、第十四代の王ベフラムは一一五一年に即位した。ガズニ王朝としても建國以來まさに二世紀になんなんとしてゐた。回教王國の事情も少しづつ變つて來た。アフガニスタンは新

ルコ族に占據されてゐた。そしてヘラート市の東南にある山あひに山寨を築いたグール城の酋長の勢力が、次第に近隣を壓して來た。ベフラム王の治世は僅かに一年にすぎない。それはグールの侵入に抗し得ないガズニ家の末路であつた。ベフラムの後繼者はこの新來者の強壓に耐へかねてラホールへ遁れた。即ち第十五代クスル一世（一一五二年）は在位八年にして、ガズニ王朝最後の王クスル二世に位を讓つた。クスル二世は生れつき脆弱で、遊樂に耽溺することが彼の唯一の生活であつた。そこへグールの英雄ムハマッドの侵入があつた。彼はラホールを追放され、城砦に幽閉の十五年間を送つたのちに殺される運命となつた。従つて彼の在位は一一五九年——一一八六年であつた。この終りの年、それが九七七年に發足したガズニ王朝の印度に於ける最後の日であつた。

グールのムハマッド

一一四六年獨立を宣言したグール朝は、始祖イズ・ウッチンの子アラ・ウッチンによつて、ガズニ朝をまつたく倒し、かのマームットの劫掠品によつて飾られた世界第一の美しい都といはれてゐたガズニに主權を確立した。その後二代を経て、王位についたのがシハープ・ウッチン・ムハマッドであつた。シハープ・ウッチンとは「宗教の焰」といふ意味である。通常、これをグールのムハ

マッドと略して呼んでゐる。

ムハマッドの印度侵入は一一七五年からはじまつた。先づ國境地方のムルタンが攻撃の目標となり、次いでパンジャブ地方のウッチを手中に收めた。この成功は彼の軍をして一氣にグジェラートへの侵入を企てさせた。が、アフガン回教徒軍はアンヒルワラの藩王軍のために思はぬ大敗をまねき、軍兵は散を亂して潰走し、逆襲されること三十哩に及んだ。ムハマッドの計劃はこゝで一頓挫を來した。彼は異教徒を膺懲したり、貴重品を劫掠したりすることよりも、豊饒の國印度に對するはつきりした領土的な野心を懷いてゐたのであつた。そこでこの身をもつて遁れた敗戦は彼にとつては痛切なものがあつた。彼は一應シンド地方を確保することに自慰を見出して、軍を纏めて好機を待つことにした。彼の戦法はそれほど慎重であつた。彼の侵入はそれほど計画的であつた。

機會はその後數年ならずして來た。一一九二年、彼は再び印度へ進撃した。印度諸王もまた聯合軍を組織してこれに當ることになつた。しかしデリー王ブリチヴィラージとカナウジのラトール王とは豫て不和であつたので、聯合軍の足並はともすれば亂れがちであつた。かくて、兩軍はタラーワリー原頭で死闘をつくした。印度聯合軍はブリチヴィラージ王の優秀な指揮の下に善戦した。印度兵の放つた一矢はムハマッドの腕を刺した。とはいへ一萬二千の精銳な白衣の騎馬隊の突撃は、

つひに敵司令官ブリチヴィラージ王を捕へることに成功した。この結果としてデリーもアジメールも回教王の支配するところとなり、戰士は殺されるか、奴隸として賣られた。ブリチヴィラージ王は死刑に處せられた。ムハマッドは占領地の統治と警備を部將クタブ・ウッチンにゆだねて、己れはガズニに歸つた。

その翌年(一一九三年)、ムハマッドは席の暖まる暇もなく、三度び自ら陣頭に立つて印度を襲つた。カナウジからベナレスまで、北印の重要な地點は、すべて回教徒兵の蹂躪するところとなつた。ヒンヅー教の聖市ベナレスに回教半月旗がひるがへつた。印度人にとつては、それは永い悲しみの日が續くことを教へるものに外ならなかつた。そして、ムハマッドは満足してガズニに歸還した(一二〇三年)。印度に布いた軍政の長官クタブ・ウッチンは信頼のできる將軍であつたし、それに、ムハマッドは兄の後を繼いでグルル朝の王となつたからでもあつた。

一二〇五年の冬であつた。ムハマッドは四度目の、そして最後の印度入りをしなければならなかつた。それはパンジャブ地方の有力な部族であつたコーカールの一揆によつてである。ムハマッドの軍隊が通りすぎる河は血汐によつて氾濫されるかのやうに、敵をうち破つて進撃した。間もなく一揆は鎮定された。精悍なアフガン人の軍隊には、その頃の印度で刃向へる敵はなかつた。

ムハマッドは歸路についた。そして、一二〇六年三月ムラヒタ派の狂熱者によつて暗殺された。「回教曆六〇二年に於けるシャバイン月の三日、ガズニへの歸途ダムヤックの駐營所に於てこの暗殺事件が突發した」と回教史家は書いてゐる。

ムハマッドを失つたグル王朝は、その後ギヤズ・ウツチン・マームット、ババ・ウツチン、アチス、ムハマッドと歴代の王の名前を數へあげることができたにしても、事實上は一二〇六年に崩壞したものと見るべきであらう。ムハマッドの領土的野心の最大の魅力であつた印度は彼の將軍クタブ・ウツチンが新に王朝を創始する勢ひを示してゐた。

第九章 回教帝國の諸王朝

(千二百年—千五百年)

奴隷王朝

グルのムハマッドの死は、デリーの軍政總監であつたマリック・クタブ・ウツチン・イーバツクにとつては幸運な事件と言はなければならぬ。首長を失つたゴールの將兵は有能にして勇敢な將軍クタブ・ウツチンの統治を望んだ。そこで彼は獨立して印度の君主となることになつた。一二〇六年クタブ・ウツチンを始祖とする回教王國が生れたのである。これを奴隷王朝と呼ぶ。クタブ・ウツチンはトルキスタンに生れ、奴隷としてムハマッドに買はれた。しかし彼の才能はいつまでも奴隷として甘んじさせてはゐなかつた。彼はムハマッドの印度侵入の時にはもう一方の旗頭であつた。カナウジのチャイチャンド王が目に矢を射られて戦死したといふチャンドワールの激戦で、彼の指揮する前衛軍は偉勳を樹てた。だが、人はいつまでも彼の前身を忘れなかつたのであらう。彼の稱號を許されても、彼はなほ「奴隷王朝」として歴史に名を留めてゐるのである。

彼は婚姻政策をとつた。いつの時代でも女はさういふ折に役に立つ。ことに一夫多妻の回教徒達は對抗者の心を和げたい時、有力者の庇護を乞ひたい時には、「女」を貰つたりやつたりした。クタブ・ウッチンは彼とほゞ同じ勢力をもつてゐた部將タージ・ウッチンの娘を妃とした。シンド地方の大守ナーシル・ウッチンに妹を興へた。またビハールに駐在してゐた若いけれども才能のあるアルタムシに娘をめあはせた。これで印度の北部は平穩であつた。

ベンガルのセナ王國の老王ラクマニヤはわづか十八騎一隊の回教兵に驚駭し、首都を放棄してデッカに亡命してゐた。これはその時より七年程前のことであつた。爾來ベンガルは回教徒兵がおさへてゐた。これは自然に奴隸王朝の一部と見なされてしまつたのである。

だが、高く雪を着て聳えるヒマラヤ山の麓には、まだヒンヅー教を守る國々があつた。クタブ・ウッチンはそれらの國々を征服することを企てた。彼の旨をうけた部將バクチャールは大軍を率ゐてアッサム、ネパールの兩王國に進撃し、山岳戦がしばしば行はれた。しかし回教徒軍はその志も空しくダージリン附近の戦鬪でうちのめされた。バクチャールは僅かに手兵に擁せられて歸つた。クタブ・ウッチンはこの敗戦を回教の恥辱と感じた。彼はそのことのみを思ひ續けて悶死した（一二二〇年）と傳へられる。回教徒の軍隊の志氣はこのやうに敗戦をいさぎよしとしなかつた。

以て察すべきものがある。クタブ・ウッチンは奴隸王朝の始祖としてばかりでなく、デリー近郊のクットビーの高塔にその名を留めてゐる。これは彼の女婿アルタムシの供養によつたものである。クタブ・ウッチンの子アラーム・シャーは王位を即いだが無能であつた。そこで一二二一年退位して、クタブ・ウッチンの女婿シャムス・ウッチン・アルタムシが王位を襲つた。しかし、アルタムシの前には、曾て彼の義父が婚姻政策をとつた「うるさい親戚」が控へてゐた。彼は義理の伯父にあたるタージ・ウッチンとナーシル・ウッチンの兩者を敵として戦はなければならなかつた。この結果はビハールやシンド・マルワ地方などが確實に彼の手に入り、アルタムシ王の獨裁を齎らした。この時に奴隸王朝はヴィンドヤ山脈以北の全北印をその領土とすることを實現したのである。笈多帝國グプタ以來の統一であり、一つの政府の聲が邊境まで透ることになつた。

だが、恐るべき蒙古族がやつて來た。鐵木眞テムジンと名乗る若い蒙古の酋長は、成吉思汗といふ稱號を有する大蒙古帝國の皇帝として君臨し、中央亞細亞一體に颯風サハルの嵐をまき起してゐた。

一二二一年——一二二二年にかけて、成吉思汗はアフガニスタンに勇猛な蒙古兵を入れた。ガズニへの侵入はまたゞく間であつた。ヘラート、ベシャワールも成吉思汗の馬蹄の下にあつた。アルタムシの領土は將に蒙古兵の蹂躪に會はうとしてゐた。

しかし蒙古兵の前には長く長いインダス河があつた。のみならず北方民族にとつて印度高原の酷暑はひどく耐へた。その上、いかなる理由であつたか詳かにしないが、突如、成吉思汗は當初の計劃を變更した。この氣の變り方がなかつたならば、印度はこの時から蒙古族の統治するところになつてゐたに違ひない。アルタムシは危機を逃れた。が、彼および彼の後繼者はこの時以後絶えず北方を警戒しなければならなかつた。

アルタムシ王は一二三六年五月に死んだ。四代目の王はその子ロクタン・ウツチン・フィルズ・シャーであつたが、凡庸で、その上道化たことばかりしたし、淫蕩といふことが王の特權であるとしても、何より氣紛れな性質は大きな回教帝國の君主としては相應しいものではなかつた。そこで彼は王位にあること僅かに七ヶ月で、人心怨嗟の的となり、廢位を餘儀なくされるに至つた。

女王ラジャツト・ベガム

フィルズ・シャーの後に立つたのは、彼の妹であるラジャーヤツト・ウツチン・ベガムであつた。彼女はスルタン・レジアと男性の名で呼ばれたが、女性が回教王になることは勿論異色であつた。そればかりか、ラジャーヤツト・ベガムの登位は、長い印度の歴史の中で、はじめての、そして唯一

の女の君主であつた。(英國統治となつてからのヴィクトリア女王があるが、遠くロンドンにゐたこの侵略國王がよし女性であつたらうと印度人には何の感慨もない筈である)

彼女はその兄とは違つて、有能であつた。コーランに通じ、公務に勵んだ。平和な政治と正義を強調した。若しこの王に缺點があるとすれば、それは女性であつたといふことである。それが確かに弱點であつた。一凡そ君主として必要な天稟は一として賦與されぬものはなかつた。彼女もエチオピア人の厩司を寵愛するに至つて、一部アフガン諸將の憤怨を買つた。統治三年、彼女は統率を失つて廢位されねばならなかつた。一二四〇年十月彼女はエチオピア人の厩司とともに殺された。

空白に等しい二代(モイズ・ウツチン・パーラム・シャーとアラ・ウツチン・マスト・シャー)そして忙しい王位繼承の六年を経て、第八代の王はアルタムシ王の末子ナーシル・ウツチン・マームッド・シャー(一二四六年——一二六七年)であつた。彼はギヤース・ウツチン・バルベンといふ奴隸出身の名宰相を得たので、その統治は珍らしくも二十二年も續いた。珍らしくも——といふのは、回教徒の王國では王が適任者でないこと知ると容易に廢立が行はれたからである。大臣バルベンは娘を王妃とすることに成功した。彼の權威はもはや王をさへも凌ぐほどになつた。この上は王位を篡奪することよりほかになかつた。そこで彼はナーシル王を追つて自ら王位についた。

彼の生活の上で異つたことは、たゞ王といふ稱號が附け加はつただけであつた。彼が王の椅子に腰を下した時は、もう六十路に餘る老齡であつた。頑固で、殘忍で、暴虐を肆にした——といふのがこの王の一言にしてつくす歴史である。とはいへ、彼の治世は長かつた。彼が長生きであつたばかりでなく、思ひ出したやうに中央亞細亞から疾風の陣をそなへて襲ふ蒙古族の來寇に、アフガンの諸王や僧侶、文人が難を避けて德里に庇護を乞ふた。そこで、この好ましからぬ性格の王の下にも、文化の華が咲きそつたのである。

しかし強壓政治は一度ほころびが切れ始めると、破け方も一そう大きかつた。バルバン王の死後（一二八六年）、奴隸王朝最後の王として即位式に臨御した先王の孫カイコバードの治世は、マルワ、ラージプタナの諸公やガンジス河流域の大守の輕蔑をまねいた。カイコバード王は所詮平凡に生ひ立つた放蕩青年にすぎなかつたからである。

叛亂は一部將によつて起された。カイコバード王はジャラール・ウッチン・フィルズ・キルジによつて一二九〇年（回教曆六八九年）毒殺された。——かくて八十四年の奴隸王朝は十代の王を迎へて滅亡した。

キルジ王朝

ジャラール・キルジがその名をかぶせた王朝を起した時には、彼は七十歳であつた。彼は半世紀もの間バンジャブを守備して、蒙古族の襲撃を防いだ、土耳其族出身の將軍であつた。彼は王の位にはついたが、老齡はもはや戰陣の夢を安らかに結ばせなかつた。そこで王は娘を興へた甥のアラ・ウッチン・ムハマッド・シャーに軍隊の實權をゆだねた。自分の手兵を擁すると、青年副王アラ・ウッチンはすぐにも自己の運命を見きはめたくなつた。彼は、南方印度の攻略を思ひ立つたのである。南印は回教徒にとつて處女地であつた。そこには金銀財寶があつた。異教徒の偶像が破壊の手を待つてゐる筈である。これはたまらない魅力だつた。

そこで彼は叔父王ジャラールに圖つて宿志を實現することにした。一二九四年、精選した手兵八千騎を従へて彼は南方征服行にのぼつた。ヴィンドヤ山脈を越えてデッカ高原へ出る途上、彼は詭計をめぐらせて、キルジ王と不和を生じ宮廷を追はれたので南方マハンドリ王の援助をうけに行くだ、と宣傳させた。このためアラ・ウッチンの軍は大きな障害をうけなかつた。のみならずマルワの諸公達は糧食を給與してその行をねぎらつたのであつた。彼は無人の境を行くが如くにデッ

カンの地を駆け廻つた、南印の諸王がアラ・ウツチンの腹黒いたくらみを知つた時には、掠奪者はいつも國境に迫つてゐた。彼等はマハーラシュトラの首府デオグールに殺倒して、無防備の都市を破壊し、大虐殺を行つた。その地の王ラーム・デヴァは森林にひそんだ所を捕へられて、莫大な財寶を提供し、また年々の朝貢を誓ふことによつて、辛うじて一生の全きを得たといふ。

かくして一ケ年に互る南印遠征の戦利は實に巨億の財寶であつた。その頃南方の通貨は純金であつたから、黄金の燦々たる貨幣の掠奪だけでも老大な戦利品であつた。凱旋將軍はデリーでもてはやされた。すると妙なもので、アラ・ウツチンは副王であることが不満になつて來た。加ふるに、王の娘である彼の妻とは琴瑟相和するに至らなかつた。一二九六年七月——回教曆六九五五年のラマダインの月のことである。ジャラル王は招かれて、アラハバードのカラーにある甥の別邸に赴いた。そこで彼は甥のために弑逆された。それは永遠の斷食であつた。

註*

回教徒は太陰曆第九月の新月の日から三十日をラマダインの月と呼んで、この月一ぱいを斷食しなければならぬ。但し斷食といつても日没から日の出までの間に軽い食は攝つてもいふことになつてゐる。「ラマダインの月はコーランの啓示せられる月なり」とコーランにある。

アラ・ウツチン・シャーは、キルジ朝を繼承すると、その翌年（一二九七年）には新たな征服欲に燃えた。それは一層南へ下つた、即ち極南地方の海岸線まで到達しようといふ野望であつた。そこでその第一歩をグジャラト地方から始め、ラージプタナ、チャターなどを席捲した。この戦ひにはラージプタナ族のマリック・カーフィルを拔擢して軍の指揮をゆだねた。カーフィルは印度人であつたが夙に回教に改信してゐた。

カーフィルは次いでデッカ高原を南下して、テリंगा國の首府ワランガル、バンディア國の舊都マヅラ、その他ヤータヴァ王國もマイソールのホイサーラ王國も、彼の馬蹄下に蹂躪され、都市はみる影もなく掠奪された。回教徒の軍隊はコロマンデル海岸に達し、待望の南方征服を終つた（一二三一年）。それは十餘年に互る長い征旅の歲月であつた。そして、この間にも北方には蒙古族の間歇的な襲來があつた。

アラ・ウツチンの治世は一種の恐怖政治であつた。彼の信條は「事の正邪を問はず、國家のため非常に處するため必要なれば、善惡に拘らずこれを命ず」といふのである。そして南北に互る長い戦線は、軍備の擴充を必要とした。四十七萬五千人の正規騎兵が彼の麾下にあつた。この軍隊を養ふために、彼は重税を課し、米穀の專賣を行ひ、あらゆる商品に公定價格を設定した。これらは國

民の絶対服従によつてのみ成り立つ事である。そこで極めて完備した謀報網が張りめぐらされた。苟しくも彼の政治を非議する者は、叛亂罪として容赦なく處罰された。刑罰はまた苛烈であつた。例へば、數量不足の商品を賣つた商人は、その不足量だけ臀部の肉を切りとられなければならなかつた、と傳へられてゐる。

彼は無學文盲であつたが、若し取り柄といふものをあげれば、それは逞しい実行力であつた。飲酒の害を知ると、彼は王宮にあるあらゆる酒の器具を一切たゞき壊した。何事にも徹底的にやるのが彼の性格に合つてゐた。彼は驕慢にも第二の亞歷山大王^{アレキサンダー}たらんことを願つた。彼の貨幣には、さういふ文字が刻まれてあつたが、それだからといつて亞歷山ほどの信望を蒐めてゐたといふ譯ではない。いやむしろ臣服させ得なかつた證據には、彼は一三一六年一月に彼の寵臣カーフィルのために毒殺されたのである。

次の王としてシハブ・ウツチン・オーマル・シャールが立つたが、一年ならずして廢されクツプ・ウツチン・ムバレク・シャールが王位についた(一三一七)。彼はアラ・ウツチンの第三子であつた。彼も微賤から身を起した回教改宗者クスルといふ印度人を起用して、軍政の重要な位置を與へた。しかしクスルの改宗は偽りであつた。彼は王を殺害して(一三二〇年)自らナーシル・ウツチン・

クスル・シャールと稱したが、こんなことは到底部下の將兵の容れる所ではなかつた。彼は己れの手にかけて前王と同じ運命を辿ることとなり、こゝにキルジ朝はまつたく滅亡した。

ツグラク王朝

キルジ朝の最後の王が弑逆されてから、首府デリーは混亂状態となつた。この混亂を鎮めるには有力な支配者でなければ爲し得なかつた。パンジャブの總督であつたツグラクはデリーの情勢をきくと、兵を率ゐてデリーに入つた、叛徒はまもなく平定された。國民はこの老將軍の人格を慕つてゐたので、彼がツグラク王朝を開くに當つては何の支障もなかつた。彼も亦土耳其族の奴隸から立身した者であつた。父は土耳其人、母はジャットと呼ぶ印度婦人であつた。彼は王位に即いてギハス・ウツチン・ツグラク・シャールと稱した(一三二〇年)。

デリーはもう長いこと回教帝國の首府であつたので、人心の腐敗墮落してゐることは著しいものがあつた。もつとも長くパンジャブにゐた老將には、餘計にさういふことが目立つたには違ひなかつた。が、この硬骨漢は遷都することが政治の第一の改革であると信じた。そこで、彼はデリー東方四哩の地に都城を移し、ツグラカバードと呼んだ。そろそろ南方デッカ地方には叛亂が起り始

めてゐた。王は自ら指揮して征討行に臨んだ。そしてツグラカバードに凱旋した二月、彼は息子のムハマッドが建造した宮廷で、天蓋が頭上に落ちたために絶命した。これは謀殺であるやうに言はれてゐる。ムハマッドの虐政と残忍さからみて、さう思はれないこともない。

果してそれが事實であつたかどうかはとに角、次の王はムハマッド・シャー・ツグラク（一三二五年——一三五一年）であつた。

ムハマッド王は信徒としては善良な回教徒であつたし、學問もあり殊に語學には精通してゐた。そして文學、哲學、醫學、天文學——など文化のためには役立つたのであつたが、如何にも氣まぐれであり、いくらか狂氣染みてゐた。彼はデッカンのデヴァギリの美景に感心すると、忽ち首都の移轉を命じた。これなどは確かに彼の氣まぐれを立證してゐる。その移轉命令は凡そ強制であつた。デリーの人々は十日もかゝる新しい首都ダウラタバードまで、好むと好まざるに拘らず、家財をとりまとめて移動しなければならなかつた。そしてデリーは「小犬一匹、小猫一匹すらも残さぬほど荒寥となつた」のである。ところが市民はデリーに未練があつた、いくつかの數願は王に新しい都がそれほど良くないやうに考へさせた。そこで、またデリーへ戻つた。だが、それは王が人民の言ふなりになるやうに考へられて威嚴といふ問題が生じた。さうなると王はまたダウラタバードに固

執した。またぞろ移轉命令である。今度は拒むものは死刑に處すといふのであつた。が、どちらに幸したか解らぬものの、大饑饉のためにこの遷都はうやむやのうちに葬られてしまつた。

なまじ實行力があるといふことも考へものである。ある時ムハマッドの頭の中に、支那を征服しようといふ想念がひらめいた。すると彼は直ちに支那遠征軍を組織したのである。十萬の兵が蜿々とヒマラヤ山脈を越えるべく進んだが、全軍道を失つて沙漠に倒れた。デリーに歸りついたもの數百名も王の怒りに觸れて斬殺された。

この失敗を償ふために彼は波斯遠征軍を編成させた。だが、國庫にはもはやこの大軍の兵站にあてるべき費用がなかつた。そこで遠征軍は波斯へ侵入するどころか、自國を勝手に劫掠する結果となつた。——この二つの例は、ムハマッドの狂氣染みたところを代表してゐるであらう。

漸く國の財政が窮乏を告げると、彼は又しても天才的な計劃を實行した。それは貨幣の改鑄であつた。銀本位制の貨幣に黄銅を代用させ、銅貨と銀貨とを同價で流通させようとした。その銅貨には「王に服する者は眞に神に従ふ者である」といふ銘が刻んであつたが、彼の國民である回教徒達は「眞に」神に従はなかつたと見えて、王にも服さなかつた。そして遂に「銅貨は銅となり、銀は銀貨となつた」ので、彼が改鑄した黄銅の貨幣の山は石ほども有用ではなかつたと言はれる。

この次に来るものは當然租税の増徴であつた。彼はガンジス河流域の豊饒な土地の地租を一躍二十倍に増税した。そこで、農民は税吏が来ると山中や森林の中へ逃げこんで、そのうちのあるものは群盗となつた。國內の秩序がまるで亂れてしまつた。そして、王はこれらの群盗狩りに軍隊を用ひて、包圍圈内の土民は善惡を問はず虐殺した。これは一種の「人獵」とでも言ふべきものであらう。虐殺は王の残忍さにくらかの刺戟を興へるのであつた。

こんな政治で大きな帝國を維持しようといふのは所詮無理な話であつた。叛亂が隨所に起つた。マルワに、パンジャブに、ベンガルに、コロマンデル海岸に、シンドに——それは全印度にと言つていゝ程、つぎつぎと蜂起した。晩年の王はかういつた叛亂鎮壓のために東奔西走、寧日ない戦陣生活を營んだ。かくて一三五一年三月、シンド地方の鎮定に赴いた戦塵の中で、「博學にして非人情、信仰深くして狂氣染みたま」ムハマッド王は病歿した。

暴君ムハマッド・ツグラクの後はその従弟フィルズ・シャール・ツグラク（一三五一年——一三八八年）が即位した。フィルズ王はツグラク朝の始祖ギヤズ・ウツチンの弟シパー・サラル・ラージャブと印度貴族の娘ビリー・ナイイラとの間に生れた混血兒であつた。彼は母からアリアンの教育をうけた。彼の母は強制結婚によつて一村を救ふための犠牲として彼の父の妻となつたのである。

そこで母は子に印度人及びヒンヅー教を壓迫しないように教へた。回教徒が侵入して以來、彼等の壓迫から逃れるためには、後宮にゐる印度婦人の肉體と媚笑によることだけが可能であつた。

フィルズ王はその母の教へに従つて印度人と回教徒とを融合させるために努力した。彼は温厚な性質と寛容さを武器にしたために實際の武器をとる戦争は不得手であつた。そこで彼の治世中に事實統治した領土はベンガルからパンジャブまでであつた。中南印にはアラ・ウツチン王がデッカに立つたのを始めとしてグジェラトも、マルワも獨立した。彼はこれらの獨立を黙認せざるを得なかつた。

その代り彼の内治には見るべきものがあつた。彼は先づ回教徒以外のものに課税してゐた人頭税ジヤドヤを撤廢した。そして回教のうちでスンニー派を信奉した。農業を奨励し、貧窮者を救恤したり、特に建築を好んだために多くの失業者を救済した。彼の公共事業の一つに運河の溝築があつた。それはジェムナ河とストレージ河とを結ぶために開鑿されたのである。彼は三十八年の比較的平和なる統治を終へて、一三八八年九月、七十九才をもつてこの世を辭した。

彼の死後は、いつもながらの王位繼承の争ひがあつた。第四代の王はギヤズ・ウツチン・ツグラク・シャール二世が一年間王位を愉しみ、アベクル・シャールに代つた。この王は即位の年（一三八

九年)に第六代のムハマッド・シャー・ツグラク二世によつて廢された。ムハマッド二世は五年間統治したが、この間に彼は上部印度にジャウンプールを首都とする獨立國を承認した。崩壞が徐々に行はれてゐた。第八代のマームット・シャーも在位一年で、次のナスラト・シャーの治世が四年間續いた。第十代はマームット・シャーが重祚することになつたが、この時ツグラク朝の斷末魔を告げるやうな、物すごい跛足の帖木兒の侵入があつた。

帖木兒の嵐

一三九八年の末、中央亞細亞から疾風のやうに襲つて來た帖木兒の一隊によつて、デリーは暗黒の五日間を送つた。帖木兒は綽名を「跛足」と呼ばれてゐた。それは彼が年少の折に負傷したからである。そして帖木兒とは「鐵」といふ義であつた。「跛足の帖木兒」と呼ぶべきところを、西歐人は訛つてタメルランと言つた。多くの史書にタメルランの帖木兒と書いてある誤は訂正されてもいゝ筈である。

帖木兒のデリー侵入は、印度に於ける回教諸侯が臣民であるヒンヅー人に苦しめられてゐるときいたので、これら異教徒等を回教に改宗させることを表面の目的としてゐた。

そのほかにも、もう一つ理由があつた。それはカプールの總督であつた彼の孫ビル・ムハマッドの最後通牒にも拘らず、ムルタンに據つて獨立國を成してゐたサランガ・カンの帖木兒を默殺した態度であつた。先づムルタンを攻略する順序となつて、ビル・ムハマッドは祖父の命をうけて進撃した。一三九八年シンド河を渡つた蒙古軍はウッチの要塞を抜いて、ムルタンの都城を包圍したが抵抗は頑強であつた。そこでビル・ムハマッドは帖木兒の來援を乞はなければならなかつた。帖木兒は一三九八年の春國都サマルカンドを發して、ヒンヅークシの山嶮を越へ、九月中旬にシンド河上流に至り、ビルに三萬の軍馬を送つた。

ムルタンは陥ちた。虐殺と掠奪はつきものであつた。そして、彼等は今度は一氣にデリーに向つて行つた。その沿道に當つたところは、バートニルでも、サーマーナでも男はすべて虐殺され、婦人子供は奴隸として連れて行つた。しかし、デリーまで道はまだ相當あつた。にも拘らず、捕虜の數は追々増して來た。これは神速をむねとする帖木兒の軍の少からぬ足手まとひであつた。そこで帖木兒は婦女と特殊の技能をもつ者を除いて、「十萬の不敬虔なる偶像崇拜者」を斬殺した。デリーの近郊にはツグラク朝のフィルズ王の創建した美しい回教都市フィロズバードがある。其處で軍をまとめた帖木兒は、數隊にこれを別けた。そして分れた部隊はデリーの市街を包圍するやうな態

勢をとつた。侵入は一瞬の如くに行はれた。デリーの市街は、四方から津波のやうに、或ひは雪崩の落下する勢ひで、帖木兒の荒武者どもが殺倒した。

五日間の大虐殺があつた。五萬とも十萬とも言ふが、ともあれ大がかりな殺人が行はれ、市街は死屍累々として通行することができなかつたと傳へられてゐる。帖木兒はこの大虐殺の間にも、平然と酒宴を張つて、戦勝を祝つてゐた。そして五日の後には、彼の軍隊はガンジス河を渡つてメールートへ向つて行つた。

難をグジュラトに逃れたマームド王が歸つて來ても、デリーにはアフガン人キズル・カンが帖木兒の委託をうけて控へてゐた。それ故、マームド・ツグラクは「全く王の影のやうなもの」であつたが、一四一三年二月まではたしかに生きてゐた。

デリーは死の街と化した。饑饉と疫病とが襲つて來た。そして住民は死に絶えてしまつた。僅かに二ヶ月を出ずに、デリー市には一羽の小鳥も飛んでゐなかつたほど、ひどい荒廢ぶりであつた。

サイイド及びロジ王朝

ツグラク朝の滅亡後は、デリーの實質的支配者であつたキズル・カン・サイイドが主権者であつ

た。しかし彼は皇帝と言はず帖木兒の大守であると自稱してゐた。どちらにしても、もうその頃はデリー一國の主に過ぎなかつたのである。彼は一四二一年に死んだ。そして一代の王が続いて、サイイド朝最後の王アーラム・シャーは一四五一年に退位した。それはアフガン人バイロール・ロジがパンジャブを掌中に收めて、デリーへ侵入して來たからであつた。アーラム王はロジに王位を譲つたのである。武人でない彼は隱居の方が身についたものと考えた。そこでブダオンに隱栖を構へて、専ら宗教的な生活を送つた。

バイロール・ロジがロジ王朝の始祖として王位に即いた時には、さしも盛大を誇つた回教帝國も施す術もないほど衰微してゐた。けれどもバイロールはこの頽勢を挽回しようとして、ムルタンへ軍を送つた。ところが背後からジャウンプールのシャルキ王の軍が彼の虚を衝いたので、バイロールの軍はムルタンをあきらめてジャウンプールの軍と戦つた。これは前後二十六年に互つて數回干戈を交へたが、一四七八年併合に成功した。この間にベラールにイマッド・シャーが王朝を起した（一四八四年）。そしてビジャプールのアディル・シャーが獨立した一四八九年七月に彼は國威のまつたく衰へたのを知りながら死んだ。彼は單純ではあつたが、敬虔なる回教徒として、勇敢な將軍として、また鷹揚な統治者として、その一生を終つたのである。

ペーロールの次に一子シカンダル・ロジ（一四八九年—一五一七年）が王位を繼承した。第三代の王はイブラヒム・ロジであつた。そしてこの王の治世に、莫臥兒人の侵入が始まつた。

葡人ヴァスコ・ダ・ガマ印度に着く

紅海を回教徒によつて占められたことは、歐洲と印度との間の、古い時代からのわづかばかりの交易をも中斷せしめてしまつた。そこで歐洲人——中でもポルトガル人は、アフリカを迂回する航路を發見しようと試みた。だが、長い航海と、季節風のいたづらに會つて、それはなかなか成功しなかつた。

一四九八年の五月二十日のことである。マラバール海岸のカリカットに見馴れない三艘の船が着いた。これはたしかに大變なことだつた。しかも白人が降りて來る。この白人がポルトガルの官吏ヴァスコ・ダ・ガマであつた。彼は始めて希望峰を迂回して印度へ到達した最初の白人であつた。ガマはアラビヤの商人達によつて若干妨害されたが、どうやらザモリン王に謁見することができた。彼の目的は通商であつた。そして彼は六ヶ月ほどマラバール海岸に留つて、珍らしい物資を買ひ求めた。船は印度商品を満載してリスボンへ向つて歸航した。

かうして印度の無限の富は先づポルトガルによつて知らされた。ポルトガル王は通商遠征隊を組織して、續々と印度へ送りこんだ。一五〇〇年にはカンノールとコチンにポルトガル商館が設立され五年ほど經つと彼等はセイロン島も發見した。

そして一五一〇年のアルブケルクの派遣によつて、ポルトガルはゴアの獲得に成功した。その翌年は馬來半島のマラッカも攻略した。この二つは、ポルトガルにとつては素晴らしい根據地となつた。一五一五年にはデイエもポルトガルの自由になつた。

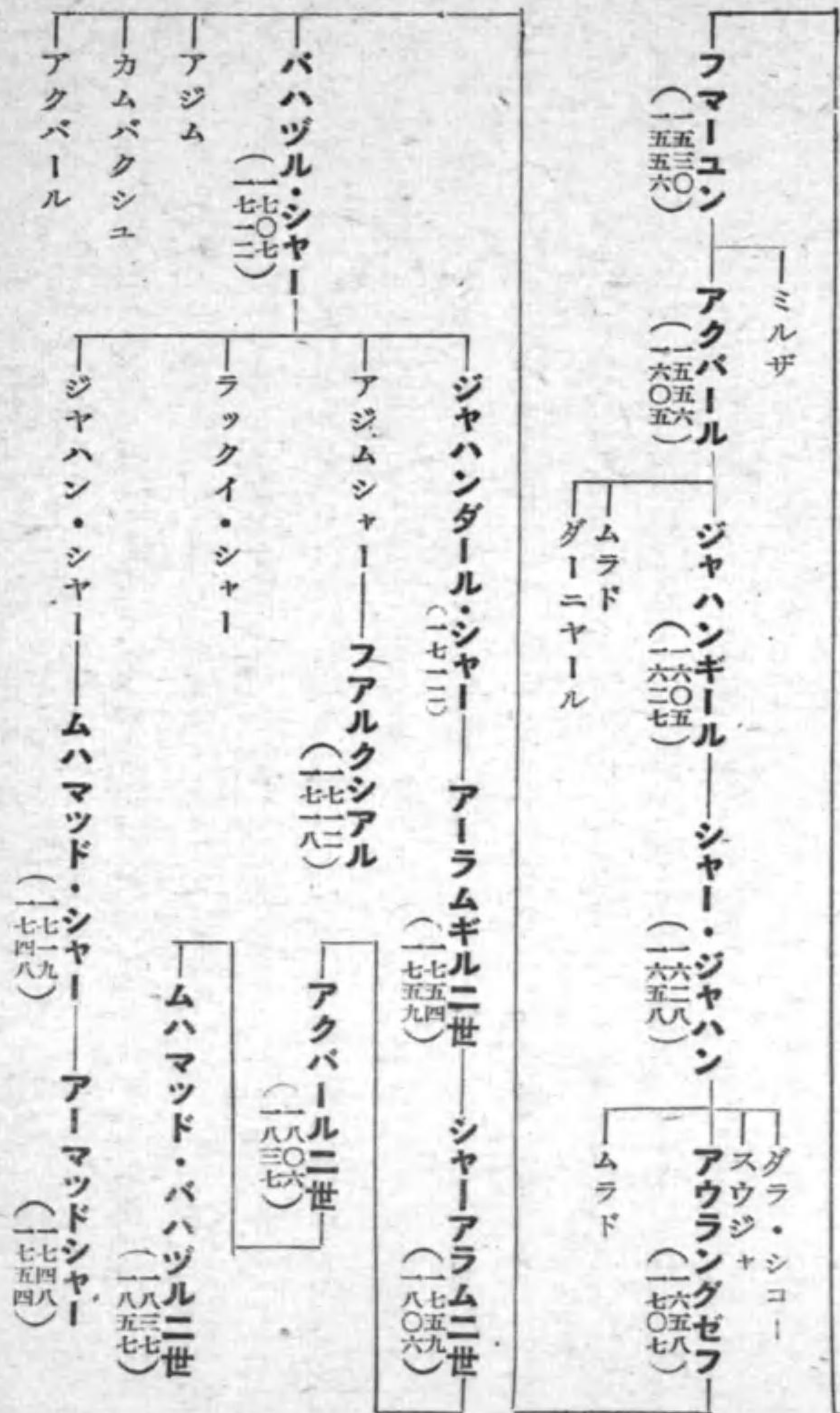
ポルトガル王は「エチオピア・アラビヤ・波斯・印度との征服・航海・商業の王」といふ稱號を欲しがつてゐた。そのために、特に印度に於けるポルトガルの領土や租借地へ人を送つた。ゴアの町にはまるで歐洲のやうな家並と散歩道路ができ上つた。ポルトガル人ばかりでなく、他國人も入りこんで來た。そして印度との貿易の實權は次第にポルトガルの勢力を植ゑつけて行つた。

それからオランダが來た。デンマークも、フランスも、そして最後に英國が來る。——だが、この歴史はまだそれを書くまでに至つてゐない。その前に、われわれは印度に於ける最後の帝國、蒙古族の侵入による莫臥兒帝國のことを知らなければならぬ。

莫臥兒帝國系圖

帖木兒——ミラン・シャー——ミルサ——アブ・サイド——オマール・サイク——バーバル

(一五三〇六)



第十章 莫臥兒人の侵寇

(千五百年——千五百五十年)

カブールのバーバル

カブールのバーバル——正しく呼ばばザヒール・ウツチン・ムハムマド・バーバルは、男系に於て帖木兒の血をうけ、女系に於て成吉思汗の苗裔であつた。彼は十一歳にして父オマール・サイクの後を繼いだ。父は中央亞細亞のフェルガーナの小國の王であつた。幼少にして父を失つたバーバルは、陰謀と侵略と壓迫とのいばらの道を歩まねばならなかつた。彼はやがて祖先傳來の國をウズベック族のために追はれた。十代の少年には、それに反抗する力も智慧もなかつた。しかし、バーバルは二十八歳の時に、やつと故郷の國土を取戻すことに成功した。このあひだに彼はひたすら武技を練り、人心の操縦法を學んだのである。辛い苦しい十餘年であつた。彼は既にカブールを占領してゐた。もはや印度は眞近であつた。そして、バーバルは彼の祖先であつた「帖木兒大帝國」の再現を夢みるやうになつた……

その頃の印度はアフガン人ロジ王朝の晩年であつた。一五一七年シカンダル・ロジの歿後、王位に登つたその子イブラヒム・ロジは凡庸な君主といふよりは寧ろ暗愚な人間と言ふべきであつた。彼には部下を臣服させることなどは思ひもよらなかつた。そこで、君臣の心の中に別々の思想があつた。これは何より混亂を惹起する原因である。もつと悪いことは、ラホールの總督ダウラト・カ
ン・ロジがイブラヒム王に對して好感をもつてゐなかつたのである。

丁度このころ、バーバルは印度へ第二回目の侵入を行つてゐた。第一回は一五〇五年ガブールからガズニを陥し、進んでインダス河の流れに沿ふて印度國境に入つたが、彼は慎重に行動して、インダス河の渡河は決行しなかつた。しかし、この侵入戦が彼の自信を強めた。それに印度の軍隊が脆くも打ち破られたのは、バーバルの「火炮」の偉力であつた。それは彼がうけついで蒙古軍の貴重な武器であつた。曾て成吉思汗の後繼者の帝國がポーランドまでも延び、ほとんど全歐洲を席捲したのも「極めて能率の高い」軍隊ばかりでなく、「支那人の發明した火薬をもつてゐて、それを小さな野砲に使用した」(ウエルズ「世界文化史大系」)からであつた。そして、バーバルの軍には、そのとき以來の傳統の砲兵があつた。驍進する騎馬隊のはるかに後方から、のびるやうに敵陣に打ちこまれる火炮の威力は、印度のバタ^{*}イン帝國軍をみじめにも敗走させた。

註* 奴隸王朝以後の回教帝國をバタイン帝國と云ふ人もあるが、歴代王朝中バタイン(アフガン)人はサイイド及びロジ王朝だけで、あとは多くトルコ系といふべきである。

第二回るときには、バーバルは自ら先頭に立つてインダス河を渡河した。彼の確信は今ほゆるぎないものであつた。そしてパンジャブ地方に兵を送つた。

ダウラト・カンはバーバルの侵入を利用しようとした。彼はデリーのロジ王朝を倒すなら今こそ好機であると、使者を送つて誘惑した。だが、バーバルは夙にアフガン人の狡猾な性格を見抜いてゐた。彼はパンジャブの一部を攻略したゞけで、カブールへ兵を返した。

バーバルの協力が得られずとも、朽木のやうなロジ王朝には叛亂が続いておこつた。そのうちの一人、アラ・ウッチンは敗戦の身をカブールのバーバルに寄せた。バーバルは彼に手兵を與へて、デリーに再舉を計らせた。が、これは無殘な敗戦であつた。戦ひに於て、勝つものと敗けるものが宿命的に定つてゐるかのやうな、アラ・ウッチンの連敗に終つた。叛亂者にとつては二度目の敗北にすぎないとしても、バーバルにとつては最愛の部下を見殺しにしたも等しい結果が齎らされた

のである。

バーバルは始めてロジ王朝に戦ひを挑むべく決心した。そして、この一挿話の経過するうちに、バーバルは立つべき氣運がまつたく醸成されたのを見てとつたのである。人とその在り方と氣運とが一致した。この時に、バーバルの命令は下された。

一五二五年十二月、カブールを發したムガール軍は、ひたむきに印度へ急いだ。

第一回パニパット戦役

バーバル進撃の報はロジのイブラヒム王を震へ上らせた。が、こと此處に及んではもはや交戦せざるを得なかつた。そこでこのお人好しの王様は、進んで攻めることを知らずに専ら首都の防衛にあたる策をとつた。そして衆を恃む愚劣な戰術を採用して、やたらに大軍を集結した。

デリー近郊を埋めたバターン帝國の軍勢は凡そ二十萬であつた。どの町も、どの道路にも兵と馬と象と火炮とが据ゑられた。この大軍を見ると、イブラヒム王の心中には若干のゆとりが生じた。それは徐々に自信とかはつて行つた。この分ではバーバルを撃破することはたやすく思はれた。といふのは、情報によれば、バーバルの遠征軍は驚くほど僅少な兵數から成つてゐることであつた

から……。

その情報は確かに正しかつた。バーバルは僅かに一萬二千の、けれども粒選りの兵——丈が高く頬は紅く、髯を長くして、太刀を帯び、革ズボンに乗馬靴をはいた勇ましい將兵の一軍——を率ゐて、自ら陣頭に立つてゐた。兩軍は互に接近して來た。

一五二六年四月二十一日、デリー北方のパニパットで朝露を踏みつつ、交戦状態に入つた。印度軍の戦法は依然として傳統の象軍を主力とし、これを軍の最前線に配備した。が、火炮の優勢と機動戦に馴れたバーバルの騎兵は、その快速を利用して迂回作戦を可能ならしめた。印度軍は背後から迫る敵の蹄の音をきいて動揺した。小敵とあなどつたことが十倍する兵力をもつにも拘らず、印度軍完敗の原因であつた。午前中はやくも一萬五千の部下と共にイブラヒム王も戦場の露と消えた。

勝敗は定まつた。印度軍は潰走し去つた。そして追撃はお得意のムガール騎兵隊であつた。翌る二十二日、ムガール軍はデリーに入城した。バーバルの一子フマーユンは別働隊を率ゐてアグラを攻め、その開城に成功した。

かうしてパニパットの戦ひはカブールのバーバルを、デリーの、即ち言ひ換へればヒンドスタンの、バーバルにしたのだ。以後、數世紀の間にいくつかのパニパットの戦ひが行はれ、それに何れ

も興亡の覇權がかけられてあることは、この地のもつ重要さを教へ宿命的な古戰場として記憶に残るのである。

一週間の後にはバーバルはアグラで、自らが新しい支配者であることを宣言した。戦利品をもつて故郷カプールへ凱旋したいといふ部下の將兵の希望は、この宣言によつて空しいものとなつたが、ムガール人たちはその首領に絶対の信頼をさしつけてゐたので、軍隊はそのまゝ駐屯することになつた。後日、莫臥兒帝國として全印度に號令する基礎は、實にこの時の將兵の従順な土着化によつたものである。

だが、印度は廣かつたし、バーバルに反抗しようとする敵はたくさんあつた。そのために、次の二つの大きな戦ひが行はれることになつた。一つはアグラを去る二十哩の地點、シクリー附近のカンワリーの戦ひであり、他の一つはガイグラ河とガンジス河との合流點の戦ひであつた。

いつも回教徒に反抗して來たラージプト族がロジ家の王子を擁してデリー回復の機會を窺つてゐるといふ報道があつた。その首長はチトルの要塞長でメワールの隊長を兼ねたラーナーサンガと稱ぶ勇猛な戦士であつた。「傷だらけ」のサンガと言はれるだけあつて、彼の全身には八十餘個所の傷痕があつた。この剽悍な「傷だらけ」のサンガが二十萬と稱する大軍をもつて出動して來たので

あるから、バーバルにとつてもこれは容易ならぬ敵であつた。しかもバーバルの軍は敵よりも寡兵であるのを常としてゐた。

カンワリーの戦ひは早朝から始まつて、丸一日中續いた。夜、更けてからムガール軍はやつと自軍に有利であることを知つた程であつた。迂回作戦や火砲の機宜にかなつた使用法によつて、バーバルはラージプト軍を潰滅させた。最大の敵を破つて、バーバルの覇權が確立されたのは一五二七年三月十六日のことである。

ガイグラ河畔の戦ひはこれから二年ほど經つた五月のことであつた（一五二九年）。イブラヒム王の弟マームドを盛りたてようとしたビハールとベンガルの大守を相手とした一戦であつた。この會戦もバーバルの勝利となつた。そしてこれがバーバルの生涯中の最後の戦闘であつた。バーバルは彼の手記の中で次のやうに書いてゐる。

「この六、七年の間に、私は軍隊の先頭に立つて、印度で五回の戦ひに従つた。第五回目には神の恵みは深く、かの強敵なりしロジのイブラヒム王の王朝を完全に敗北させた。かくて、神の恩寵は、私をしてヒンドスタンの支配者及び征服者たらしめたのである」

アフガラに歸つたバーバルは大いに内治に意を用ひた。そして、アフガン回教徒の及ばなかつた華麗な王宮を作り、回教寺院を建てたり、道路工事を起したりした。バーバルの治世はよくいつた。

バーバルの死

まことにバーバルは熟練した戦士であり、指導者であつた。同時にまた彼は洗練された學者風と敬虔な神を畏れる信仰とをもつてゐた。歴代の回教王のやうな殘忍さは彼には見られない。むしろ敵には寛大であつた。家族や部下にとつては良き家長であり、良き主人であつたことは言ふまでもない。

若し彼の弱點をあげるならば、それは飲酒癖であつたらう。強い酒をのむために、彼は年よりも老けて見えた。だが、氣力はいつも青年のやうに若かつた。

「私は座輿にガンジス河を泳いで渡らうとした。だが、三十三ストロークも泳いで、一と呼吸つくと私は同じ側に泳ぎ歸つた。私が會つたいかなる川も私はすべて泳ぎ渡つたのだ。たつた

一つガンジス河を除いては……」

かう彼は一五二九年三月末の日記に誌してゐる。この時、彼は四十七歳であつた。そこには既に昔日の若さはなかつた。彼の全盛時代は、かの「傷だらけ」のサンガと戦はねばならなかつた頃であつた。彼はこの強敵を迎へて、好きな酒さへも斷つた。「酒を思ひ切つてから、私は物狂ほしいほど心が亂れた」と告白してゐるやうに、辛酸を重ねてかち得た勝利と榮光であつた。

だが、その日も短かつた。一五三〇年のことである。彼の愛子フマーユンが熱病のために死に瀕した。彼の心痛は言ふまでもない。敬虔な神の下僕として彼の手記によれば次のやうに祈つた。

私は我が子の部屋に入り、枕頭に進み、「お前のうけてゐる一切の苦しみや患ひを、神よ、我が身の上に與へられんことを」と祈りながら、病人のまはりを三度び廻つた。

この祈りはアラ一の神によつて聞きとゞけられたのであらう、フマーユンは間もなく快癒し、代つてバーバルが死の床に就いた。同じ年、四十八歳を一期として、莫臥兒帝國の始祖バーバルは死

んだ。

フマーユン

バーバルの長子フマーユンは二十二歳の弱冠にして王位に即くことになった。そして彼の弟カームラーンはカプールとパンジャブ地方を治めることになった。これはフマーユンの穏和な性格をよく物語つてゐる。彼は兄弟鬩にせめぐのを好まなかつたので、獨立の野心ある弟にその領土をわけ與へたのであつた。

フマーユンは紳士であつた。教育もあり學藝にも造詣が深かつたが、まだ建國早々の大屋臺を背負ふには、霸氣が足りなかつた。その上、彼は父の暴飲の代りに阿片を喫煙する悪習を身につけてしまつた。罌粟の實の力は人の意志と精力とを鈍らせるものである。フマーユンにとつてもつとも必要な決斷といふ武器は麻薬のために消耗されてしまつてゐた。

決斷を要することはしばしば起つた。フマーユンの王國は、東からビハールのシェル・カンの壓迫があり、西からバハール配下のグジェラト族の叛亂が迫つてゐた。フマーユンは東西にたゞならぬ氣配を見て、いつまでもその真中に身をせばめてゐるわけにいかなかつた。どちらかを先に討

たねばならぬ——こゝに大決斷が要請されてゐた。

彼の優柔不斷は長いこと迷つた末に、まづマルワ地方に兵を進めた。その號令者の性質にも拘らず、ムガール兵はバーバルの薰陶を経た古強者であつた。そこで、忽ちのうちにマルワ地方を席捲してカンベイ海岸に達した。だが、危機はその背後にあつた。

ビハールのシェル・カンはフマーユンの不在を狙つて兵を發した。彼は印度生れの回教徒であつた。自ら王と名乗つてベンガル地方一帯の獨立を宣言した。フマーユンは急遽、軍を轉回させた。だが、その時はもう雨期に入つてゐたので、毎日降りつゞく雨に大洪水がおこつた。これは大軍の糧道を絶つた。フマーユンは僅かに手兵を率ゐて國都アグラに辛うじて辿りついた程であつた。

一五三九年のカノウジの戦ひが彼我の位置を顛倒させた。シェル・カンは五萬の兵を率ゐてアグラ攻略に上つて來た。フマーユンはこれに倍する十萬の軍を集結して、これを迎へ撃たうとした。それは、しかし、無残な敗北であつた。戦ひを決するものは、いつでも前線の一兵の志氣によるものである。フマーユンの軍隊は、「紳士」の總司令官をいたゞいて、いさゝか困惑してゐた。一方シェル・カンの兵は印度に生れた回教徒を首長にして失地奪還の決意に燃えてゐた。こゝに大きな開きがあつた。

フマーユンは一敗地に塗みれると、倉皇と國都アグラに逃げこんだ。彼は王城内にあるめぼしい財寶を持ち出すと、弟のカムラーンの援助を期待して城を捨て、蒙塵した。

カナウジの戦は、かうして王位を決定した。シェル・カンシヤはシェル王となり、またもやアフガン系の王朝がデリーに創立された。

蒙塵と再舉

蓋しフマーユンの生涯ほど數奇を極めたものもあるまい。身はバーバルの長子と生れ、若くしてムガール帝國の王位に登つた。が、その夢のまだ醒めやらぬのに彼は失意の人として、流浪の旅に出なければならなかつた。

彼はまづ助けを弟のカムラーンに乞ふた。が、當のカムラーンはカプールに隱退して、彼の王國は極めて小さくなつてゐた。何故ならば、パンジャブ地方の實權もシェル・シヤに奪はれてゐたからである。してみれば、カムラーン王國もフマーユンにとつては安住の地ではなかつた。

そこで彼はシンド地方を治めてゐた印度王マルデオヒンディーラの援助を求めに、わづか數名の從者をつれて長い旅路にのぼつた。それは恰も果しなく思はれるやうな沙漠を、水と砂塵に苦しめられながら、

横断せねばならない困苦の旅であつた。これが會て印度の主權を握つた王者の道であつたらうか。しかも、フマーユンはシンドの王シヤからもすげない答へしか得られなかつた。

丁度シンドのウマルコットといふ小さな部落に辿りついた時、彼の幾人かの妻の一人である波斯婦人ハミードが男の子を生んだ。フマーユンは、けれども道を急いでゐた。彼はその子をムハマッドと名づけたまゝ、母と子を遺して、同盟者を覓めに旅立つた。

彼はラーシプトの酋長を歴訪したり、或ひは回教藩王を説いて、印度奪還の帥を起さうとしたが誰もいまは孤獨なさすらひ人にすぎないフマーユンを顧りみようとはしなかつた。フマーユンは、かうして長い空しい放浪の果に、カンダハールから波斯へ入つてタマースプ王の許に身を寄せた。——そこに十五年の歳月が流れた。

この間にデリーのアフガン王朝では、初代のシェル・シヤが恐怖政治を布いて、南方や東方の征旅にのぼつた。デリーの主權者が誰しも考へたやうに、彼も亦印度統一を夢みたのだ。そして、カラシヤール城の攻略戦（一五四五年）に戦傷をうけて斃れた。その子サリム・シヤは穩かな政治を旨とし、回教徒を保護したが、僅か八年の治世で死んだ。かくて、一五五三年にはサリムの弟ムハマッド・シヤが即位した。もはや彼の時代には印度史上最後のアフガン王朝も衰退期にあ

つた。それは必ずしも彼の暗愚や逸樂に耽つたのみの罪ではなかつた。廣大な印度を統一することができない主権者には、その勢力圏外の獨立國をどうすることもできなかったのである。この頃には、全印度は五つの王國に分裂しようとする危機に直面してゐた。

そして、強敵が波斯から新鋭な軍とともに來た。

——フマーユンの再擧であつた。

波斯國王の客となつて十五年——營々この日を持つたフマーユンは、波斯王の應援を得て印度回復の帥をおこした。この軍隊は昔日のフマーユンの軍隊ではなかつた。彼自身も茨の道を歩んでいくたの試練を経てゐた。のみならず、彼の側近には有能な軍事家バイラム・カンがゐて、軍の指揮をとつた。

彼等はひた押しにデリーへ進軍した。ほとんど抵抗をうけることなしに、怒濤の進撃が續けられ、一五五五年七月、フマーユンは再びデリーの主権者となつた。——だが、フマーユンが王の椅子にゐたのは僅か半歳にすぎなかつた。一月のある日、彼はこの坐り心地のよい椅子から立ち上つて、階下へ降りようとした。そして書齋の階段から落ちて、その數奇な生涯を閉じた。時に一五五六年のことであつた。奇しくもその父バーベルと同じく四十九歳を一期としたのである。

第十章 アクバール大帝

(千五百五十年——千六百年)

ジャラール・ウツチン・ムハマツド・アクバール

バーベルがデリーの主権者の位置を確保したものとすれば、それを大莫臥兒帝國にまで發展させたのはその孫アクバールの偉業であつた。

ジャラール・ウツチン・ムハマツド・アクバールの生れは、シンド州ウマルコットであつた。彼は父フマーユンが失意のどん底にあつた時、波斯人を母として生れたのである。物心つくまで、彼は母と生れた土地に忍耐してゐた。父のフマーユンが波斯國王の庇護によつて、失地回復の旗上げをする少し前に、彼は父の膝下に呼ばれた。

あまりにも若かつた王子は、しかしまた、あまりに急轉回の生活に入つた。

彼が父を失つたのは十三歳の春であつた。彼は父の信任篤い武將バイラム・カンに従つて、パンジャブ地方を攻略してゐた。計報は直ちに陣中に傳へられたが、喪は發せられなかつた。あまりに

も若年の君主をいたゞくことは、とくに一方の旗頭とも立てられる將軍たちにとつて、とかくの誘惑の種子であつたからである。若いアクバールは、かうして喪を秘したまゝ、軍を纏めてデリーへ還ることにした。だが、攻略を途中で放棄することが、何かたゞならぬものを感じさせた。全軍に不安の念がはびこつて行つた。そこで急に、若いアクバールの即位式があげられることになつた。それはカラナーウルといふ西部のさゝやかな、けれども重要な一小都市で舉行された。彼の部下の不安の念はその實相を知つたことによつて消えさつた。たしかに心理の洞察であつた。

その頃、父王によつて打ち負かされたアフガン王朝の遺臣ヘーム將軍が、遁走したベンガル地方から、フマーユンの死をきゝ知つて兵を擧げアグラ城を陥れ、ついでデリーも彼の手中に落ちた。彼は印度古來の王稱ヴィクラマジチャ（超日王）と自らを稱して獨立の氣勢をあげた。この報道はやがてアクバールの陣中にも傳はつて來た。幾日かの慎重な會議があつた。多くの重要な位置を占めた家臣は、アクバールが印度を放棄して、カプールへ逃れた方がよゝ、と主張した。たゞ一人、武將バイラム・カンは敵と戦ふべきを力説した。アクバールもこれに同意した。

第二回 バニバット戦役

兩軍は必然的に何處かを會戦地として選ばなければならなかつた。そして往年、祖父バールゆるぎない地位を確保させたバニバットの古戰場が、また今度も一役買ふことになつた。

ヘーム將軍は夥しい軍需品と千五百の軍象とからなる大軍をバニバット原頭に配置した。これに對して、アクバールの方は、もともと一部の兵力を割いて出かけた地方掃蕩軍である。所詮、まともな取組んでは勝味は見出し得なかつた。しかし、副將バイラム・カンは正々堂々の布陣をもつて戦ひに臨んだ。僅かに有利なことは若干の火砲があつたことである。

ヘームは印度戦法の古式に則つてまづ象軍を主力として前戦へ繰り出した。激しいいくつかの前哨戦の後、息づまるやうな彼我の弓勢の争ひとなつた。率先指揮に當つてゐたヘーム將軍は、降りそゞく矢弾をもつともせず奮戦したが一矢が不幸にも彼の右眼にさゝつた。指揮者は瞬間倒れた。彼は氣絶したのである。そして叛逆軍は敗走を餘儀なくされた。

氣がついた時には、ヘームの身は敵陣にあつた。夥しい軍需品が、彼等の前に山とつゞ高くつまれて、勝利の凱歌を奏してゐた。今は捕虜となつた敵將は觀念の眼を閉ぢ、深傷に瀕死のあへぎを續けてゐた。アクバールの首腦者たちは、ヘームに死罪を與へるのを時宜に適するものと考へた。が、若いアクバールには自らの手を用ひることはできなかつた。それは年齢の幼さから來る感傷で

はなかつた。アクバールの仁慈の最初の現れと見るべきである。バイラム・カンがヘーム將軍を斬罪に處した。

かくて、アクバールは堂々とアグラとデリーの二つの古都に入城した。奇しくもバニパットの役は再びヒンドスタンの主権者を決定づけたのであつた。しかし、アクバールが遺産としてうけた莫臥兒帝國は、まだベンジャブとデリーとオウド地方を包含してゐるにすぎなかつた。彼はバイラム・カンと計つて、着々と近隣の諸國を攻略した。しばらく戦陣の日々が續いた。アクバールは漸く成長し、天成の資質が磨き出されて來た。彼は生得の武人であると共に、幼年にして既に老練な治世者でもあつた。

老将星達の叛亂

一五六〇年、アクバールは十八歳となつた。これまでのあひだ戰場に、政務に、副將バイラム・カンは攝政として幼いアクバールを助けた。彼はカーンパーバ（父なるカーン）と呼ばれて、アクバールの信倚はもとより、多くの家臣の間にも信望を集めてゐた。何にせよ、王は若かつた。そして實權は悉く彼の手にあつた。獨裁といふこともやればやれた。専制が彼の心にびつたりすれば、そ

れもできた。彼の上にあるのは、幼い王ではないか。

將軍として類稀な才能をもつてゐたバイラム・カンは、性格的にいくらか粗暴であつた。それは勇敢さとか鬪魂といつたものに紙一重しか違ひはなかつた。彼の生涯は戰場の日々であつた。そこで、時に壓制が行はれることもなくはなかつた。

アクバールの多くの家臣は、國家の柱石として缺くことのできない人としては、バイラム・カンを認めてゐたが、政治といふことになると思ひが分れた。それが、人々に對立したものがあつたやうに思はせた。そして後にはほんたうの對立となつた。武斷派と穩和派と——アクバールの道はその二つながらを兼ねたものではあつたが、彼は内治としては後者を探つた。

三月、アクバールはバイラム・カンの攝政職を免じた。そして彼は一書を與へた。自分は貴下の忠誠に凡てを委せて自らの快樂に耽つた。が、これからはみずから萬機を親裁してみようと思ふ。貴下はかねての念願たるメツカへ巡禮の旅に出られよ。——さう書いた後に、アクバールは次のやうに附け加へた。

「バルガナス地方からの収入は、これを貴下の恩給として與へるであらう」
バイラム・カンはメツカへ巡禮を志してベンジャブまで來たときに、ふと心が變つた。今までの

努力があまりにも空しく思はれ、その評價が僅少に感じられた。彼は王の反省をうながすために兵を發した。それとても一族郎黨のともがらに過ぎない。

アクバールは都でこの企をきき怒つて討伐軍を差しむけた。勝敗は問題にならない、バイラム・カンの兵は敗退し、彼は王の捕虜となつた。しかし、アクバールは恩情をもつて叛逆を許した。そこで、バイラム・カンはほんたうにメツカへの旅についたが、その道程で一アフガン人のために暗殺された。このアフガン人は彼のために父を失つたといふ悲しみを、復讐をとげたことによつて和げたのである。

第二の叛亂があつた。それはベンガル州の攻略戦である。ベンガルの支配者はアフガン王シエル・シャー二世であつた爲め、アクバールとしては、これを倒さねばならなかつた。恰もそれと期を同じうして、シエル・シャー二世も若き皇帝アクバールを失墜せしめようと軍隊を移動させた。

アクバールは老將軍ザマニ・シャイバニを送つてこれを邀撃させた。この合戦の結果もムガール軍の勝利であつた。が、尨大な戦利品と豊沃な占領地とは、シャイバニ將軍の心を動揺させた。やがて彼はこれを私して小王國の主を夢みるに至つた。アクバールは自ら征討軍の先頭に立ち、昔の部下とまさに一戦を交へようとするとき、シャイバニ將軍は己の非をさとつた。寛容なアクバール

は彼の擧兵をとがめず、ジャウンプールの大守に任じることにした。

第三の叛亂はマルワに起つた。マルワ攻略戦の指揮官アダム・カン將軍も戦捷に心驕ぶり、戦利品に垂涎して、叛旗をひるがへした。が、既に先例はいつでも叛軍の敗北であつたことに鑑み、彼は賢明にも直ちに王の宥怒を乞ふた。アクバールはもとよりこれを許して、都へ歸還させた。しかし一度び叛意を包藏した彼の心は平靜であり得なかつた、やがて、彼の周圍には陰謀がたくまれることになつた。このたびは、アクバールも彼の身體を保護する譯にはいかない。王宮内のかういふ企を後日に患ひさせぬために、彼はアダム・カンを斬殺に處した。アダム・カンの母は彼女の息子の死をきいて悶死した。このことがアクバールの耳に入ると、彼は母子の遺骸を厚く葬り、立派な墓を建立して後世を葬つた。すべてはアクバールの宥和な心がさせた美しいことどもであつた。これは一五六一年の出来事であつた。

第四、第五の叛亂はこれから三年ほど経つたカン・ザーマン將軍と、アサフ・カン將軍の獨立運動であつた。その部下に使喚され、自らの地位に甘へ、矯激な手段をとつたこれらの將軍達は相次いで、アクバールの恩威並び行ふ大きな精神の下に平伏した。彼等は前非を悔いてゐるのだから許すべきである——といつてもアクバールは考へるのであつた。

若くして王となつたアクバールの越えねばならぬ茨の道は、かうして珍らしく血潮の香をかぐことなくして行はれた。既に國內は整然たる帝國の姿を示して來た。そして今や、彼は王から皇帝に、大帝に飛躍すべき秋であつた。

南船北馬——全印統一への道

その最初の征討は攝政バイラム・カンの罷免直後に行はれたラージプタナのアジュミールから始まる一聯の工作であつた。彼はアジュミールの王を訪れて、その娘マリアム・ザマーニと結婚した。これがアクバールのしばしば用ひた無血の統合政策の始めであつた。印度王を融和しつゝ、彼の軍は威令に服しない回教藩王の討伐に向つた。一五六二年春、ジャイマル王とデヴィ・ダス王の二王聯合の要塞ミルタを攻圍して、白旗をかゝげさせることに成功した。

ラージプタナと南方印度は歴代の印度王の痛であつた。前者は堅固な要塞と剽悍な民族的抵抗が見られ、後者には自然の要害と野性の逞しい力が蓄へられてゐた。アクバールは先づ前者から着手したのである。

一五六七年の十一月から一五六八年三月まで、丸四ヶ月間包圍したチトール要塞戦がこれであつ

た。この戦ひにはアクバール自ら陣頭に立つた。さうして、彼自らの矢で敵將の頭を射抜いたと傳へられてゐる。續いてランタムポール及びカラシヤールの二城もアクバールの前に開城せざるを得なかつた。ラージプタナの藩王は争つてその女をアクバールに獻じた。アクバールも亦これを容れて、もつてヒンヅー教徒との和合を計つた。この餘勢を驅つて、ムガール軍は一五七〇年にはオウドとグワリオールを抜いた。北印はこゝにしばらく安定されることになつた。そして新しい出發が待つてゐた！

アクバールの腦中の地圖には、まだグジュラートが從來のまゝに残されてあつた。曾て父フマーンが一度びはその足跡を印した國々であるが、彼等は征服軍が潮のやうに立ち去ると、執拗に反抗し獨立國家として氣勢をあげてゐた。グジュラート——それは西印度の海への出口である。征服せねばならぬ要衝であつた。即ち、アクバールは軍を進めた。そして既にその武威を喧傳されてゐたムガール軍は、ほとんど大きな抵抗をうけることはなかつた。戦ひの大詰に勇らしくないムザッファール王は穀物畑に蟄伏して、難を逃れようとしたところを發見された。これは確かに喜劇であつた。アクバールはいつものやうに彼を斬すことには寛大であつたが、月々僅かに三、四十ルピーの扶助金しか與へなかつた。數年ならずしてこの扶助金受領者は困苦をなめて自殺した——これは苛酷で

あつたらうか。アクバールには卑怯な振舞に對する激しい憎悪があつたことを知るべきである。

スラトの海岸にムガル軍が達したのは一五七三年であつた。アクバールはカンベいの海岸でしみじみと海を見た。これが印度の海なのだ。——莫臥兒帝國は領海をもつことになつたのである。永い間の夢が實現したアクバールは、同じ年の七月、大きな満足と尠からざる戦利品をもつて國都アグラの近郊シクリの王居に還つた。するとアーマドバードに動亂が勃發したことが報告された。アクバールは憩ふ暇もなく出發した。シクリと目的地まで約八百哩の行程を彼は九日間で突破した。これはその頃としては異常に神速な行動とされたのである。強勢を傳へられた叛徒はアクバールの突然の出現に、激戦の後に敗退した。アクバールは十月六日シクリへ晴の歸還をした。この間實に四十三日に過ぎなかつた。

これからアクバールの南北兩域に互る非凡な戦ひの繪巻物がくりひろげられるのである。一五七六年には騷亂つねならざるベンガル州に征討軍を送つて、これを完全に鎮壓し、アフガン人を追放したかと思ふと、オリツサを合併し（一五七八年）、またカブールを支配してゐたアクバールの兄ミルザの王位をねらふ野望をくじき（一五八二年）、その後ミルザの死によつてカブールを合併し（一五八五年七月）、同時に著しく西北に延びた版圖のために、ラホールへ遷都を行ふことになつ

た。

一五八六年にはカシュミールの征服を志した。この地は祖父のバールも父のフマーユンも志して成らなかつた天然の要害であつた。アクバールはヒンドスタン平原一帯を手中に收めるまでは山地へは一指も觸れなかつたが、遂に雄圖なる日が來たのである。カシュミールは一氣に攻略された。やがてシンド地方の併合（一五九二年）と波斯領カンダハールの征服（一五九四年）とによつて、アクバールの版圖は印度史中もつとも宏壯かつ雄大なものとなつた。もはや向ふところは南部印度だけとなつた。

一五九五年、アクバールは次子ムラドを將として南印掃蕩を命じた。ムガル軍は長い戦ひの記録にもう一つの金星を加へようとして勇み立つたが、デッカン高原での戦ひははかばかしくなかつた。當時アーマドナガルには女ながらも傑出した人物がゐた。女將チャンド・ビヒはムガル軍來襲の報を得ると、ビジャプールその他回教諸國と聯合して、これを邀へ撃つ手配を整へた。そこへしばらく強敵から遠ざかつてゐたムガル軍が到着した。アーマドナガルは四ヶ月も、攻めて攻めて攻めあげたが、陥ちなかつた。のみならず、ムガル軍は敵の勇敢な邀撃によつて尠からず損傷を蒙つた。攻めあぐんだムラドは窮狀を都の父アクバール大帝に訴へた。アクバールは直ちに老練の

武將アブル・ファズルを派遣した。

ファズル將軍の到着はたしかに一轉機となつた。ムガール軍はデッカ軍と和睦することになつたからである。しかし、これは武器を懐中に入れたまゝの平和であつた。デッカ軍の歸順は表面だけのことで、間もなく叛旗が城頭高く風にひるがへつた。アクバールは南方作戦を重要視してゐたので、直ちに都をアグラに移して、一五九九年自らデッカに馬を進めた。その途次、叛軍に組した彼の屬國カンデシ王國を征討し、アーマドナガルの包圍戦を終結させた。アーマドナガル開城の報道はビジャプール、ゴルコンダ等の諸王をして莫臥兒帝國に忠誠を誓はしめた。アクバールはアブル・ファズルを總督として駐在させ、急いでアグラに戻らなければならぬ緊急事を懐いてゐた。アクバールの歸途は暗かつた。

彼の長子サリムが父に對抗する兵を發したといふのである。アクバールは、しみじみ老いを感じた、道すがら、サリムの行動は次々と知らせられた。叛軍はアグラに向つたが防備堅く、これを抜けなかつた。アラハバードに闖入したサリムの手兵八千騎は無道な掠奪を行つてゐた。

サリムはアジュミールの總督として派遣されてゐたのであつた。彼はもはや不惑に近い年配となつてゐた。そしていくらか帝王の椅子が待ち遠しかつたのである。彼は大酒をつねとしてゐた。そ

こで亂酔のときなど、不敵な想念がしばしば彼の腦裡にひらめいた。彼の周圍には主人と同じ酒豪の——そしてそれだけが取り柄の、家臣が控へてゐた。従つて一夕の宴から、このやうな大それた反抗が行はれたと言はれなくもないのである。

アクバールは軍を進めながらも悩んだ。サリムは長子ではあり、次子のムラドも末子のダーニヤールも死んだ今日となつては、大切な彼の大帝國の後繼者であるのだ、何れはみんなお前のものになるのではないか。それが解らぬ子供がむしろいちらかつた。彼は長い哀切な手紙を書いて、子供の誤りをさとし飄意を求めた。

亂酔の後の一場の悪夢のやうに、サリムも覺醒した。そして改めて父王に恭順を誓ひ、父の慈愛に縋つた。アクバールはアグラに歸ると彼に、ベンガル及びオリツサの二州を興へた。そして、デッカの總督ファズルの歸還を命じた。

許されたサリムにとつてファズルの歸還は暗合とは考へられなかつた。彼は再三父の心を忖度し遂には——これはファズルに自分を討たせるつもりに相違ない、と盲信するやうになつた。そしてこの邪推から發した疑惑のために、ファズルの歸途を擁してこれを暗殺させた。

アクバールはこの悲報に接しても、どうすることもできなかつた。それほど彼は老いてゐた。も

はや六十路の人であつた。

アクバールの政策

アクバールの對外政策が一種の姻婚政策であつたことは前にも書いた。が、彼の政策がこれまでの史上に現はれたいくつかのそれと根本的に異つてゐるのは、姻婚によつて關係づけられた印度教徒を進んで登用したことである。この政策は後には才能ある印度人の思ひ切つた拔擢となつた。彼はヒンヅー教徒と回教徒との對立を融和しようとして試みたのである。そのために、彼自身回教徒であるので、進んで歸順したヒンヅー藩主（フナジヤ）の女をいれて妃とした。このことは、やがて歸順せんと願ふものが女を獻じて和を乞ふことになり、アクバールの後宮には五千人の妃がゐたと誌す記録もある。

註*

アクバールの親炙したアブル・フアズルの誌すところであるが、五千といふ数字は勿論形容詞と見るべきである。後宮に多くの女を置くことは歴代の回教王の行つたことであるが、アクバールの後宮には掠奪された婦女子の存在が絶えてなつたのは、結果に於て大同小異であるといひ乍ら、その開きたるや大なるものがある。

これらの印度婦人に接することによつて、アクバールはアリヤンの古習を學びとつた。彼は考へた。すくなくとも従来よりはヒンヅー教徒を優遇せねばならぬ、と。これが回印調和の捷徑である、と。そして、回教徒以外のもの（即ちヒンヅー教徒）に課せられてゐた人頭税（ジャヤ）の撤廢を宣言した（一五六三年）。これは回教徒の初期侵入以來引續いてゐた悪税であつた。そして印度古來の文明、例へば建築様式なども採り入れてこれを回教寺院に導入したりした。回教徒的な偏見を拋棄させるためであつた。

彼は始め都をアグラに置いたが、愛妻マリヤム・ザーマニがシクリの王宮で二兒を擧げたので、これを祝つてこの地をファテプル・シクリ（勝利の町）と呼び、大宮殿を營み妃のためにヒンヅー様式の後宮（ハジマ）を建造し、ヒンヅー教禮拜所を附屬させた。後に、カプールを併合した時に、ラホールに遷都し（一五八五年十一月）、十三年間を西北部の統治に費した。更に後年（一五九八年）に及んで、デッカへ兵を送つたため、三度び中央に遷都し最初のアグラに戻つた。

この三度びの遷都は、いつも都を軍の指揮に屈強な地點に定めたものではあつたが、同時にアクバールにとつて異つた民俗を知り、民情を解するに役立つたことは否めない。

アクバールの大領土、それは曾てない廣範なものである。東はベンガル灣から西は亞刺比亞灣に到り、北はカブール一帯のアフガン地帯から南はデッカに及ぶ——これが莫臥兒帝國であつた。その中には、前人のなし得なかつたカシュミール、カンダハールなどの併合もあつた。

そこでアクバールは、この大版圖を治めるのに、その帝國を州に分け、各州には大守又は副王を置き、ジャイギルダルと呼んだ州軍隊を統率せしめた。莫臥兒帝國の州は次のやうに分けられてあつた。ベンガル、ビハール、アラハバード、オウド、アグラ、デリー、ラホール、ムルタン、アジユミール、グジュラート、マルワ、カブール、カンデシ、ペラール、アーマドナガルの十五州である。

各州には司法警察の事務を司る法官を置き、中央政府の大法官に直屬してゐた。收税の事務には各地のザミンダル（租税徴收請負人）が當り、全物産の三分の一を徴收し、中央政府の大藏大臣によつて統轄されてゐた。

以上の地方制度がアクバールの三權分立政治であつた。從來の地方藩侯にしばしば見る叛亂は、必要以上に、大守の權力が擴大されたことに外ならなかつた。アクバールは地方統治に軍隊、司法、財政の三權を各別に獨立機關とすることによつて、互に相犯すことを戒めた。のみならず、彼は大守を始め諸官吏に土地を與へることを廢して、これに代へる俸給制度を確立したのである。

更に劃期的な政治としては、回教徒とヒンヅー教徒とを行政機關の各地に交封したことである。即ち回教徒の大守の隣州にはヒンヅー教出身の大守を置いて、互にその勢力を牽制せしめたのである。このことは上述の三權分立にあつても、同じ意味で回印兩教徒を併用してゐるのであつた。幼にして流浪漂泊の身となり、戰場を搖籃として育ち、鮮血を吸つて成人したアクバールに、どうしてかやうな成果が爲されたのであらうか、一介の武辨の如き彼の生ひ立ちにひそんでゐた政治力こそ、彼アクバールを大帝として、阿育王以後の印度統一の大業をなさしめたのであつた。アクバールの秘訣は獨斷專制の回教政治と、共和制を敷き公議衆論に俟つヒンヅー主義との美しい調和にあつた。かくて、年收五億ルピーを超える大帝國がここに確立されたのである。

新國教「ジン・イラヒ」と國語の制定

民族統一を理想としたアクバールにとつて、回教とヒンヅー教とにその國民が分れてゐることは何よりの障害であると言へた。のみならず、アクバールは回教々理の中に或る種の虛妄さへ感じてゐた。そしてどちらかと言へばヒンヅー教に心を惹かれてゐた。

彼の周圍にはアラビヤ人の血を享けたアブル・ファズル、シャケク・ファジーの兄弟がゐた。彼

等は宗教文學の師としてまた政治の顧問として、アクバールの信任厚いものがあつた。回印調和といふアクバールの大精神も、この二人の影響によつて育まれたものと見ることが出来る。アクバールはまづ回教に於ける宗教上の問題は、帝國の規程に従ふべきものであるといふ確信に到達した。これが最初の宗教改革であつた、一五七〇年、彼は次のやうな教令を制定した。

「回教の王、回教徒の王、現世に於ける神の影像——アクバールは、至正至賢にして最も神を畏るゝ敬虔なる王である。それ故、將來に於て宗教問題が起り、神學者の意見が不一致なる場合に際し、王が炯眼叡智をもつて、全國民の福利のために又政治上の施設として、多岐に分れたる意見のうち、何れか一つを採用し、その旨勅令を發布せる場合には、王及び全國民はこれを遵奉する義務がある。

又布告す。若し王にして新令を發布するの意ある場合には、王及び全國民は又これを遵奉するの義務がある。但しかくの如き新令は、コーランの章節および全國民の福祉と牴觸すべきものであつてはならぬ。

更に又布告す。全國民にして王のかくの如き命令に違背するものは、現世に於ては財産を没

收せられ、來世に於ては永劫の責苦をうくるべく、彼等の宗教上の特權は剝奪せらるゝものと知るべし」

一方、彼はヒンヅー教の惡習と見られるものも假借なく禁止した。幼婚と呼ばれたもの、夫の死に妻の殉するサチーの風習——等がこれであつた。前者に對しては、十四歳以下の男女の結婚を禁止し、後者には火に焚かれるべき婦女の同意を確かめて、始めて自發的な殉死を許可した。

この間にも、彼の心の中には徐々にではあつたが、新しい想念が形づくられてゐた。回印兩教の精をとつて、新しい宗教——國教を定めようとした。こゝに於て、彼は回教々義を基本として、これにヒンヅー教の長所をとり入れた新宗教を案出した。その主題は、

「アラターの他に神なく、アクバールはその豫言者なり」

といふにあつた。そして、教團を作り、これを「ジン・イラヒ」(神聖信念)と命名した。

アクバール自らアラターの豫言者として、國民の保護とその安寧幸福を圖るために地上に差し遣はされたものとし、廷臣及び官吏はすべてこの教團に屬すべきことが希望された。國教はまづ宮廷から盛んになり、やがて回教徒はもとより、ヒンヅー教徒の間にも浸潤して行つた。アクバールはこ

の教團には、種姓の如何を問はず、階級の差別を認めなかつた。

しかし、この國教は一部の正統派の回教徒からは不満をもつて見られた。またヒンヅー教徒の中でも婆羅門階級は種姓を破壊するものとして白眼視した。しかし、アクバールの威力は、さういふ不満が底流となつて流れただけで、表だつた反對に出るわけにはいかなかつた。それ故、後に至ると「ジン・イラヒ」は白晝夢のやうに崩壊した。

啓示なくして宗教を作ることの儂さ——後世の史家はこのことをアクバールの「馬鹿げた虚榮の産物、無制限な専制の大きな結果」としてゐるが、アクバールはもとより「宗教製造の實驗」については、その結果よりもさうすることによつて回教王として、カリフと同權であり得る彼自身の存在を重視してゐたのである。

アクバールの宮廷にはファズル兄弟を始めとして、回教徒、ヒンヅー教徒、拜火教徒、のちにはゴアにゐたポルトガルの宣教師もゐた。アクバールはそれらの人々から宗教的な談話をきくことを何よりの愉しみとしてゐた。

また國都ファテプル・シクリに王立圖書館を設けて、文教の發達を圖るとともに、國語としてヒンドスタニー語を制定した。宗教と同じく言葉も統一されるべきであつた。印度人がヒンヅー語を

回教徒が波斯語を、そしてアフガン人がバターン語を用ひてゐることは、不便といふことばかりでなく、精神の表現としての言語に標準を興へなければならぬことであつた。そこで、古來から傳つたアリヤン語を單純化し、波斯語の複雑な部分を除き、この二つの組合せによつてヒンドスタニー語が生れた。

そして、彼はこの現代語の上に、多くの古典を移植した。サンスクリットの文獻も、波斯、アラビアの古典も翻譯され、三萬四千冊の寫本として綴られた。この價格およそ六百五十萬ルピーに達したと言はれる。

彼はまた音楽や繪畫を愛した。莫臥兒朝美術は彼に始まつて、その二代の後、シャー・ジャハンのタジ・マハールによつて極つたといふべきであらう。

しかし、悲しいことには、仁慈かつ英邁の大帝アクバールにして、なほ目に一丁字もなかつた。彼はおそらく自らの名前をしるすこともできなかつた、と傳へてゐる。戦塵倉忙の中に生育した彼のあはたゞしい羈旅の日に、どうして文字に親しむ暇があつたらう！

その彼が、如何にして宗教、國語、藝術などに、理解と愛情とを懐くことができたであらうか。彼は自ら文盲の缺點を補ふに耳をもつてした。日夜彼の傍には朗讀者がはべつて、彼に讀みかせ

た。そして彼の記憶力は、それ故に、驚くべきものがあつた。

すべては前人未踏の道であつた。アクバールは大莫臥兒帝國を創造して、一六〇五年（皇紀二二六五年）十月十七日、六十三歳をもつて死んだ。そして、もはやその頃には、西歐の印度進出——就中英國の侵略の手が犇々と莫臥兒帝國の周圍をとりまき始めてゐたのである。

第十二章 英國東印度會社と莫臥兒帝國の盛衰

（千六百年——千七百四十年）

香料の魅惑

十七世紀の英國は決してまだ「大國」と呼ばれるべきものではなかつた。海軍といつてもほとんど名だけのもので、小さな島國の一小王國の採用した方法は「海賊」による富の將來であつた。これがエリザベス朝の英國の狀態である。彼女の缺點は彼女が男性でないだけである——と言はれた女王エリザベスは、その晩年に於ても、一會ては自然のままだつた色に「なほその白髪を染め、眞珠やダイヤモンドや、金銀のごてごてした飾りを身につけてゐたいやらしい物欲旺盛な女王であつた。海賊ドレークが掠奪して來た財寶を見ると、忽ち彼を貴族に列して、海軍の司令官を命ずるといふ秩序も倫理も無視した國柄であつた。

ドレークは一擧に非合法の中に躍りこんだ。二艘の船と五十人の人間とで、かのスペイン方

のいちばん堅固な各所を襲撃した。そして、その小さな船に黄金とダイヤモンドを満載して、プリマスへ送り返した。……ドレークはドリアン地峡に上陸し、ベルーから金を持つて来た驛馬の一隊を襲ひ、護衛を散々に叩きのめした擧句、その財寶を掠奪した。この冒険は、内々エリザベスの心を魅した。……エリザベスは平和の際には依然あの友邦たる強國に對するかういふ侵害を表向き叱責してゐたが、しかし、いざ分捕品に對する自分の分け前を要求する段になると、決して熱心でないわけではなかつた。

(モロア「英國史」)

そして、ドレークのやうに一旗あげたいものだとその「海洋國民」の誰もが考へてゐた。

——そこに、香料の問題があつた。

香料は貯藏肉や乾肉を主な食糧とする冬の期間には缺くことのできないものだつた。そして、ヴァスコ・ダ・ガマの到着からポルトガル人　まうしてオランダ人の進出となつて、東洋の香料はオランダ商人の手に獨占されてゐた、リスボンの商店街に印度更紗やモスリンが山と積まれたり、オランダのアムステルダム市の街に強烈な南の丁子の香が溢れるに及んで、英國商人の羨望は極點

に達した。

一五九九年の初頭、一封度が三シリングであつた胡椒の値段を、同じ年の夏には、オランダ商人は一擧に一封度六シル乃至八シリングに値上げをした。獨占貨物のもつ魅力であつた。

ロンドンの商人達は狼狽した。この先き、いかに吊り上げられようとも、香料は買ひいれない譯にはいかなかつた。對策を構ふる集會が各所で開かれた。一致した意見といふのは、我々も冒険を犯して香料をぢかに南洋諸國と取引しようではないか、といふのであつた。そこで彼等は議會へ陳情した。だが、議會は印度だの、南洋だの、モルッカ群島などといふ所には興味をもたなかつたのでこの陳情は却下されてしまつた。

商人達は最後の手段として、直接エリザベス女王の勅許を得ることに奔走した。新奇を好むエリザベス女王には、この東印度會社がやがて齎らすであらう利益についても、興味をもたない譯にはいかなかつた。のみならず、彼女は未來の掠奪品を懐しめるばかりか、失ふものは何一つとしてないのであつた。危険は商人達の負擔であつた。彼女はたゞ彼等に貿易獨占を許可しさえすればいいのである。

一六〇〇年十二月三十一日、十七世紀の最後の日に、エリザベス女王は特許狀を下付した。二百

十四名の歎願者から、カンバーランド伯以下二十四人が選ばれて重役となり、英國東印度會社（正確には、東印度貿易ロンドン商人組合）が成立した。

この會社はポルトガル人およびオランダ人との武力的對立に入り込まざるを得なかつた。ソ
ロルド・ロジャーズは書いてゐる「王朝の戦ひにおけるよりも、丁子の^{チベット}ことで、一層多くの血
が流された」と。これらの大會社の組織——それは征服慾と商業慾とを一齊にかき立てた——
は、植民のあらゆる形態のうち、土人にとつては最も危険なものであり、自國の政府にとつて
は最も御しくいものであつた。

（モロア「英國史」）

確かに彼等は流血の慘劇をくり返しつつ航海を續けた。何故ならば、ロンドンでは平和な商人で
も一度び海へ出ると忽ち「海賊」に早變りしたからである。

二、三の航海に就て

用意は迅速に行はれて、一六〇一年二月には第一回の掠奪船隊を組織した。四月二十二日、經驗
を積んだ海賊ジェームス・ランカスターを指揮官として四艘の商船が、それに「相應しからぬ武
装」をして、アフリカを迂回する航海についた。

確かに、これは充分すぎた武装であつた。四隻の船のうち、ドラゴン號（六〇〇噸）にはドミ・
キャノン砲二門、長砲十六門、半長砲十二門、サレクス砲八門——合計三十八門の大砲と三二〇發
の砲彈が「まさかの時」のために用意されてゐた。その他、ヘクトル號（三〇〇噸）、アセツシ
ン號（二六〇噸）、スザン號（二四〇噸）の三隻にも二十四門づつ合計八十四門の大砲が備へられ
てあつた。つまりこの商船隊は百十門の大砲に砲彈約二千發をもつて、目指す大洋へ出發したので
ある。もつとも、他にも若干の荷物はあつた。それはピストル、勳章、手鏡、スプーン、玩具、眼
鏡などで、何れ東洋へ着いたらその地の王侯や側近者に對する子供だましな贈物となる筈のもので
あつた。

船隊はやがてアフリカ西岸ギニア沖に差しかかつた。すると「まさかの場合」があつたのである。
彼等は直ちに海賊の本性を現はして、「相應しからぬ武装」の力によつて、ポルトガル船一隻を捕獲
してしまつた。交易によらないこの片貿易は頗る彼等の氣に入つたので、それからといふものは手

あたり次第に、海賊行爲を續けて行つた。彼等はスマトラ島アチンへ着き（一六〇二年五月）、印度へは寄らないで、ヤガて二年半といふ長い音信不通の後に、一六〇三年六月、四艘のうちアセツション號とスザン號が胡椒を満載して歸つて來た。（あとの二艘は遅れて十一月に歸航した）。株主への配當は一六〇六年といふ驚くべき成績で、危険をかけた商業の妙味をひやひやしながら満喫したのであつた。

第二回の航海はヘンリー・ミドルトンの指揮により一六〇四年に出發し、一六〇六年に歸航したが、このたびは四艘のうち一艘を失つたので、その利益率は九五パーセントであつた。だが、この時も印度へは寄らなかつた。

第三回目の航海は三艘であつた。キーリングを指揮官とする船隊は一六〇七年一月四日に出航して、スマトラ、ジャワ、バング、モルッカ群島を経て、印度西海岸の港スラトに錨を下した。そして船列は再び英國に向ひ、一六〇九年から一六一〇年五月までに三艘とも歸航した。この回の利益率は實に二三四パーセントにのぼつた。だが、この時、ホーキンスといふ一人の船長が歸らなかつた。彼はある任務を帯びてゐたので、しばらく印度にとどまることとなつてゐた。

ホーキンスの任務——それは莫臥兒帝國との通商條約の取りきめであつた。しかしスラトにある

彼の身邊には先占權を主張するポルトガル人の厳しい監視の眼が光つて、到底地方官權との交渉など思ひもよらなかつた。そこで彼は意を決した。一六〇九年二月、彼は單身、國都アグラへ向つて行つた。四月、彼はアグラに到着した。

彼は秘かにアグラ市中に隠れて、まづ諸般の事情を探らうとしたが、その暇もなく莫臥兒帝國政府からの出頭命令をうけとらなければならなかつた。諜報網の整備されてゐたことは、その當時として驚くべきほどであつた。

世界の征服者

アクバール大帝の後繼者はたつた一人生残つた長子サリム（一六〇五年——一六二七年）であつた。彼は自分の子供のクスルと王位を争はなければならなかつた。と言ふのは、故大帝の正しい意志はクスルに相續させることであつたのだ、と主張する一派があつたからである。しかし、これはラージプトの藩侯の調停によつて、血腥ぐさい光景を見ずに済んだ。彼は即位して自らをジャハンギール「世界の征服者」と呼んだ。

彼は不惑を越して王位を即いだが、それでも二十二年間、帝國を統治した。彼は正統派の回教徒

として、アクバール大帝の遺した新宗教の教團「ジン・イラヒ」を弾壓した。それは先帝が特に起用してゐたヒンヅー教徒の重臣たちへの示威でもあつた。

彼はまた先考の爲す能はなかつた南方征服を志すことによつて、その抱負を示さうとしてゐた。折からデッカンのアーマドナガルの宰相マリク・アンバーは兵を起して獨立の氣勢を示してゐた。ジャハンギールは子クスルを代理として、これを討伐しその餘力を驅つて南方進出を命じた。しかしデッカンの兵は守るに堅く、攻めてはしばしばムガール軍を敗つた。クスルは止むなく一時兵を收めると見せかけて、油斷したデッカン軍を急襲して遂に大勝を博した。

退いたデッカン軍は、ビジャプール、ゴルコンダの二國と同盟を結び、ムガールの大軍を邀へ撃つ態を整へた。

ムガール軍は十萬を超える馬、駱駝、象と、五十萬の兵とをもつて進軍したが、同盟軍のために兵站線を破られ、糧道を絶たれた。飲料水と食料品の缺亡はかういふ大軍にとつては致命的であつた。わづかな小競合ひだけで、ムガール軍は退却しなければならなかつたが、それでも三萬の馬と相當の兵力を失つてゐた。

ホーキンスがジャハンギールの前に現はれたのは、丁度この頃のことであつた。「才能あるヨツ

バラヒ」と言はれたジャハンギールは、若い日の暴飲と耽溺のために喘息の發作に苦しんでゐた。發作が止めば、彼は忘れたやうに酒池肉林に遊んだ。ジャハンギールは謂はゞ酒の肴にホーキンスを召し出したのであつた。

親の代からの海賊であつた船長ホーキンスの話は、まるで千夜一夜のシンドバッドのやうに、珍らしい逸話や、特異な風習、異國の風俗などの話題に富んでゐた。かうして、ホーキンスは皇帝の賓客となつて幾日かを過ごした。

機嫌の良いときを見計らつて、彼には切り出さねばならぬ用件があつた。彼は恐る恐るジャハンギールに、英國のために通商を開始し、商館の設置を許可していただきたい、と頼んだ。

ジャハンギールはこの豊富な見聞をもつ話上手な辯論を離したくなかつた。そこで、若し彼がアグラに永住するならば、許可もしよう、と答へた。ホーキンスは即答もできずに退出した。彼の心は恐らく千々に亂れたことであらう。しかし、彼は使命のためには忠實であつたし、皇帝側近に侍するアルメニア女の蠱惑的な小麦色の肌にも未練があつた。そこで、ホーキンスはアグラに永住することに決し、その代り東印度會社はスラトに商館設立の許可を得た。彼は宮廷では「英國卿」と呼ばれ、皇帝の寵を擅にした。

「私は今や得意の絶頂にあつた。しかしイエズス會宣教師とポルトガル人は眠つてはゐなかつた。彼等はあらゆる手段をもつて、私の破滅を計つた。また皇帝側近の重臣である回教徒達も一キリスト教徒が、あまりにも皇帝に近づくことは好まなかつた」

(サミエル・パーチャス)

と彼自らが語つてゐるやうに、皇帝に特に愛せられることは禁物であつた。そねむのは回教徒の重臣たちばかりではなかつた。陰謀の巢であつたジャハンギールの宮廷には、その元締のやうに一世の美を誇る王妃ヌール・ジャハン(世界の光)の専横と嫉妬があつた。

王妃ヌール・ジャハンは貧しい波斯人の家に生れたが、美貌の故をもつて夙にサリム(ジャハンギール)王子の寵愛するところとなつた。しかし、これはアクバール大帝の望まないところであつたので、ヌールはサリムと別れベンガルの要職にあつた一軍人の妻とされた。その後、ジャハンギール皇帝となつたサリムは昔日の夢を追ふて、ヌールを後宮に入れ、離婚に應じなかつたその夫は殺害された。

彼女が再びジャハンギールと結婚した年(一六一一年)以來、彼女の父も三人の兄弟もそれぞれ樞要の地位についた。そして、彼女は喘息病みの老夫に萬一のことがあつても、女王として王座に坐るための足場を作つてゐた。男でもよくは爲し得ない努力によつて、彼女は宮廷の陰謀の中心となつた。

ジャハンギールの晩年には、彼はたゞ一個の「アルコールの奴隷」に過ぎなかつた。もはや國務を見ることも煩はしなかつた。それ故、宮中には族鬪、叛亂、地位の取引、またその和睦——といふやうなもつれた網が張りめぐらされてあつた。そして、王妃ヌールの嫉妬心と心中の陰謀とは、邪魔になる繼子のクスルや英人のホーキンスなどを底よく追放してしまつた。即ち、ホーキンスは一六一一年十一月、その小麦色の夫人とともに歸英の途に上つた。クスルは南方軍の司令官として國都を離れねばならなかつたのは前述の通りであつた。

しかし、ヌール王妃の専斷は陣中のクスルにも傳へられた。彼は非常手段をとることのみが、これの解決であると思ふやうになつた。そしてマンヅに據つて兵を擧げ、心ならずも父王の軍隊と戦はねばならなかつた。

クスルが南方の戦線から東海岸に出て、オリッサを経てベンガル州を進み、ビハールを降して國

都アグラに迫つたときに宮廷では勲功あつた將軍マハベット・カンの亂（一六二六年）が起つた。この老巧な將軍はジャハンギールと王妃を捕へて、これを監禁した。老齡の王はその翌年の十月に死んだ。叛亂者はクスルの軍の迫るに及んで退却したので、クスルは一六二八年二月にはアグラへ入城し、正式に王位を踐むことを宣言した。

タジ・マハール

クスルは即位してシャール・ジャハン（一六二七年——一六五八年、一六六六年死）と名のつたがこの呼び方よりも世人には、タジ・マハールの創建者としての方が有名であるかも知れない。

シャール・ジャハンの最初になすべきことはヌール・ジャハン一味の清掃であつた。財寶の壟斷が目的であつた彼女らには、巨額の恩給を與へて一私人とした。これによつて所謂宮廷黨の絶滅を計ることができた。次に彼は、彼と同じく王位を窺ふに足る權利をもつ異母弟を、或ひは殺し、追放して彼の地位を鞏固ならしめた。

彼の内治は穩かであつた。といふのは、先考ほどヒンヅー教徒を迫害もしなかつたが、祖父アクバール大帝のやうに特に回印の調和を計ることもしなかつた。莫臥兒帝國の全盛時代 國にも人

にも何か彌漫した倦怠感のある時代であつた。

だが、軍事は依然として南方の戦線で行はれてゐた。一人の叛將が口火を切つた。それはジャハン・コジ將軍であつた。彼は新帝に快からず、ひそかに南方のアーマドナガルと款を通じたので、シャール・ジャハンに討伐軍を出した。南方では、曾ての同盟は破れて、アーマドナガル對ビジャパール・ゴルコンダ二國の間に大きな龜裂があつた。そこでムガール軍は後者と聯繫を保ちつゝ、アーマドナガルを容易に攻略した。叛いた將軍はカランジャールの激戦のときに倒れた。そして、ビジャパールもゴルコンダも莫臥兒帝國の朝貢國となつた。これは大きな成功であつた。

一方には、また大きな損失もあつた。それはカンダハール地方を失つたことと、今日のアフガンの大部分にその勢力を失墜してしまつたことである。先考の世に既に失つたカンダハールは一時ムガール軍によつて恢復したが、一六五三年には波斯人が強引にこれを奪つた。シャール・ジャハンに好戰的な精神があつたならば、奪回もまた不可能ではなかつた。が、彼は平和を愛した。のみならず疊々たる山脈の彼方にある邊境に、彼はあまり愛着をもたなかつたのも事實であつた。

彼の主力は専ら内治に向けられ、税制の整理と産業の保護によつて、比類ない國庫収入をあげることができた。まさしく黄金時代が出現したのである。

彼は愛妃アルジマンド・バーノの死を悲しんで、絢爛壯麗な大廟をアグラに建立した。これがムガル建築の精華といはれるタジ・マハールである。王妃が自らをムムタジ・マハールと號してゐたところから名づけられ、一六三二年に起工し、約十ヶ年の歳月と凡そ四千萬ルピーの巨費を惜しげもなく投じて完成されたものであつた。莊重と森嚴とほのかな温味さへ感じる、十三人の愛子に圍繞された王妃に相應しい墓宮であつた。

多くの人々がタジ・マハールを見て感心するのは、法外な費用がかゝつた點である。そしてこの建物に失望する者があるとすれば、それは、彼等が前もつて考へてゐたほど、この建物に費用がかゝつてゐないからである。苦勞して屋根と屋根の間にのぼつてみると、大理石は石材の上に薄く張つたもので、中まで眞物でない證據を示す。

(ハクスレー「笑ふ海賊」)

印度觀光者のメモに必ずのせられるタジ・マハール。その圓頂の屋根の美しい描線が蒼穹にそびえてゐるタジ・マハール。それは莫臥兒帝國の在り日の豪華な夢を物語つてゐるのである。

もう一つ、シャール・ジャハンは新しい都市を残した。それはデリーに作られたシャール・ジャハンナバット(シャール・ジャハンの都)と呼ばれ世界でもつとも美しい宮殿と回教禮拜堂を作つた。「汝は極樂を求むるや」と彼は宮殿の碑銘に書いた。「そは此處なり。そは此處なり。そは此處なり」と。たつた一つの王座に六千五百萬圓の金のかけられてあつたといふことを附け加へるのは、もはや蛇足の嫌ひがなくもない。だが、シャール・ジャハンの晩年は暗かつた。彼も亦あまりにも長生きしすぎた人であつたかも知れない……。

宇宙の征服者

シャール・ジャハンには四人の王子があつた。そして、彼の後を繼いだのは第三子アウラングゼブであつた。さうなるまでには、若干の経緯がある。

長子のガラ・シコーが順當な王位繼承者であつたし、また世人もさう思つてゐた。シコーはアタパール大帝のやうに神祕的な傾向を帯びてゐて、ヒンヅー哲學の研究家であつた。彼の主張するところによればヒンヅー教徒と回教徒との相違は言語と表現の問題にすぎない、と言ふのであつた。彼は明かに回印融和の大業を考へてゐた。

アウラングゼブの方は徹底的な回教徒であつた。彼にとつてはヒンヅー教は單なる異端の宗教に過ぎなかつた。イスラムの光榮を印度に回復することが彼の唯一の念願であつた。アウラングゼブは父王の命令で南方作戦に従事し、自らデッカカン總督の職について、莫臥兒帝國に反抗の色を示したゴルコンダのハイデラバードを攻圍して、城下の盟をなさしめた。時に、シャー・ジャハン帝危篤の報があつた。彼は急遽德里へ歸つたが、病帝は既に回復してゐた。その代り、世嗣にして自由思想家であるダラー・シコーと次兄のベンガル總督のスウジャトが、次代の王位をめぐつて互ひに戦火に訴へてゐた。彼は末弟ムラドと共に、この兄弟の争鬭を傍觀した。二人の兄は漸く戦ひに倦いて來た。その時、アウラングゼブの兵力がものを言つた——即ち、彼は須臾にして兩兄を屠り、老王を幽閉し、(シャー・ジャハン)は後宮と踊子だけを許されて、彼の子供たちのそれ／＼の死を悲しみ乍ら八年の辛抱の後に死んだ)協力者であつた末弟のムラドを投獄した。彼のクーデターはかくして完成された。

一六五八年八月、アウラングゼブは登位して、「宇宙の征服者」と稱した。彼の治世は半世紀を超えた。そして初めの二十年間は、霖雨と酷暑によるアッサム遠征軍の全滅があつて著しく莫臥兒帝國の威信を傷けたけれども、北部から中部一帯にかけては眠つたやうな平和が続いてゐた。しか

し、それは回教徒の平和といふべきである。回教徒も——彼の信奉したスーニ派を徐いては、他のシーア派は異論者とされてゐた。まして、ヒンヅー教徒にとつては、彼の統治下には安住の地を見出し難かつた。彼はアクバル大帝の英斷によつて一度び廢止された人頭税ジャズヤを復活した。多くのヒンヅー教徒はこれがために改宗を餘儀なくされた——そして、それはアウラングゼブ帝の氣に入る措置でもあつた。

アウラングゼブは回教徒としては恐らくその敬虔さに於て正しかつた。彼は禁欲主義を實行し、努力を惜しまず、仕事に倦むといふことがなかつた。彼は人に接するに丁重であつた、そしてよく氣がつく小心さもあつた。彼には一人の友もなく、また彼は誰も信じなかつた。このやうに孤獨な人も史上あまり類例がない。彼の晩年には、先王シャー・ジャハンの蓄積された巨富も減り、大莫臥兒帝國の衰勢は日増しに著しくなつて行つた。彼の背後に、二つの大きな勢力が、いつの間にも迫つてゐたのである。その一つは、まだ搖籃時代にすぎなかつたとしても着々その地歩を進めてゐた英國東印度會社であり、その二はデッカカンに突如現はれた英雄シヴァジの脅威であつた。

ホーキンスの努力によつてスラトに最初の商館を開設（一六一二年）した東印度會社は、ポルトガル人商社と對抗しながら、辛うじてその存在を續けてゐた。何故ならば、會社は英國内の情勢の變化（クロンウエルの議會政治）のために、印度への航海を第十二回船（一六一三年）以來、ほとんど打ち切りに等しいやうな斷續さをしか示さなかつたからである。

それにも拘らず、印度では忠實な英國人が侵略の足場を求めて殆んど無益な努力を費してゐた。むしろそれはポルトガル人との戦ひと言ふべきであつた。一六一五年二月、スラト沖の海戦でポルトガル艦隊を敗つて、カリカットからポルトガル勢力を一掃した。一方、コロマンデル海岸のマスリバタムには會社の代理店を置き（一六一一年）、次いでアルマガオンに商館を設けた（一六二六年）。しかし、これらの地の不便なことは、何れも外敵に對して殆んど開けつ放しの状態であつたことである。そこでアルマガオンの商館長フランシス・デイはマドラスの地を地方藩主から買収することに成功した。一六三九年、荒れはてた砂地の六平方哩に英國旗が立ち、聖ジョージ要塞が築かれ。これが商業の假面をかぶつた侵略の第一歩であつた。

彼等 いつも港を求め、商館や倉庫を建て、さうして次に要塞を構築した。警備はやがて完全な武装を要求する。會社は土着の住民を傭兵として徴集し、遂には彼等の兵備は、商館や倉庫の警備

には「必要以上」にまで高められるのである。それはもはや「軍」と呼ばるべき性質のものであつた。かうして、東印度會社は英國國王の命令なしに行動する「私の兵隊」を所有するやうになつたのである。

一六六一年、英國ではチャールス二世が立つて國政を恢復した。久しく不振を啣つてゐた東印度會社にまた特許狀が發せられた。チャールス二世の妃にはポルトガル王女ブラガンザのキャサリンが選ばれた。彼女は所持參金にボンベイを持つて來たのである。この小さな島に、どんな値打があるか、もとよりチャールス二世も氣づかなかつた。そして彼は求められるまゝに、百磅の年金でこれを東印度會社に與へた。

まだ島内に残つてゐたポルトガル人と小競合のあつた後に、東印度會社はボンベイを根城とすることになつた。といふのは從來の根據地スラトはしばしばマラータ人の侵寇にあつたからである。わづかばかりでも、その間を流れる海の水は、剽悍なマラータ騎兵の蹄もこれを襲ふわけにはいかなかつた。かうして、一六六八年（納紀二三二八年）以來、英國は安全な場所を得て着々と印度侵略の歩を進めるのである。

英國史家は、

「印度はうつかりしてゐるうちに征服された！」

と書いてゐる。

が、果してさうであつたらうか。東印度会社はあくまで貿易に従事する商事会社であつたらうか。兵を養ひ、要塞を築き、ことあれかしとうかどつてゐた彼等の本態は次の文書がよく説明してゐる。

「印度に於ける、未來永劫、廣い基礎のしつかりした、確實な、英國の領土となるやうな、民政および軍事の権力をもつ組織を樹立し、現地に於てその兩者を賄ふだけの歳入をつくり出し確保せよ」

と、東印度会社の重役は、マドラスにゐた彼等の代理者に訓令してゐるではないか！ これは一六八七年のことである。

彼等はこの訓令を實行した。そしてベンガル州に眼を向けて、遂にカルカッタの獲得に成功したのである。

それまでにベンガル州にはフイーグリとバラソルに商館を有してゐた。一六四五年にはガブリエル・プロートンといふ外科醫の功績によつてシャイー・ジャハンからベンガル貿易の特権を得た。そしてマルダおよびグヅカにも商館が設けられた。しかし、これらは権利だけあつて、實際に土地を獲得したものではなかつた。そこで、上記の訓令が實行されることになつた。

會社はアウラングゼブの王子アジムからスターヌチ、カリカータ、ゴピントプールといふ三つの村を買収し、ウイリアム要塞を築いた。このうち、カリカータが訛つてカルカッタとなつたのは言ふまでもない。このときの主役はジョブ・チャルナックと呼ぶフイーグリの商館長であつた。

東印度會社は、西海岸にボンベイ、東海岸にマドラス、さうしてベンガル州ガンジス河の三角洲にカルカッタといふ三つの地點を確保して、あとはたゞ牙を磨いて待つてゐるばかりであつた。

「白鼠」のシヴァジ

アウラングゼブの税政は、いたづらに回教をもつて至上として、ヒンヅー教徒を壓迫し、悪税人頭税の復活を見るなど、印度人を刺戟すること切なるものがあつた。この精神的な苛斂誅求は、いつかは爆發すべきものを内藏してゐた。それがデッカ高原から彗星のやうに出現し、またたく間

に一大強國となつたマールタ聯邦であつた。

アリヤン古來の傳統たる印度精神の發現——それは民心の莫臥兒帝國に對する離反と時と同じうして行はれた。「山鼠」といふ意味をもつ首領ジヴァジをいたゞいた一味の驟起であつた。サトラツプ山脈の南、ワルダ河の西に横り、南はゴアの海に至るまでの廣い地域——マールシトラの住民たちであつた。

シヴァジはビジャプール國プーナの知事であつたシャーギーの子として生れた。一六四六年、僅かに十九歳にして、既に五、六の山砦を支配してゐた。十年後には、彼はもはやプーナの主人に等しかつた。一六五七年には、ビジャプール王に叛いて、デッカンを中心にマールタ人の勢力を植ゑつけた。それはいつの間にか侮り難い潜勢力となつてゐた。

アウラングゼブのアッサム攻略が無残な失敗に終つたといふ報道が、山砦にゐたシヴァジのもとにも傳はつて來た。ムガール軍の實力がそれで知れ互つてしまつた。そこでシヴァジはプーナに據つて獨立を宣し、自らヒンヅー王となつた。

デッカンのこの變化は都のアウラングゼブを驚駭させた。彼は直ちに征討軍を組織して南方へ追つた（一六六五年）。だが、シヴァジの前に、ビジャプール國の征服が控へてゐた。同じ回教とは

言ひ乍ら、シーア派に屬するビジャプールはアウラングゼブにとつては異教にも等しかつた。これはシヴァジにも共通の敵であつた。そこで、彼はシヴァジと結んで、ビジャプールを攻略し、兩者は相携へて首都デリーへ凱旋した。しかし、アウラングゼブはシヴァジを遇すること頗る冷淡であつた。のみならず、遂には彼を幽閉さへしたのである。だが、シヴァジとてその名の通り山鼠である、いつまでも監禁の身とはなつてゐなかつた。一夜、彼は脱走して、ライガールに據つた。もはや莫臥兒帝國に對して、彼は公然たる敵意を示した。そしてマールタ軍には、シヴァジの人格を慕ふ人々が四方からはせ參じて、一層強大な組織となつた。シヴァジは南方ゴルコンダ國と暫く和を結んで、カンデシ、スラトを略して海岸地方を掠めた。こゝにマールタ聯邦の大業まさに成らうとする時、一六八〇年、彼等は首領と頼むシヴァジの死にあつた。

一方ラーシプト族も各地に叛亂をおこした。しかも悪いことにアウラングゼブの末子アクバールもこれに組して、父王に叛旗をひるがへした。そして彼等はマールタ軍と聯合して氣勢をあげた。シヴァジの後繼者としては、婆羅門僧バラジ・ヴィシワナトが立つて、遺子サフを擁立した。マールタ聯邦はさらに態勢を整へ、バラジはベシユワ（宰相）と呼ばれて、全軍の指揮をとつた。もはや事態は何等かの決斷を下さねばならぬやうに、アウラングゼブに急迫して來た。即ち北印度

の豪華な宮殿の眠りを捨てるか、南方征服の夢を忘れるか——二者のうち一つの道だけが選擇を待つてゐた。此處に於て、アウラングゼブは意を決して、マラータ征討と南方征服の大軍を起した。

「三哩に互る王宮と五百萬人の軍隊を含める動きつゝある町」ができ上つた。時に一六八三年であつた。そして、この戦ひはビジャプール、オルコンダの二王國を手中に收めることはできたもののマラータ聯邦との戦ひは爾來二十年間、即ち彼の死まで續けられたのである。

マラータ軍は概ね農民の軍隊であつた。彼等は農閑期となれば、大舉して回教王國に侵入し、掠奪を擅まにし、戦利品を分けて山砦へ逃げ歸つた。彼等はみな馬に乗つて敏捷に行動するのを得意とした。しかも、ムガール軍が優勢な軍隊をもつて討伐に向ふと、彼等は忽ち算を亂して山林に逃避した。その守備を弛めると、彼等は何度でも喚聲をあげて逆襲し、いつもムガール守備隊は全滅に近い損害を蒙つた。

かういふ不利な戦ひ、加ふるに地勢を知らぬムガール軍は、隨所に各個撃破をうけ、出沒自在の山兵に手を焼いたばかりでなく、アウラングゼブの國庫には漸く軍隊の給與の金に窮するに至つた。謂はば、ゲリヲ戦ともいふべき小競合ひの背後には、ベシユワに率ゐられた大軍がアウラングゼブの陣營に迫つてゐた。

アウラングゼブによし戦意はあつても、長い神經戦に惱まされ麾下の軍隊は傾みに戦意を失つてゐた。かくて、一七〇六年、彼は遂にマラータ聯邦と和を講じようとした。即ちマラータの占めた國々はマラータ聯邦へ朝貢することを認めるといふ條件であつたが、勝に乗じた彼等はこれを一笑に附して顧みなかつた。アウラングゼブは焦燥した。

アウラングゼブの死と王位繼承戦

一七〇七年二月——アウラングゼブはアイマドナガルの陣中で歿した。彼は遂にマラータ聯邦を降することができなかつた。彼は「……軍隊は紊亂し、私のゐる時でさへ、士氣は沮喪し、救援は皆無であつた。……」といふ悲痛な言語を遺して逝つた。

アウラングゼブには四子があつた。ムアザム、アジム、アクバール、カムバクシュであつたが、マラータの陣營に投じたアクバールは考慮に入れられない。そこで、残つた三人の王子に對して、アウラングゼブは帝國を分配するやうに暗示した遺言を残した。しかし、誰も一部でなくて、全體を欲した。そこで長子ムアザムと次子アジムとが、お互に大軍を擁して王位を争ふためにアグラの南方ジャーシヤワ會戦をまき起した。その結果はアジムの敗戦となり、彼は殺された。そしてム

アザムムは、バハヅル・シャー（一七〇七年—一七二二年）として即位した。だが、彼の統治すべき莫臥兒帝國は、もはや解體の兆を示してゐた。

バハヅル・シャーの死後にも、また王位繼承戦が行はれた。そして、勝利者であるジャハンダー・ル・シャーが一七一三年に即位したかと思ふと、同じ年に彼は絞殺され、廢位を止むなくされた。そして加害者ファルクシャル帝が椅子にどかりと腰を下した。彼の治世中に、カムール・ウッジン・アサック・シャーがデッカンの知事に任用され（一七一四年）、赴任するや否やハイデラバード王朝の基礎を固めた。プーナのベッシュワの勢力は全マラータ聯邦の首位になつた。

一七一八年、フアルクシャル帝も、彼自身がしたやうに、そつくり同じやり方で（即ち絞殺されて）王位と別れた。ムハマッド・シャーが即位した。ムハマッド・シャーの時代には、オウド地方が大守アリ・カンによつて獨立王朝と同じ状態に置かれたこと（一七二〇年）、それから一七三九年の波斯王ナジール・シャーの侵入とが大きな事件であつた。しかし波斯王に領土的野心がなかつたことは何よりであつた。彼はデリーを掠奪すると風のやうに本國へ立ち返つた。

莫臥兒帝國が、かういふ亂脈時代に入ると、恰もそれを待ち構へてゐたかのやうに、西歐勢力—オランダ、佛蘭西、それから英國の手が、全印に互つてのしかゝつて來た。

第十三章 侵略者ロバート・クライヴ

（千七百四十年—千七百七十年）

印度に於ける英佛の衝突

最初に印度に勢力を得たポルトガルは西葡合併によつてスペインに代つた。それからオランダ人がやつて來た。が、オランダ人は東印度諸島の方により多くの魅力を感じたので、印度へは犬して力を割かなかつた。デンマークも來たが幾許もなく消失した。この間に割りこんだのが、佛蘭西と英國であつた。

佛蘭西も東印度會社を設立した。が、これは英國のとは違つてちかきに政府のいきが懸つてゐた。一六一五年に第一回の遠征隊を送つて成功を収めた佛蘭西東印度會社は、それから政權の變ることにくらかの消長を示してゐたが、ルイ十四世の頃（一六六四年）第五の佛蘭西東印度會社が設立され、スラトを中心に商館の網を張りめぐらした。一六七四年には、ビジャプール王からコロマンドル海岸のボンディシェリーに商館設置の許可を得、ついで一六八八年にはアウラングゼブ帝からべ

ンガル州シャンデルナゴールにも植民地を管む特權を許された。

その後一七三八年にはカリカルを得、續いてヤナオン（一七四〇年）を占領して、東海岸に於ける勢力は英國のそれに匹敵するほどになった。

一七四〇年頃の印度の海岸地帯は、英國と佛蘭西とオランダの三國が三つ巴となつて、必死の土地獲得戦を演じてゐたのであつた。そして、立ち遅れ氣味の佛蘭西には、本國政府の優勢な後援があつた。海軍がマダガスカル島を根據地として差しむけられてあつた。そして、ボンディシエリーの總督には有爲の人材、デュブレールが配されてゐた。そこで、マドラスに對してはボンディシエリーが、カルカッタに對してはシャンデルナゴールが夫々、その國の國旗の下に對峙してゐた。兩國の危機は、思ひがけなくも、印度でなくて歐洲で起つた。

一七四六年、澳太利の王位繼承問題に關して英佛間に干戈が交へられた。武装の平和が、二つの相拮抗する勢力が、その均衡を失ふと同時に、ヨーロッパでの宣戰布告が硝煙の匂を印度まで、海を越えて齎らせたのである。歐洲の戦亂は同時に印度の英佛軍の衝突であらねばならない。既に準備は充分であつた。倉庫には銃眼が、武装を備へた街々には堡壘が、兵營には武器が用意された。兵は銃をもつて立つた。たとへ一會社の「私の軍隊」であらうとも、今は祖國のために砲門を開く

ときであつた。

第一回の英佛衝突はかうして點々と飛石のやうに離れてゐる砦で戦はれた。佛蘭西は印度洋の植民地マウリチウス島から直行したラ・ブールドネを司令官とする一艦隊を恃み優勢を持した。やがて佛軍は英軍の最大據點マドラスの聖ジョージ要塞を占據した。これには佛海軍が海上から一役買つてゐた。そして三色旗が英國の要塞の上にひるがへつた。マドラスはデュブレールの手によつて、佛蘭西領を宣言された。根據地を失つた英軍はみぢめな敗走を續けた。殆んど無抵抗で降つた英總督モースの不甲斐なさは、聖グヴィッド要塞に籠城した英國人を激怒させた。が、何といても強力な佛軍の前には手も足も出なかつた。のみならず、聖グヴィッド城も一七四七年には佛軍によつて攻撃された。が、これは辛うじて撃退することができた。その代り、翌年、ボスカウエン提督による英海軍の到着と、ロレンス少佐指揮の陸兵との兩作戦によるボンディシエリー攻撃も、佛軍の猛烈な抵抗によつて失敗に終つた。

マドラスをあきらめることは愚か、印度に於ける英國人はもう少しのところできつたくその影を没するかと思はれた。

だが、この戦ひは一七四八年には終つた。開戦と同じやうに平和も歐洲で取結ばれ、エイ・ラ・

シャバル條約によつて、マドラスは再び英人の手に戻つた。デュブレールの雄圖も空しくなつた。そこで彼は次の工作を考へた。彼こそ智能の天才といふべきであつた。

カルナチツクの紛争

その頃でも、まだ莫臥兒皇帝は名目上の支配者であつた。が、彼等は吉例のやうに王位繼承戦でお互に疲弊し合ひ、そして勝利者は懶惰と酒色に沈湎し、後宮に入りびたつては阿片の虜となり、政務を見る時間よりは遙かに多い時を愛妾と戯れてゐた。

そこで、地方を預かつてゐた副王ニザムや大守ナツクが實質上の王侯となつて、彼等の好みのまゝの政治を行つてゐる現状であつた。

だから——若し大守を一個の獨立した王として取扱ふ方が便利なときには、さうする口實はあつた。ナワープは實際上、獨立國家の君主に等しかつたからである。また、彼を單に莫臥兒帝國の代理人として取扱つた方が便宜であるならば、さうすることも難かしくはなかつた。ナワープは理論上はデリーの政府の臣下であつたからである。

その選擇は、その時に應じて都合の好い方が使用された。外國人の侵略が（特に英人の）容易に行はれた蔭には、かういふカラクリがひそんでゐた。

マドラスやボンディシェリーを含むコロマンデル海岸地方はカルナチツクの大守ナツクの支配下にあつた。そして、この大守はさらにデッカンのニザム（副王）によつて任用されてゐた。

佛總督デュブレールは、切角獲得した英人の基地マドラスを、印度の事情もなにも知りはしない歐洲の外交官によつて、カナダの佛領と引きかへにされて、返却しなければならぬことに大きな不満を感じた。だが、抗議を申しこんだところで、それはもはや調印された事項であり、それに印度と歐洲の通信は、いくら早い船便でも半年近くかゝつた。

彼は思つた。結局、英國人を驅逐するには佛蘭西側がニザムやナワープを自由にするだけの地位を占めればいゝのだ、と。この地方王侯の内懐に食ひこむ手段さへあれば、あとはデュブレールの獨壇場であつた。

丁度、好都合なことがあつた。それはデッカンの副王アサーフ・ジャールが死んで（一七四八年）、その相續争ひが起つてゐた。故ニザムの子ナールシル・ジャンクと、その孫（故ニザムの娘の子）ムザファール・ジャンクとの間に、何れも權利を主張するところがあつた。

同じやうな事件が、カルナチックの太守の椅子をめぐつても行はれてゐた。アンワール・ウッチン・カンの占めてゐる太守の位は、不當なものであると主張する者がゐた。これは彼の一代前の太守の女婿チャング・サヒップであつた。

この二組の紛争は、それぞれ結びついて、ナシール・ジャングとナワープ・アンワール、ムザフアー・ジャングとチャング・サヒップとの利害関係者ができ上つた。

デュブレールにとつては何より有難いことが起つたわけである。しかも、先方から佛蘭西の後援を依頼して来た。それは後者の一組であつた。デュブレールは直ちに盟約を結んで、ド・ブッシー將軍以下四百の佛兵と歐洲的訓練をうけた二千の印度兵を貸し與へた。南部印度を二分した戦ひに、この佛蘭西軍の樹てた武勳は素晴らしかつた。カルナチックのナワープは一敗地に塗れて、斬殺された(一七四九年)。彼の一子ムハマッド・アリは遁れて、僅かの手兵とともにトリチノポリーへ據つた。デッカンの副王の方は、ナジール・ジャングが侍臣の手によつて斃れ、ニザムの地位はムザフアー・ジャングの手に落ちた。

デュブレールの大勝利であつた。彼の劃策は奏功したのだ。彼はクリシユナ川からコモリン岬に到る、殆んど佛蘭西全土に匹敵する國土の最高の地位を占めたのと同じことであつた。何故ならば、

ニザムもナワープも、もはや彼等が與へられた恩惠の故に、デュブレールの許可なしには如何なる書類にも署名できなかつた。軍事、司法、財政——あらゆる政治がデュブレールの手にあつた。

しかし、ムザフアー・ジャングは副王の名を數ヶ月保つただけで、一夜、刺客の手に斃れた。これも偶然とは言へ、デュブレールの思ふ盡であつた。彼は一層有利な態勢をとるため、傀儡に等しいサラバト・ジャングを擁立した。そして、ボンディシエリ近郊八十一ヶ村は佛蘭西側に讓與された。「デュブレール・ファチハバード」と四ヶ國語で刻まれた一本の柱が建ち、やがて大きな町が生れた。これが「デュブレールの勝利の都」であつた。

トリチノポリーにあるムハマッド・アリは、しかし、自らをカルナチックの正當な太守であると稱してゐた。そして、對抗上、彼は援助を英國側に依頼した。そこで東印度會社は彼を太守と認め、二人の太守ができたわけである。デュブレールにしても、太守のチャング・サヒップにしても、トリチノポリーを攻略する必要を認めたとはいふまでもない。

アルコツトの籠城

第二回の英佛衝突は、かうして夥しい私闘的な色彩を帯びて、一七五一年、サヒップと佛軍の同

盟軍によるトリチノポリーの包圍作戦を發端として、火蓋が切られた。

トリチノポリーからムハマッド・アリの悲痛な報告がマドラスの本部に飛んだ。英國軍はこの遠隔の地にある友軍を如何にして救助すべきかについて擬議した。

「トリチノポリーを救ふには、カルチナックの首府アルコット城を攻めるにある。これを攻略すれば、サヒップも佛軍もトリチノポリーの圍みを解いて、アルコットの奪回に乗り出して來るに違ひなし」

この美事な建策を樹てたのが、いつもは蒼白な顔をして机にかちりついてゐた會社の一青年書記ロバート・クライヴであつた。たしかに、それより外に方策はなかつた。が、要は果してアルコットがさう簡単に陥るかどうかに懸つてゐた。

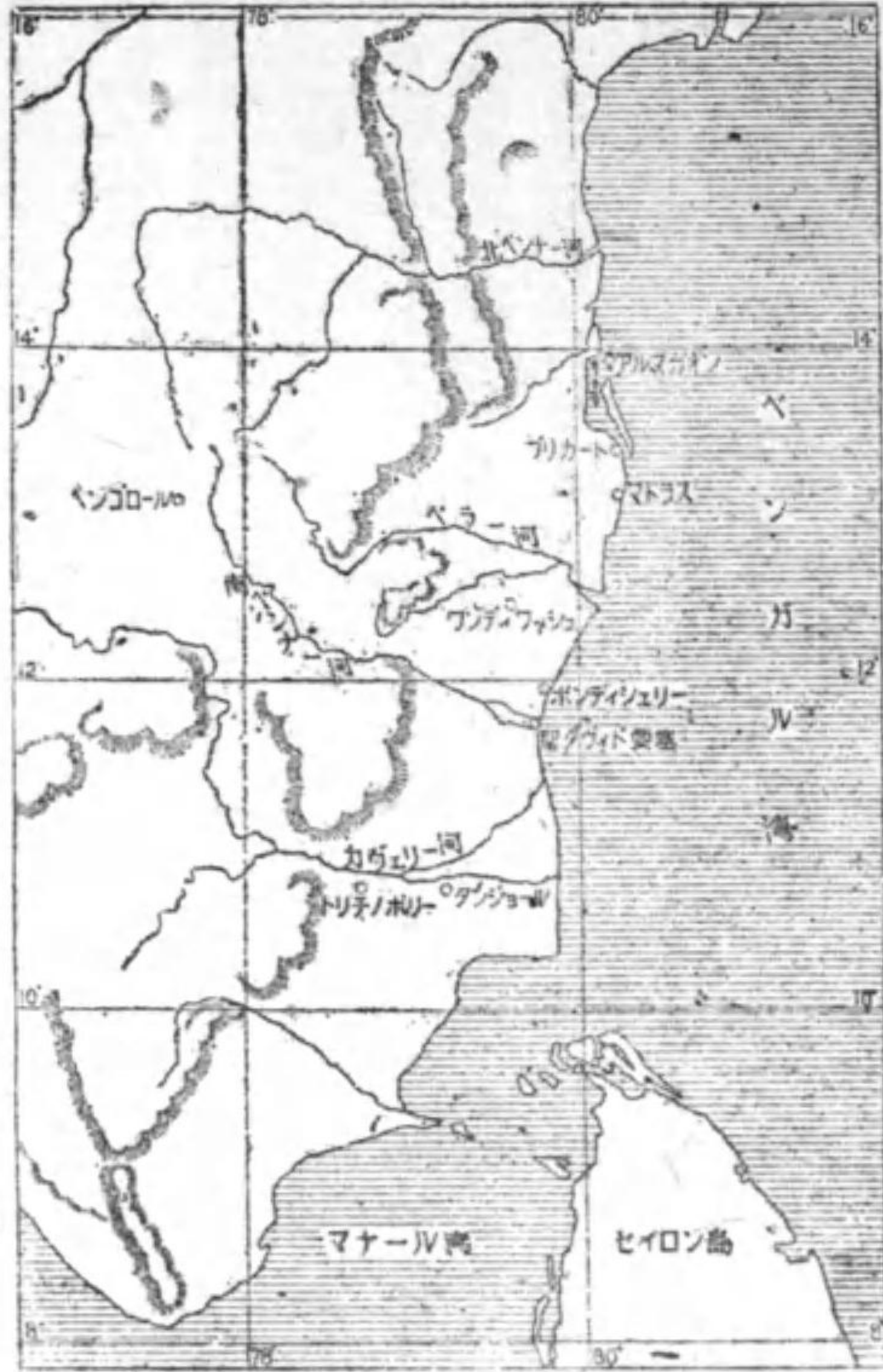
アルコット城攻撃の軍隊は、この青年書記を指揮官として、英兵二百、印度兵三百、野砲五門からなる編成であつた。折から嵐の天候であつた。クライヴは雷鳴と稻妻を冒して進軍した。悪天候が彼等に幸したのである。突如たる砲撃に眠りを醒まされたアルコットのチャング・サヒップの兵は、

「マドラスの復讐だ」

と口々に絶叫しつゝ、城壁をよど登る英人部隊の精銳には、所詮敵ではなかつた。彼等は城門を開くと、一散に潰走した。クライヴは殆んど一兵も失はないで、アルコット城を確保した。

敵の逆襲は必至である
クライヴは糧食を貯へたり
り堡壘を急造したりし
て、包圍に堪へる準備を
始めた。潰走した城兵は
町の近郊に集結してゐる
らしかつた。

この情報は直ちにトリ
チノポリーを遠巻きにし
てゐたチャング・サヒッ



プの許に飛んだ。彼は一子ライシヤ・サヒップを司令官として、約二萬の兵をアルコットへ向けた。この中にはデュブレーが派遣した百五十人の佛蘭西兵も含まれてゐた。

クライヴの豫期した通りの事態となつた。トリチノポリーはこのために救はれたが、アルコット城は十重二十重の包圍をうけるに至つた。しかも、要塞は全くこの包圍に堪へることができないやうに見えた。城壁は壊れかゝつてゐた。濠の水は涸れて、堡壘は狭く、大砲を据ゑる餘地はなかつた。その上に、胸壁は低過ぎて兵の身體を匿すことさへできなかつた。そして、守備隊には死傷者が續出して來た。今や、百二十名の英國兵と二百名の印度兵だけが、廣い城内にとり残されてゐた。八名の士官のうち、生き残つたものはその半数で、糧食さへ残り少なくなつて來た。

「この城を死守せよ」——これが、クライヴの發した唯一の命令であつた。

包圍は五十日間つづいた。もはや饑餓が迫つて來た。だが、快報もあつた。それはかねてムハマッド・アリの援軍として備はれてゐたマラータの六千騎からなる兵團が、佛蘭西勢強しと見て日和見的な態度をとつてゐたところ、アルコットの果敢な籠城戦をきいて、その本然の使命に就いたといふことであつた。勿論、ラージャ・サヒブとてもこの報は得てゐた。そして、今は神速な措置が必要であつた。

總攻撃が始まつた。城内で臥床の上に倒れてゐたクライヴは、急報に目を覺して部署についた。敵は額に弾除けの鐵板をつけた象軍を先驅させて、ひた押しに進撃して來た。城門を象の力によつ

て抜くつもりであつた。ところが、巨象の群は英軍の彈丸をうけるが早い、向きを變へて猛り狂ひ、味方の大軍を蹂躪してしまつた。攻城兵は大膽にも城壁を攀ぢ登つて來た。後から、後からと……。守備軍の小銃はその應接のために焼け切つた。三回に互る必死の攻撃の後に、敵軍は濠の彼方へ退却してしまつた。鬭争は約一時間続いたのだつた。四百の敵兵の屍があつた。攻撃の手の新に起るのを豫想して、守備隊は不安な一夜を送つた。もう一度攻められたら、對抗する彈丸は既に乏しかつた。けれども、朝になつて見ると敵の姿はもはや見られなかつた。危機は去つた。

アルコットの戦捷が各所の英軍に甦へる力を與へた。その後、英吉利軍は到る所で連戦連勝した。トリチノポリーを包圍したチャング・サヒブの軍は逆に包圍されることになつた。そして彼はマラータ軍の手中に陥り、ムハマッド・アリの命令で死刑に處せられた。ムハマッド・アリはカルナチックの大守となつた。これが英國に有利な態勢であることは、特に斷るまでもない。

クライヴは更に佛軍の要塞コーヴロングとチングルブットの攻略に向つた。この時の兵力は五千の印度兵と、英國から印度へついたばかりの補充兵二千名とであつた。ところが、この二千名の英國兵たるや、兵隊誘惑者がロンドンの魔窟で狩り集めて來た手のつけられない愚連隊どもであつた。コーヴロング要塞を攻めた時に、敵の一發の彈丸が愚連隊の一人を斃した。するとこの英國兵は

顔を見合せて潰走した。彼等に言はせれば、こんな約束ではなかつた、といふのである。酒と女とたんまりお給金が貰へて、戦ふ相手といへば印度の土人たちさ——といふ譯である。臆病なことと言つて、こんな兵隊も妙な。ある時、大砲の音が歩哨を驚かせた。被害もなにもない外れ弾だつたのに、その中の一人は數時間後に井戸の底から發見された。

クライヴはこんな連中を、骨を折つて訓練しながら戦つた。クライヴはまつたく「生れながらの軍人」であつたのかも知れない。コーヴロングを陥落させた時には、昔の愚連隊は一つばし使へる兵隊になつてゐた。間もなくチングルブットも落ちた。

クライヴはマドラスへ凱旋した。が、彼の健康状態は思はしくなかつた。そこで、會社は賞與としてクライヴに歸英の許可を與へた。彼の懐には掠奪した巨額の財寶があつた。彼はマスケリーンといふ若い婦人と結婚し、新婚旅行を兼ねて歸英の途についた。一七五三年のことである。

印度成金——ナボブ

英國の印度侵略に於ける第一の功勞者ロバート・クライヴは一七二五年九月二十九日に生れた。子供のころから大膽不敵なところがあつて「喧嘩を飯よりも好きで、そのために彼の性質は異常な

瘁猛さと傲岸さとを帯び、ちよつとしたきつかけでもある毎に彼は飛び出して「行つたほどであつた。ところが學校へ通ふやうになると、この腕白小僧は少しも勉強をしようとしないのである。無頼漢でなければ鈍才だといふ折紙がつけられた。彼が十八歳の時に、家族の者は東印度會社の書記の口を探して來た。つまり、こんな子供は印度へでもやつてしまつた方がいゝ。マドラスとやらで運命を開拓しようが（どうせ録なものにはならぬとしても）、熱病で死んでしまほうが、勝手にするがいゝ、と思つたのである。

「私は母國を後にしてこのかた、一日として幸福な日を送つたことはない」

と手紙の中で聊つてゐるやうに、書記として一日中机にへばりつく仕事は悉くクライヴの身心を消耗させた。謂はゞ一種の神經衰弱となり、二度も彼は自殺を企てた。室内の勤務が向かなかつた彼の氣質は、兵隊となるに及んで一躍天才的技能を發揮したことは、もう既に述べた通りである。

さて、花嫁をつれて歸英したクライヴはナボブ（印度成金）であつた。ナボブは印度からまるで無限に金と寶石をもつて來る、とぼつぼつ評判になり出した頃である。彼の家族も、それから遠い親戚までもが、會て彼を無能よばはりしたことを忘れて（或ひは白ばくれて）彼の周圍をとりまいた。

クライヴも氣前を見せた。彼は過不足のない財産を家族の上に齎らせたのである。その一部を割
りてまづ一家の財政困難を救った。失った土地を買ひ戻した。適當に金を分配してやつた。それで
も、クライヴの懐にはまだ充分な餘裕があつた。

そこで彼は残つた金を約二年間で浪費してしまつた。華やかな服装——これが後にナポブの一つ
の型となつた、馬車、乗馬のための馬、邸宅、夜會。そんなものでは、まだ消費しつくされなかつ
た。それほど、彼は印度から巨額なものを引出して來たのだが、東印度會社の社員としてはそれは
當時目立つたり、怪しむことのない金額に過ぎなかつた。言ひ換へれば印度の財寶といふものは、
その當時これほど無限に近いものでつたのである。

金はあるし美食にも飽きたクライヴは、もつとも迅速な財産の處分法を考へつゝいた。それはまた
名譽欲にも關聯してゐるのだが、代議士の選舉戦に乗り出したのである。十八世紀の中葉でも選舉
が金で行はれるのは二十世紀のそれと違ひはなかつた。忽ち彼は全財産を蕩盡し、當選した。が、
政争の渦中に巻きこまれたクライヴは投票によつてその着席權を失ひ、除名されたのである。

議會からは放逐され、資力も失つた彼が再び想ひを印度に馳せたのも自然であつた。そして印度
では、英佛關係が緊迫して、風雲の急を告げる徴候がしきりに現はれてゐたので、有爲な司令官を

求める聲が高かつた。そこで、ロンドンの東印度會社理事會は、クライヴに陸軍中佐の辭令を與へ、
聖ダヴィッド要塞の總督に任命した。クライヴは一七五五年、再び印度に向つて出發した。だが、
ボンディシェリーには彼の好敵手デュブレーは既に居なかつた。彼は佛蘭西で讒謗と奸策のために
死期を早めて、黄泉の客となつてゐた。

黒

葬

一七五六年、ベンガル、ビハール、オリッサの三州を統べる大守アラー・ヴェルディ・カン歿し
て、彼の甥ミルザ・マームートがシラジ・ウド・ダウラといふ稱號をもつて若い十七歳の太守とな
つた。彼は豫て東印度會社のともすれば侵略的な行動を憎み、反抗の瞋恚を燃やしてゐた。自己の
統治する地方への進出の虞れもあり、また著しく「特權階級」的な態度をとり出した英國人種に對
する東亞人の「血」の反撥もあつた、加ふるに英人たちのカルカッタ防衛設備を苦々しく思つてゐ
た。それはマラータ人の侵寇を恐れて構築した所謂「マラータ溝」であつたが、今や必要以上にそ
の工作が増強されてゐた。

この時、小事件があつた。それは租税を滞納してゐた富豪クリスト・ダースの逃走であつた。ダ

イスは若い君主のひたむきな訊問を恐れてカルカッタの東印度會社の保護を求めた。若きナワーブは激怒してこの稅務違反者の引渡方と改めて城塞構築の中止を要求したが、「右は當商會とは關係無之」といふ無禮な回答しか得られなかつた。しかも、城塞工事は日に日に進捗してゐた。英國の勢力を驅逐するなら今だ。——さう思つた若きナワーブは手兵を率ゐて行動を起した。時に一七五六年（皇紀二四一六年、寶曆六年）六月十八日のことである。

カルカッタ知事ドレークは狼狽した。彼は百七十四人の歐洲人の生命よりも、自己のそれを重んじ、もよりの船に避難してしまつた。陸軍の司令官もこの先例に従ふに若かずと考へた。だが、船は顛覆しフーグリ河中に身を投じた彼等は溺死した。知事と司令官に去られた残りのものは勇敢なホルウェルを擧げて指揮官と仰ぎ、三日間の必死の抵抗をつとめた後に、四日目、自ら門を開いて降伏の意思を表示した。やがて百四十六人の捕虜は、ウイリアム要塞の牢獄に收容された。炎熱灼くが如き六月の夜を一室に監禁された百四十六人のうち、翌朝開扉されたときに生あるものは僅かに二十三人——他は疲勞と炎暑と饑餓のために悶死してゐた。シラジ・ウド・ダウラは東印度會社所有の一切のものを沒收した。世に言ふ、カルカッタの「ブラック・ポイント黒筭」事件とはこれである。

どんな印度史をひもどいても所謂「黒筭事件」は一つの汚點として取扱はれてゐる。それが殊に

英國史家の手になるものならば、この事件こそ印度人の殘虐性を物語るものとして、自分たちの先人が行つた非行を蔽ふため、特筆して誇張され、もつて印度侵略の正當化を、公然と主張するのである。だが、「英國製印度史」の中には多くの虚構と事實の歪曲が盛り込まれてゐることに留意すべきである。

カルカッタ歴史協會の代表者ヒューマン・カピール教授は、その組織的な調査によつて、ダウラのカルカッタ占領は事實であるが、「黒筭」の名をもつて知られるこの虐殺行爲は、全く政治的意圖の下に、英國史家によつて捏造されたものである、と發表してゐる。（脇山康之助氏「現代印度の諸問題」）

これこそ英國の謀略の正體である。今や、あらゆる印度史は訂正されねばならない。

ダウラの部下が故意に殘虐を働いた、といふよりは、むしろ愚昧で無感覺であつた。生存者の一人、ホルウェルは力強いペンと活々とした想像力の天稟をもつてゐた。

（ウイリアムス「印度概説」）

たしかに「活々とした想像力の天稟」が生んだものであつたかも知れない。また、一步を譲つて、さういふ事が行はれたにしろ、「黒筈」^{ブラックホーク}とよばれる地下室は英人が作つた要塞の牢獄ではなかつたか！その牢獄はかういふ風土にあつては、一人の歐羅巴人の犯罪者を入れるにしても、狭すぎる程であつた」(マコーレイ)としたら、誰を入れるための部屋であつたらうか？

カルカッタの大通り、クライヴ街の中央廣場にあるといふ黒筈事件を追慕する豪華な花崗岩の記念碑こそ、今は逆に、飽くなき暴虐による英國の印度侵略と恬然として恥なき虚構の記念碑に外ならないであらう。

——ともあれ、我々は所謂「黒筈事件」の跡始末を見なければならぬ。

悲報はマドラスに飛んだ。だが、それは八月になつてゐた。マドラスの會社の幹部の意見は、フーグリ河へ遠征軍を送り、クライヴを陸戦隊の司令とし、海軍はワトスン提督の指揮をうけることに纏つた。僅々四十八時間以内に決定され、英國軍は出動した。

カルカッタを失ふことはベンガルを放棄することに等しい。如何なる犠牲に於ても奪回せねばならぬ奥地への足場であつた。ベンガル軍の陣容は凡そ十萬と見積られた。これに對してクライヴの司令下には九百人の歐洲兵、千四百人の印度兵が戦闘員として屬してゐた。ワトスン提督の率ゐる艦

隊はこの兵員と武器を積載して早くも十二月にはフーグリ河を溯行してゐた。……

翌年二月彼我兩軍はダムダムの前哨戦を終へて相對峙してゐた。戦線は膠着し、双方の布陣はさながら二本の帯のやうに平行してゐた。シラジ・ウド・ダウラの不幸は海軍をもたなかつたことであつた。ワトスン提督の艦隊がダウラの軍の背後を衝いた時に、ナワーブは白旗を掲げざるを得ないことを確認した。彼は賠償と會社の特權の復活と、あれほど苦にしてゐたカルカッタの再築の許可とを條件として、平和を恢復した。英國側としても、歐洲で勃發した英佛七年戦役の歸趨は逆増し難く、この條件で一應満足せざるを得なかつた。

ブラツシーの戦ひ

シラジ・ウド・ダウラとの折衝は主としてオミチャンドといふベンガル人を仲介として行はれた。が、平和條件はなかなか履行されなかつた。その筈であつた。停戦條約と同時に、ダウラの肚には英人襲撃の企があつたのである。佛蘭西の將軍ド・ブッシーがダウラの帷幕に参劃してゐた。又しても佛蘭西人！クライヴとワトスン提督とは、先手を打つて佛軍の根據地シャンデルナゴールを攻撃した。水陸協同の英軍は神速なしかも完全な勝利を得た。要塞もそのまゝ、砲も武器庫もそつ

くり英軍の手中に陥ちた。

ダウラの佛蘭西人とのひそやかな連絡は、かうして絶たれてしまった。そこで彼は心中では愈々英人に對する怒りを持しながら、澁々賠償額やその他の交渉に應じなければならなかつた。これは確かに彼の沽券を下げたことであつた。彼の若さと移り氣とが、臣下の信賴の念を薄めた。そして若い大守の叔父にあたる將軍ミール・ジャファルが、彼の位置にとつて代らうとする陰謀を抱くに至つた。この陰謀は英國側と充分な諒解をとげた。若しシラジ・ウド・ダウラの廢位が實現した時は、ジャファル將軍は會社の従業員には充分な償金と、陸海軍には多額の寄付金とを興へるであらうと約束した。

はつきりした陰謀とは思はぬものの、何か不穩な氣配がダウラにも感じられた。結局のところはもう一度戦火に訴へねばならぬであらう——といふのが彼の最後の肚であつたが、當面の不安は消えなかつた。この不安を見てとつたのはオミチャンドだつた。彼は言葉巧みに大守を籠絡して臣下に不信を懐くことは君公の道でないと説いた。ナワーブの疑惑はそれで氷解した。が、オミチャンドの存在は、ダウラにも英國側にも、その一舉手一投足が重大な影響を及ぼすほど、大きなものとなつた。

有利な立場となつたオミチャンドは、隱密と助力の代償として英貨二十萬磅を會社に要求した。しかも彼は、ミール・ジャファルと英軍との間の契約書にその條項を書き入れることを要求した。この聰明な印度人は、そのことを自分の目で見ないうちは承知しなかつた。

「よろしい」とクライヴは答へた。詭計にかけては彼はオミチャンドを凌いでゐた。だが、困つたことには、ワトスン提督がそんな無暴な契約には反對だ、と強硬に主張したことであつた。

「仕方がない。書類を二通作るのだ。そしてジャファルへ渡す正本にはオミチャンドの名は抹殺されてゐるだらう。」

クライヴは眉一つ動かさずに答へた。

「僕はそんな卑怯な契約書の署名は致しかねる」と後者も答へた。

にも拘らず書類は矢張り二通作成された。そして赤紙の偽の契約書のワトスン提督の署名はクライヴによつて巧みに偽署されてあつた。

今やクライヴの奇策は成つた。六月十三日、クライヴは「余は直ちに貴公を訪問すべき必要を生じたり」といふ傲慢な通告を敵軍に與へた。やがて返答を待つまでもなく英國軍は前線へ進發し、

一七五七年（皇紀二四一七年）六月二十二日の夜、前面の河を渡つてマンゴウの樹の杜の中に野營

した。そこはナチャール州ブラッシーの原野でクライヴはナワーブの軍と一哩を隔て、相對峙した。この時英軍の兵勢は歐洲人九百五十人に印度兵約三千、數門の輕砲を持つに過ぎなかつた。これに反して、ナワーブの軍は歩兵四萬、騎兵一萬八千、重砲五十三門を算へ、加ふるに輕野砲四門を有する五十人の佛蘭西人砲兵を擁してゐた。

夜は白んだ。印度の運命を決する朝が來た。拂曉、まづナワーブの大軍が陣地を離れて、廣く散開し、英軍の野營陣地に向つて移動を開始した。火繩銃や劍や弓矢に身を固めた四萬の歩兵が見る見るブラッシー原野に充満した。五十三門の大砲が歩兵の後方に、白い牝牛に曳かれて連なつてゐた。「印度放浪者」といはれた一團の佛蘭西野砲隊は、もつとも勇敢な怖しい部隊であつた。戦ひは砲撃から始まつた。ナワーブの巨砲が照準を誤つてゐる中に、英軍の野砲が威力を發揮した。すると、これが合圖でもあるかのやうに、ミール・ジャファル將軍麾下の一萬五千の騎兵部隊が、雪崩をうつて敗走した。それにつられて、多くの前線部隊も、何といふことなしに退却し始めた。そして總崩れとなつてしまつた。もつとも勇猛に闘つてゐた佛兵の一團も、大河のやうな逃亡兵のために押し流されてしまつた。ダウラはこの潰走を見て、彼の悲運を知つた。彼は王宮のあるムシルダバードへ走つた。

僅か一時間のことであつた。敗戦の敵軍は五百の死體を遺棄し、無数の武器を放擲したまゝであつた。戦ひの結果を、陰れて見守つてゐたミール・ジャファル將軍は、英軍の屯所へ出頭した。彼は自分がうける待遇について若干の不安をもつてゐたが、クライヴ自ら現れて彼を抱擁し、ベンガル、ビハール、オリッサの新しい大守を祝福したので、彼は始めて契約書の實効を知つた。そしてムシルダバードへ進撃を開始した。

ダウラはミール・ジャファルの追撃を知ると、弊衣に身を隠して亡命した。しかし、彼は後に發見されて、ジャファルのために殺された。

ムシルダバードではジャファルの即位式が、クライヴの後援の下に行はれた。彼は新任大守の手をとつて王座に進み、ジャファルをその椅子につかせた。

少ししたつて、契約書を開くときが來た。オミチャンドはもうすつかり金満家氣取りで出席した。白い契約書が朗讀された。クライヴは會社の書記に「もうオミチャンドの迷ひを解いてもよからう」と英語で言つた。書記は印度語で言ひきかせた。

「オミチャンド君。赤い契約書は偽ものだ。君は何一つ興へられはしないのだ」

オミチャンドは逆上して倒れた。彼の脳髓は錯亂して、恢復の見込はなかつた。

夥しい財寶の雨が會社とその社員の上に降りそゞいだ。英貨八十萬磅の銀貨が、河を下つてムシルダバードからウイリアム要塞へ送り込まれた。この財寶を運ぶ船隊は百艘以上のポートで、旗をひるがへし、音楽を奏して凱旋航路についた。カルカッタは僅か數ヶ月前までは全く荒廢に歸してゐたが、今や廢墟の中から、未曾有の繁榮を來す町となつた。商業は復活した。……そしてクライヴはといへば、彼の節制心以外には、何ものも彼の所得を抑制するものはない。ベンガルの財寶は惜し氣もなく彼の懐に注がれた。

(マコーレー「クライヴ傳」)

ナワーブの位は二百二十四萬磅に價した。そしてクライヴの懐には、そのうちから明かに三十萬磅は入り、彼の私服を肥した。このほか、會社はベンガル地方二十四バルガナ縣のザミンダリを許された。ザミンダリとは一種の土地所有權で、大守に一定の地租を收め、その土地の農夫から小作料を徵收する權利であつた。

クライヴの采邑

ブラッシーの戦ひの結果は英國勢力の驚異的な躍進であつた。ロンドンの理事會は、クライヴの武勳赫々たる成功の報に接すると、折返して彼をベンガル州の知事に任じた。彼はこの知遇に感激して、ベンガル警備軍を割いてカルナチック北方の北部サーカルへ送つた。目的は殘存する佛蘭西勢力から、その地帯を奪取するためであつた。これは指揮官フォード大佐の卓絶した兵家の才を見抜いたクライヴの炯眼であつた。遠征軍は疾風枯葉を卷くの勢で席捲した。

一方、莫臥兒國王の長子シャーザダ(後にシャー・アラム帝となる)がオウドの大守と結んで英國人の擁立したミール・ジャファルを倒す割策をねつてゐた。彼等の下には、アフガン人、ロヒラ族、マールタ人など種々な宗教と種族から成る四萬の兵が集結されてゐた。

ミール・ジャファルの恐慌は極度に達した。敵軍がパトナに迫つたといふ報を知つた時、彼は顔色蒼白となつて、徒らに王宮の中を歩き廻つてゐた。何もかも手につかない有様であつた。パトナを包圍した敵軍は、まさに強襲に移らうとしてゐた。この時、クライヴ大佐の軍隊が前進して來るといふ知らせが、シャーザダ王子とオウドの國老大守を慄え上らせた。

クライヴの軍は四百五十名の英兵と二千五百の印度兵に過ぎなかつたが、四萬の敵軍は彼の前衛部隊が姿を現はすと、忽ちにして雲散霧消した。クライヴ大佐来る——といふことだけで、退去の口實ができたほど、彼は恐れられたものであつた。

ミール・ジャファルの欣びはまた大きかつた、彼は喜悅の餘り、東印度會社のザミンダリが設定された土地を、ジャギール（私有地）としてクライヴに贈呈した。

そこで不思議なことができ上つた。東印度會社の使用人であるクライヴは、會社に土地を貸して地租を受取ることになつたのである。これが年收凡そ五萬磅と算定されたクライヴの采邑、と言はれたものであつた。

これまでにしてクライヴの後援を恃むジャファルは、また妙に疑り深い性格であつた、いつ英人から見放されるかも知れないと、彼はひそかにジャワのオランダ軍と通じてゐた。やがて密約によつて、ジャワから七隻の巨艦がフーグリ河に姿を現はした。

これがクライヴに知れない筈もなかつた。彼はベンガルのオランダ植民地チンスラーを襲つて機先を制し（一七五九年）、原動力を破挫してしまつた。勿論、フーグリ河の七隻の巨艦は影も形もなくなつた。オランダはこの争闘ですつかり印度から手を引くことになつた。

——また一つ、クライヴの勝星であつた。

デイワニー——租稅徵集權

ブラッシイの汚れたる英軍の大勝は、英國議會の感謝となり、偉大なる雄辯家ピットは、クライヴを「天授將軍」と激賞した。そして、一七五九年、クライヴは本國からの召還に應じて再度、光榮ある歸航の途についた。本國で彼を待つものは「ブラッシイのクライヴ男爵」といふ愛蘭士貴族の肩書であつた。

だが、もう一つ待つてゐたものは、彼の莫大なる財産をねたむ聲であつた。たしかにクライヴの富は英國の一流の貴顯と華を競ふことができた。マドラスで彼が購つたダイヤモンドだけでも優に二萬五千磅には達してゐた。

嫉妬が理事會の一人に、クライヴの采邑は不當であると抗議を申込ませた。そして理事會はクライヴの權利を沒收する決議をした。そこで彼は理事會に反對の訴狀を法廷に提出した。そんな小競合をしてゐるうちに、ベンガル州から歸航する船の齎らす報道は香ばしくなかつた。

印度商人たちは、己が物品の免税を計らうと腐心するのあまり、更にたとへ高いプレミアム付でも、會社の誰れ彼れから許可證を買ひとらうとするやうになつた。されば、一ヶ月わづかに五十ルピーしか貰つてゐない會社の給仕達でさへも、優に千ルピー或ひは二千ルピーの年收を得ることができた。

(マーシユマン)

密輸出が日常茶飯事となつたやうな、ひどい紊亂振りであつた。理事會はクライヴに懇願した。クライヴは彼の反對者を除名することを條件にこれを受諾した。さうして、理事會もクライヴの意のままとなつた。

一七六五年五月、クライヴは三度び踏むカルカッタの埠頭でしばし感慨に耽つた。僅か六年の留守の間に印度には大きな變化があつた。

ベンガルの大守ミール・ジャファルは廢せられて、その義子ミール・カシムが大守となり、その代償として會社はミドナプール、ブルドワン、チャッタゴングの三州を讓與された。

一六六〇年には印度に於ける佛蘭西の殘存勢力に留めを刺す、ワンディワツシュの戦ひが行はれ

た。英將エア・クートのために一敗地に塗みれた佛軍は、翌る一七六一年一月遂にボンディシユリを開城した。

また會社の擁立した大守ミール・カシムは漸くその桎梏から脱しようとしてゐた。彼はオウドの大守と計つて、英人の驅逐を策してゐたので、會社は再びミール・ジャファルを樹立して、カシムを追つた。

カシムはオウドの國老大守シッジャ・ウド・ダウラと協力して一七六四年三月パトナに兵を送つた。會社側はムンロー少佐が七千の手兵をもつて、バクサールにこれを邀へ撃ち、八百四十八名の死傷者を出す激戦の後、敵軍を完全に粉碎した。その翌年のコラーの會戦で、一層確定的に撃滅された。

——もはや東印度會社に双向ふものはなかつた。

クライヴの仕事は會社の郭清であつた。クライヴは徹底的な改革を行つた。彼は社員の俸給を思ひ切つて上げた。そのために鹽稅を設定した。鹽稅——それは、今日でも印度政府のもつとも重要な税金となつてゐる。この大衆課稅によつて、會社の財政は立ち直つた。のみならず、一七六五年にはベンガル、ビハール、オリッサの「租稅徵集權」を、衰退の一路を辿り無力な老廢

國と化した莫臥兒帝國から獲得することができた。莫臥兒帝シャー・アラムは年額二百六十萬ルビ
の衰れな一介の年金受領者となつてしまった。

かくて、東印度會社は、こゝにはつきり全印度を睥睨する、宛然一大獨立國家を形づくるに至つ
た。

戰士としてのクライヴはブラッシーの戦ひが頂點であつた。政治家としてのクライヴは、デイワ
ニーの許可證が極北であつた。彼の印度に費した生涯の努力の結晶は、この二つの大きな事件を史
上に遺した。

一七六七年、既にして肉體の衰へを知つたクライヴは、滄溟まさに赤道を貫かんとする蒼天碧水
の印度洋を、三度び目のそして最後の歸航の途についた。

印度侵略の唯一人者ブラッシーのロバート・クライヴ男爵は、しかし祖國に歸つて適當な待遇を
受けたと言はれなかつた。多くの嫉妬と、若干の正義感から、彼の政敵は誹謗の毒刃を振りかざし
て、彼の過去の瑕瑾を追窮し始めた。英國下院は、しかし、一切の彼の行爲を是認しはしなかつた
けれど「故國に對し絶大没すべからざる功業を成せり」と決議した。

氣の荒い殖民地歸りの貴族は悞々として愉まなかつた。彼に對する攻撃の鋒は收つたが、彼は頑

固な不眠症に苦しまなければならなかつた。彼は諸々の幻影に惱まされた。それは曾て彼の若き日
々に手玉にとつた褐色人種の亡靈であるとも言ふべきであらうか、日夜踰躑たる生活を送つた男
爵ロバート・クライヴは、一七七四年十一月、ペンナイフで咽喉をつき刺し、五十一歳の生涯を閉
ぢた。



第十四章 ヘースチングスとマラータ聯邦 (千七百七十年—千七百九十八年)

一七七〇年の饑饉

クライヴが最後の任務としたベンガルの會社員に對する肅清工作は、彼が印度を離れた瞬間からまたもとに逆戻りしてしまつた。綱紀は弛緩し、禁壓した弊害が再び頭を擡げて來た。

それに會社が獲得したダイワニーといふものが、莫臥兒皇帝に與へる年金額を差引いた残額は凡て會社の純益となるのであつたから、地租の徵集は苛赦なく行はれた。それは遮二無二の搾取であつた。「恐らく世界の如何なる投資といへども、開闢以來、英國がブラッシーの戦後五十年間に互つて印度の掠奪を獨占して獲得したほど、尤大なる利益を齎らした投資はかつてなかつた」に違ひない——それは一名の競走者もない、氣髓氣儘の搾取であつた。東印度會社は「政府」であつたし、その社員は官吏といふよりは、むしろ「神様」か「惡魔」かどちらかであつた。壓制と税政が交互に印度人の經濟生活を脅かした。

數百萬の印度人が悲慘と貧困のどん底に沈淪して行く間に、カルカッタに於ては驚くべき財寶が急速に集められてゐた。彼等印度人は壓制には馴れてゐたが、いまだ曾て、これほどの壓制に苦しめられたことはなかつた。それは人間の暴政といふよりは、むしろ悪魔の暴行であつた。彼等印度人はある時は生きた心地もなく、たゞ黙々として眼をつぶり、ある時は恐怖と戦慄から白人を見て喪神した。英人が旅行するところは、町も村も廢墟か墓地のやうな死の靜寂が掩ふた。

(エドマンド・パーク)

一七七〇年の夏は雨が降らなかつた。土地は乾上つて龜裂を生じ、河川は河床をのぞかせた。當然それは凶作の年であつた。恐ろしい饑饉がやつて來た。それは慘苦と死をもつてガンジスの全峡谷に充ち満ちた。母親は通行人の足許に身を投げて、愛兒のために一握の米をねがつた。フーグリ河を毎日のやうに、幾千の死體が流れてゐた。カルカッタの街路にさへも、死者や死に瀕した者の人の山が築かれた。死者の數さへもよく解らなかつた。が、ベンガル州の人口はこの饑饉で三分

の二に減少したと言はれてゐる。

たしかに饑饉は自然的な條件に支配されるものであるが、この「自然の大虐殺」がベンガル人だけを對象とされたのは不可思議であつた。英人は誰も犠牲になつたとは聞かない。のみならず、東印度會社の従業員たちが印度の在米を盡く買ひ占めたために、かういふ大饑饉が起つたと言はれなくもない。彼等が米の拂底に乗じて暴利を貪つたのに相違ないのは動かないところである。

しかも、この年でさへも租税だけは完全に徴收されてゐた！ 一七七〇年五月九日、カルカッタ參議院は平然と次のやうに發表してゐる。

「蔓延する饑饉、夥しい死者、乞食の増加は言語に絶する。住民の三分の一以上がパーネア州のやうな曾て豊かであつたところでも餓死した。他の地方の慘狀もこれに劣らない……」

この時の死者は一千萬人以上と見られてゐる。そして、災害の影響はその後四十年間つゞいた。人は言ふ——印度に饑饉はつきものだ、と。そして、これ以後にも何回となく起つた。だが、凶作は「つきもの」ではなかつた筈だ。さうであるとすれば、民族移動の原理に背馳するものと言は

なければならぬ。

ワーレン・ヘースチングス

一七七二年、ベンガル州知事として、クライヴの後任者ワーレン・ヘースチングスが赴任した。英國の印度侵略に、クライヴが土地を強奪したものとすれば、ヘースチングスは土地の地ならしや地上げなどを分擔したのと言へる。クライヴの果敢な精神が蒔いた種を、ヘースチングスの冷静な心が育て上げたとも言へる。この二人の人物が、印度侵略史上でもつとも強引な幾買かを遺してゐるのである。

ヘースチングスは一七三二年十二月六日に生れ、ウエストミンスター學校を中途退學して、商業學校へ進み、十八歳のときにベンガルの東印度會社へ入つた。カルカッタで二年ほど帳簿つけをやると、彼はムシルダバードへ轉動した。そしてクライヴに従つてブラッシーの戦ひに参加したが、クライヴはこの若い義勇兵の頭腦が、兵隊としてよりも外に役に立つことを見破つた。やがて彼はミール・ジャファルの宮廷に會社の代理人として派遣された。

一七六一年にはカルカッタの評議員に任用され、縦横の腕を振つた。一七六四年、一旦歸英した

が、誰でもやることは同じで、このナポブも忽ちにして全財産を消費しつくしてしまつた。そこでまた印度へ――。

一七六九年の春、彼はグラフトン號に乗つて印度への海の旅を續けたのだが、この船上でインホフといふ獨逸人の夫人と懇になつた。そしてこの戀愛乃至は姦通は、正式に離婚してインホフ夫人がヘースチングス夫人となるまで、數年間續けられた。このことは、ヘースチングスの忍耐を示すものである。辛抱強さ、そして冷酷さ――これが彼の性格の上で重要な役割を果してゐる。

知事に赴任したヘースチングスの第一に着手せねばならぬことは、ベンガルの二重政治を單一化することであつた。その頃のベンガル長官はムハマッド・レザ・カンといふ回教徒であつたが、彼の存在はたゞ煩はしいばかりで、それでゐて年に十萬磅もの報酬をうけてゐたのである。

ヘースチングスは剛氣と機敏とをたよりに、夜半、レザ・カンを強制收容してしまつた。公務に關して疑ひがあるといふのが名目であつた。公判はのべつに延期されて、やつと判決を下した時は無罪とあつた。が、長官の椅子は消えてなくなつてゐた。

この事件に蔭で働いたのがレザ・カンの對抗者であつたヒンヅー婆羅門のナンド・クマールであつた。彼はレザ・カンの失脚によつて、長官の顯職を得ようとしたのであつてみれば、ヘースチン

グスの方法は、彼にも頗る不満足なものであつた。
かうして、カルカッタはベンガル・ビハール兩州の首都となり、會社は正確な意味で兩州の政府となつたのである。

ロヒラの役

アラハバードとコラー地方とは一七六五年クライヴが、マールタ族にこの地方を犯されないやうに、莫臥兒帝シーヤ・アラムに讓與した土地であつた。しかし、その思ひ付き通りにはいかなかつた、と言ふのは、デリーがマールタ一族のシンジャに占領され、皇帝はアラハバードからデリーへ歸還することを要求された。全然實力といふものを持たぬこの年金受領者は、同時に意志なき人のやうに、今はマールタ聯邦の手に左右されてゐた。

さうなると、アラハバードやコラーは實質上はマールタの國に屬することになる、これは尠くとも本末顛倒であつた。ヘースチングスは兵を出してアラハバードとコラーを回收した。そして彼は莫臥兒皇帝に對する年金の支拂を停止した。敵の手中にある有名無實の王に慙憐をかけるほど彼は寛容ではなかつた。ベンガル州一帯はいよいよ「會社の土地」となつてしまつた。

それはいゝとしても困つたのはアラハバードとコラーであつた。いくらなんでもこれまで「會社の土地」にする譯にはいかない。かたがた會社の財政が悪化してゐたので、ヘースチングスはこれを賣却することにした。

オウドの大守^{ナワブ}、シウジャ・ウド・ダウラにはこれらの土地は豫ねて垂涎の地であつた。彼は大守といふ名前の外に、ワジール（國老）といふ肩書をもつてゐた。そこで人はシウジャ・ウド・ダウラのことをオウドのナワブ^{*}・ワジールと呼んでゐた。

註* これを人名と解してゐる史書もあるが、ワジールはデツカン（今日のハイデラバード）のニザム（副王）のやうに、特に實力のあるナワブに許された肩書であつた。

賣買の契約は整つた。英貨五十萬磅がその價格であつた。これは富裕なオウドのナワブ・ワジールには些細な金額であつたし、東印度會社としては一息つける助け舟であつた。だが、この取引にはお負けがついてゐた。それはオウドの大守の必要とする場合には英軍一個旅團を出兵するといふ協約であつた。これが非道なロヒラの役を誘發した。

雪を戴いたクマオンの峯からガンジス河に合流するラムグンガ川流域の豊饒な原野はロヒルカンドと呼ばれ、アフガン・ロヒル族の住んでゐる地であつた。この廣々とした原野はそれ自身が豊饒さ溢れるばかりの土地であつた。特にオウドの大守オウドでなくとも、誰れでも手に入れたい欲望を持つに違ひない。しかも、侵入者を妨げる自然の障害は何一つない開放的な原野である。これがいまだ曾て侵寇をうけなかつたと言ふのは、偏へにアフガン人の強烈な血潮が、何人の來寇をも許さなかつたからであつた。彼等の暴虎馮河の如き勇猛さは、既に近隣に鳴りひびいてゐた。のみならず、その軍隊は總動員すれば優に八萬を突破するであらう、と言はれてゐた。それは曾て不敗を誇る唯一の軍隊であつた。

これを敗つてその土地を奪はうといふのであるから、シッジャ・ウド・ダウラの考への中には當然英國兵に依頼するといふ觀念があつたのである。一七七四年、ヘースチングスはシッジャ・ウド・ダウラに英吉利軍を貸す代りに代償として四十萬磅の支拂をうけた。なほ大守が使用してゐる間は、軍隊に對する費用はナワープ・ワジールの負擔と定められた。

——そして、ロヒラの役が、何の挑發もなく仕掛けられた！

挑戰もなく誘導的な事件もない、まつたくの利欲から發した戦争に英國兵は備はれたのである。

人倫の掟から外れた行爲といへども金錢のためになら行動するのが、彼等英人侵略隊の正體であつた。

ロヒラ族はダウラの軍に英兵が加擔したことを知つて、抗議を唱へ、懇願し、遂ひには莫大な價金をさへ申出たが、これらの手段は凡て徒勞であつた。そこで、彼等は自力で飽くまで戦ふことを決心した。血で血を洗ふ死闘であつた。

戦争の慘禍はロヒルカンドの美しい山河を容赦なく赤く塗りつぶした。十餘萬の民衆が、故郷を捨て、叢林へ逃げこんだ。彼等はシッジャ・ウド・ダウラの手にかゝるより、餓死や熱病や虎狼の待つ叢林の方を選んだのである。

「敵は立派な兵學の知識を備へてゐることを證明した。殊に彼等の發揮した頑として譲らぬ決心の固さは、筆紙につくされぬ程であつた」と英軍指揮官チャンピオン大佐は言つてゐる。そして、戦争は終つた。

最初の印度總督

東印度會社の支配する土地が廣まるにつけ、そしてその財政が膨脹するにつけ、英國政府として

は、これをそのまま放任することはできないやうになつた。それは恰も、本國政府と關係のない別の「政府」であつたから……。一七七三年の英國議會では、この問題が喧しくとり上げられた。そしてノース卿提案になる「服務令」が通過した。これは、會社當事者の権限を定めること、本國との聯絡を密にすること、ベンガル州知事を印度總督と變更しマドラス、ボンベイ等の地方的支配を統率すること、高等法院を設立すること、參議員の數を四名とすること——等が規定されたものであつた。そして、總督はこれを政府から任用することとなり、初代總督として現地ベンガル州知事ヘースチングスが昇格した。

彼は一躍して全印度に號令を下すことができる筈であつた。謂はゞ獨裁政治が彼の前に可能であるやうに思はれた。が、現實は必しもさうはいかなかつた。それはカルカッタ參議院には彼の反對派であつたフィリップ・フランシスが控へてゐた。事ごとくに彼等はいがみ合つた。

この章の冒頭に現はれた一人物——婆羅門ナンド・クマールのことを讀者は記憶されてゐるであらうか。彼は野望の成らなかつた返禮として絶えずヘースチングスの政策に反對して來た。またその反對はしばしば正當なものであつた。會社内部に於けるフランシスと、外部に於けるナンド・クマールの存在はヘースチングスにとつては頭痛の種であつた。

そして或る日、全カルカッタはナンド・クマールが六年前に證券を偽造したといふ件で收監された、といふ報道に接して嘔然とした。ある人はそんな莫迦げたことはあるまい、と恐怖政治を否定した。また一方では、よしナンド・クマールに罪科があつたにせよ、彼の経歴とその地位に鑑みて無罪となるだらう、といふ豫想が行はれた。

公判はナンド・クマールの夥しい反駁にも拘らず、彼を有罪とし、裁判長はいとも嚴肅な聲音で被告に死罪の宣告を下した。あらゆる階級が激昂した。彼は婆羅門の中でも、最高且つ純正の階級であつた。民衆はこれを神への冒瀆とさへ思つた。そしてフランシス一派は、總督と裁判長イムベイを人殺し呼ばはりした。が、死刑執行の日は容赦なく近づいて來た。

その朝、まだ太陽の昇らぬ内に、絞首臺の附近には大群衆が集合してゐた。人々の表情には憂愁と恐惶の翳があつた。ナンド・クマールは従容せまらざる態度で刑場へ臨んだ。彼は嚴肅な態度で周囲の大衆をながめた。

……足場が落ちた刹那、哀悼と絶望の怒號が無數の觀衆から起つた。幾百といふ人々は不淨な光景に顔をそむけ、聲を限りに號泣しながらフーグリ河へ向つて遁れ、このやうな瀆罪を傍

觀した罪を淨めようとするかのやうに、かの聖なる流れの中に身を躍らせた。

(マコーレー「ヘースチングス」)

このことからフランス一派のヘースチングス弾劾は一層熾烈を極めた。そして、後にはヘースチングスとフランスの對立は、もはや言葉の争ひではまだなくしくなつて來た。遂にフランスはヘースチングスに決闘状を送つた。それは直ちに受諾された。兩人は向ひ合つて發砲した。だが倒れたのはフランスであつた。彼は貫通銃創を負つて附近の民家へ擔ぎ込まれた。傷は重かつたが致命傷ではなかつた。暫く後に彼は英國へ歸つた。ヘースチングスの獨裁は完成された。彼はかうして二人の敵を屠つたが、印度にはもつといくつかの大きな敵が控へてゐた。莫臥兒帝國にとつて代つたマラータ聯邦の侮り難い勢力とハイダル・アリを頂くマイソール王國の反撃とであつた。

マラータ聯邦とハイダル・アリ

「山鼠のシヴァジ」の精神をうけついでマラータ聯邦はベシユワ(宰相)の統裁によつて、彌が上に印度古來のアリヤンの好戦心を振ひ立たせてゐた。彼等は當初、回教帝國である莫臥兒帝國の打倒

を目指した。だが、莫臥兒帝國は彼等の一撃を待つまでもなく、アウラングゼブ以後、それ自身の王位を繞ぐる紛争によつて、もはや國王といふ虚位を有するに過ぎなくなつた。そして、彼等の鋒先は必然的に侵略者たる英人の上に振替へられたのである。

マラータ聯邦は第三代ベシユワであるバラジ・バジ・ラオの時(一七四〇年)、部將ボンストラをして下ベンガル地方を攻略し、次いでオリッサの大部分を所領とした(一七五一年)。所謂「聯邦」の形はこの頃から五家分立の形をとるに至つた。それは今や廣大な版圖を有するマラータ人の支配を戦ひとつた部族に従つて分割統治する一方法であつた。

ベシユワの一黨は北上してマルワ・ベンジャブ地方を占め、ボンストラ家はオリッサを收めてナグプールに都を置き、シンジャ人たちはグワリオールに、パロダのガエクワル家はクジラエートを一手に收め、さうしてホルカー族はインドールに首府を定めた。彼等はこれから交互にマラータ聯邦の主力となり、數回に互る英國との戦争に勇敢に防戦することになるのである。

同時に、南方マイソールにも巨星が現はれた。ハイダル・アリ・カンその人である。彼は微賤の出であつた。父は眇たる收入役であり、その祖父は托鉢の回教僧であつた。が、彼は一度び兵士の頭に置かれると、征服と掌握の天才を發揮した。將軍となり、やがて帝王となつた、マイソール回

教王國は次第に堅實な強力な王國となつた。彼は國民の繁榮が國力を増進させることを知つてゐた。従つて彼の内治は、いつも國民をかばふことによつて美しい實を結んでゐた。そして、彼は英國の悪質な侵略に對抗して、佛蘭西人と提携した。

英人は北部サーカルを犯し、ハイダル・アリの敵愾心を煽つた。この結果は當然な騷起であつた。彼は一七六八年、マドラスを急襲して英軍に白旗をかゝげさせた。英人は侵略した土地を返還して和を講じた。この時から、ハイダル・アリは怖るべき敵として、英軍の長い記憶に残つた。

スラト條約と第二マイソール戰役

マラータ聯邦のペシュワの所領に紛争が起つたのは、第四代ペシュワ、マード・ラオの死（一七七二年）が發端であつた。ペシュワの地位はその兄弟であつたナーラヤーン・ラオが繼いだが、その職にあること僅か九ヶ月で叔父ラゴバに殺害された。こゝに英國の容喙する隙ができた。英人はラゴバに組して、密かにスラト條約を結んだ。ラゴバ援助の代償として、サルセツトとパッセインを割讓するといふのである。被害者の遺兒は對抗上、佛人の庇護を乞ふた。第一回マラータ戰爭はかういふ道具立の上で行はれた。

ヘーシングスにはスラト條約は不満であつた。が、戰亂が勃發してボンベイが危険にさらされるやうになると、彼は麾下の軍隊を送つた。ゴッダルト大佐がベンガルからスラトまで、あの巨大な三角形——印度半島を横斷して、グジュラート州を蹂躪したのはこの時であつた。またポバム大佐は難攻不落といはれたグワリオール城を占領した。

だが、もう敵は背後にもゐた。ハイダル・アリのマイソール王國であつた。第一回マイソール戰役は一七六九年、佛兵と組みしたハイダル・アリの反英運動によつて惹起され、英國は彼等が戰勝の宴をはることを許した。しかし協定はすぐ終つた。ところが英國はマイソール王國の主要な海への出口であるマヘー港を侵略したので、ハイダル・アリはその國民に復讐を誓はねばならなかつた。一七八〇年七月、彼の勇敢な騎馬軍はカルナチックの平原を疾驅した。マイソール軍は連戰連勝である。ある要塞は何の抵抗も示さず開城した。ある堡壘は絶望となつて降伏した。全平原がまつたく敵の手中に落ち、英人はそこ此處を逃げ廻つた。チウユリップの樹の林や豪華なヴェランダの近くにもマイソール騎兵隊が出没した。マドラスのマンロー大佐は殘存した僅かの兵を集めて籠城した。

カルナチックの保安のためには、マラータとの紛争は「一時」和解除しなければならなかつた。へ

ースチングスはエア・クート將軍を送つてハイダル・アリと對抗させた。この援軍が海路マドラスに到着するのが、もう少し遅れてゐたら、第二回マイソール戦後の経過は尠くとも、もう少し變貌してゐたに違ひない。何故ならば、英將ベールリはベラムバカムで徹底的な敗北を喫してゐたから……。

一八七一年七月一日に行はれたポルト・ノボロの會戦が決定的であつた。老將軍エア・クートの率ゐた英軍は志氣頻りに上つて、つひに一萬のマイソール軍を撃退した。ハイダールの一子チプーの部隊は、南方タンジールの戦線にあつたが、ハイダル・アリの死（一七八二年七月）によつて、王位につくべく急遽マイソールに還つた。

ハイダル・アリは死の床で、「海を干上らせることができない限り、英人を亡すことはできない」と言つた。悲痛な遺言であつた。この間にもヘースチングスのマラータ聯邦への働きかけは、ベラール王やシンジヤ家と和し、マイソールは孤立に陥つたので、チプーは英軍と交渉し互にその占領地を返還することとトラヴァンコールを英國の保護國とすることによつて、この戦役を中止する協定がとり結ばれた。

ベナレス掠奪と王妃ベガム事件

マラータやマイソールとの不測の戦争で東印度會社の財政はひどく逼迫した。しかも、ヘースチングスが本國の重役たちから受ける訓令は、つゞめて言へば

「寛仁なる政治を行ひ、更に多くの金を輸送すべし。隣邦に對して嚴正なる正義と穩和な政策を行ひ、而して金を輸送せよ」

といふのであつた。これは公正であると同時に不正あれ、節度を持すると等しく貪婪であれ、といふのと同じことであつた。

ヘースチングスは何としてでも本國へ送金する財源を發見しなければならなかつた。そして彼の蛇のやうな執念深い目が着目したのは、富力と人口と格式と神嚴さに於てインド唯一の聖市ベナレスであつた。ベナレスの王はオウドの大守國老ナラシムの手から東印度會社の保護の許に置かれてゐた。そして、時のラージャはチャイト・シングであつた。會社と彼の關係は、都合の良い時は王として扱ひそれが不利益な場合には臣下として待遇してゐた。今は彼は臣下として、獻金を要求される廻り合せとなつた。

毎年、チャイト・シングは一定の額を會社へ納貢してゐたのである。その他にも、時に應じて徴發されてゐた。一七七八年に五萬磅、其翌年または五萬磅、さらにそのまた翌年には大きな義捐金が彼を目標とした。そこで彼は二萬磅をヘースチングスに贈つて、この災を逃れようとした。ヘースチングスはこの金を收納して、涼しい顔で義捐金を求めた。しかも延滞の科料として更に一萬磅をつけ加へ、その金を徴收するために軍隊と差しむけたこともあつた。

この前例が、今度もヘースチングスをしてベナレスの掠奪を思ひつかせた。彼は次のやうな計劃を樹てた。先づ多額の獻金を申しつける、そしてチャイト・シングが抗議を申込んだ時に、この抗議を犯罪と稱して、その罰によつて彼の全財産を沒收しようと言ふのである。

ヘースチングスとその手兵は、ベナレスに到着した。明かにチャイト・シングはこの形勢に狼狽した。そして直ちに二十萬磅を據出しようと申し出たが、ヘースチングスは五十萬磅以下では絶対に受納できないと答へた。そして、彼は刑法に觸れたと言つて、チャイト・シングの逮捕を命じ、二中隊の印度兵の監視の下に置かせた。金にこそ用はあつても、彼の流涕する辯解を聞く耳はもたぬヘースチングスであつた。

先づ蜂起したのは人民であつた。彼等は口々に「ラーヂヤを救へ」と絶叫しつゝ、ヘースチング

スの宿舎を襲つた。英兵も印度兵も、この群衆のために屠り殺され、チャイト・シングはこの擾亂の際に逃れた。ヘースチングスの身邊には僅かに五十名の手兵しか残らなかつた。もはや危険が迫つて來てゐる。二三の冒險心に富む従者が、この奇難をカルカッタへ知らせる使者として立つた。そして、ヘースチングスはチュナールに難を避けた。

チャイト・シングは四萬の兵を集結した。この形勢はオウドにも感染して叛亂が起つた。かうして對峙してゐるうちに、カルカッタからの救援隊が到着した。もはや勝敗は問題でなかつた。チャイト・シングの軍隊は殆んど全滅して、オウドの叛亂は鎮壓された。そして、チャイト・シングの財産——それは百萬磅と稱されてゐた——は沒收されたが、その實は二十五萬磅しかなかつた。そして、それは軍隊の論功行賞に費消された。その當時の兵隊は褒美がなくてはテコでも動かかなかつた。この結果はヘースチングスを著しく悲觀させた。彼が悪謀みをしてまで手に入れた財産が、一向本國の役に立たなかつたといふことは皮肉でもあつた。

彼は新に物色せねばならなかつた。そして思ひ付いた新しい對象はオウドの大守であつた。オウドのナワーヴ・ワジールはシッジャの一子アサフ・ウド・ダウラであつた。この二人はチュナールで會談した。ヘースチングスの要求は莫大なものであつた。にも拘らずアサフ・ウド・ダウラの手

許はむしろ軍備費の免除をうけたい程であつた。この大きな開きが、やがて兩者とも満足すべき妥協點に達した。即ち、彼等の方法とは、アサフの母であるオウドの前大守の妃ベガムの財産を奪はうといふのであつた。ベガムはその夫から英貨三百萬磅といふ財寶を譲られ、地代を徴収する領域は廣大な範圍に及んでゐた。そこで、チャイト・シングの擾亂のときに波及したオウドの叛亂をベガムになすりつけたのである。けれども罪の轉嫁を認めるに足る證據などある譯もなかつた。

會社の軍隊は前王妃の住むフィザバードへ進撃して王宮の門を破つた。ベガムは自室に監禁された。だが、彼女がこの不當にして理不盡な要求をしりぞけたのは當然である。そこで、高壓手段がとられた。それは、「口にするも氣の毒な、慚愧に堪へぬ手段」(マコーレー)であつた。

ベガムの信任あつた二人の宦官は老齡の身に拷問の責苦に會はなければならなかつた。ベガムたちは一室に監禁されて食物を與へられず、或ひは極度に制限された。侍女たちは餓死に瀕し、日を追ふて暴虐は凄じさを加へた。かうしてヘースチングスは七百五十萬ルピーを搾つた後、眞に財寶の底を拂つてしまつたと認めたので、解放することにした。これが、ベガム事件の経緯である。

一七八五年七月、ヘースチングスは英京へ歸つた。そこに待ちうけてゐたものは、國王の歡迎と彼の惡徳に對する告訴事件とであつた。この審理は七年間もたらたらと續けられ、最後には無罪と

なつたものの、ヘースチングスは印度から掠めとつた財産を巨額の辯護料に支拂ひつくし、零落した不遇な晩年を送つて一八一八年八月二十二日、八十六歳で死んだ。

ロヒラの役、ナンド・クマールの死刑、ベガムの掠奪は今日もなほ印度人の心に沁み入つてゐる彼の惡虐な搾取と侵略であつた。若し彼のいくらかでも役立つたところを言へとならば、僅かにサンスクリット文學の獎勵にそれを見出すことができる位であつたらう。

コーンウォリス卿

ヘースチングス歸國の後をうけた印度總督はコーンウォリス卿であつた。彼は始めて英國官界から印度へ送られた貴族階級の總督であつた。再び比喩を許されるならば——クライヴが獲得し、ヘースチングスが地ならしをした土地の上に、家屋を建造したのがコーンウォリスである。

彼は會社の従業員たちに充分な俸給を與へることによつて廉直を強ひた。これは謂はゞ「文官任用令」とも言ふべきもので、服務規定を遵守することだけが、よく社員としての生命を得るやうになつた。不法所得がなくなつたことは、彼等には淋しいことであつたらうが、印度の商人たちは氣まぐれな手数料や出鱈目な特許料に厄されることは尠くなつた。

次に彼は司法権の確立を計つた。凡ゆる地方に民事裁判所を設け、控訴院の制度を定め、所謂コーンウォリス法典を制定した。この法律は、莫臥兒帝國のそれとも異つてゐる回教法を適用したものであつた。ヒンヅー教徒たちの不満は、だから到底とり除くことはできなかつた。

第三に彼が着手したのもこそ、英國の「侵略家屋」の設計圖であつた。それはヘースチングスが爲さうとして實現し得なかつた地租徴收制度の改正であつた。彼は參議員ジョン・ショーアの協力を得て、會社が莫臥兒帝から許されてゐたザミンダリ(小作料)の金額を一定不變のものにしようとした。これは一に會社の財政確立のためであつた。ザミンダリは始めクライヴの時代は莫臥兒帝からうけついでまゝのザミンダリ(小作料徴收人)によつて集められてゐた。ヘースチングスの時にザミンダリは印度人から英人に變更された。しかしその實、ほんたうにやつてゐたのはやはり舊來の印度人のザミンダリであつた。

コーンウォリスは、ザミンダリの税額が年々異なることに不満を覺え、且つ彼等英人には印度の土地制度といふものがよく理解されてゐなかつた。それ故、輕卒にも單に徴收人に過ぎないザミンダリを英國に於ける地主と同等に取扱ふことになつた。そして地租は地主から徴收され、地租の基準を過去十ヶ年の平均に求めることにした。かうして、忽ちのうちに印度には(殊にベンガル・オリ

ッサ、ビハールには)今日言はれてゐるやうな意味のザミンダリ(地主)が生れ、村落共同體の土地が、ザミンダリの「私有地」として土地臺帳に記入された。

この大きな誤りは、農民をして一夜に土地を失はせた。彼等の耕す土地はもはや「借地」でしかなかつた。高率の小作料、饑饉、貧困——凡そ現代にまで及ぶ印度農業の痼はこの時に用意されたのである。その代り、會社はベンガル州から大約三百萬磅の地代収入をあげることが出来るやうになつた。

コーンウォリス總督の時代に、英本國ではピットの印度條令が發布された。これは簡単に言へば東印度會社に對する英國政府の監督權の擴大であつた。

第三マイソール戰役

大宰相ピットの印度條令が通過した時に、英國議會は宣言を發表した。「印度に於いて征服の畫策、領土の擴張といふ方策をとることは英國國民の希望、名譽および政策に反する處置である」美しい言葉であつた。が、たゞそれは「宣言」に過ぎなかつた。

第二マイソール役で敗衄を喫したハイダル・アリの子チプーは、暫く隱忍して復讐の刃を磨い

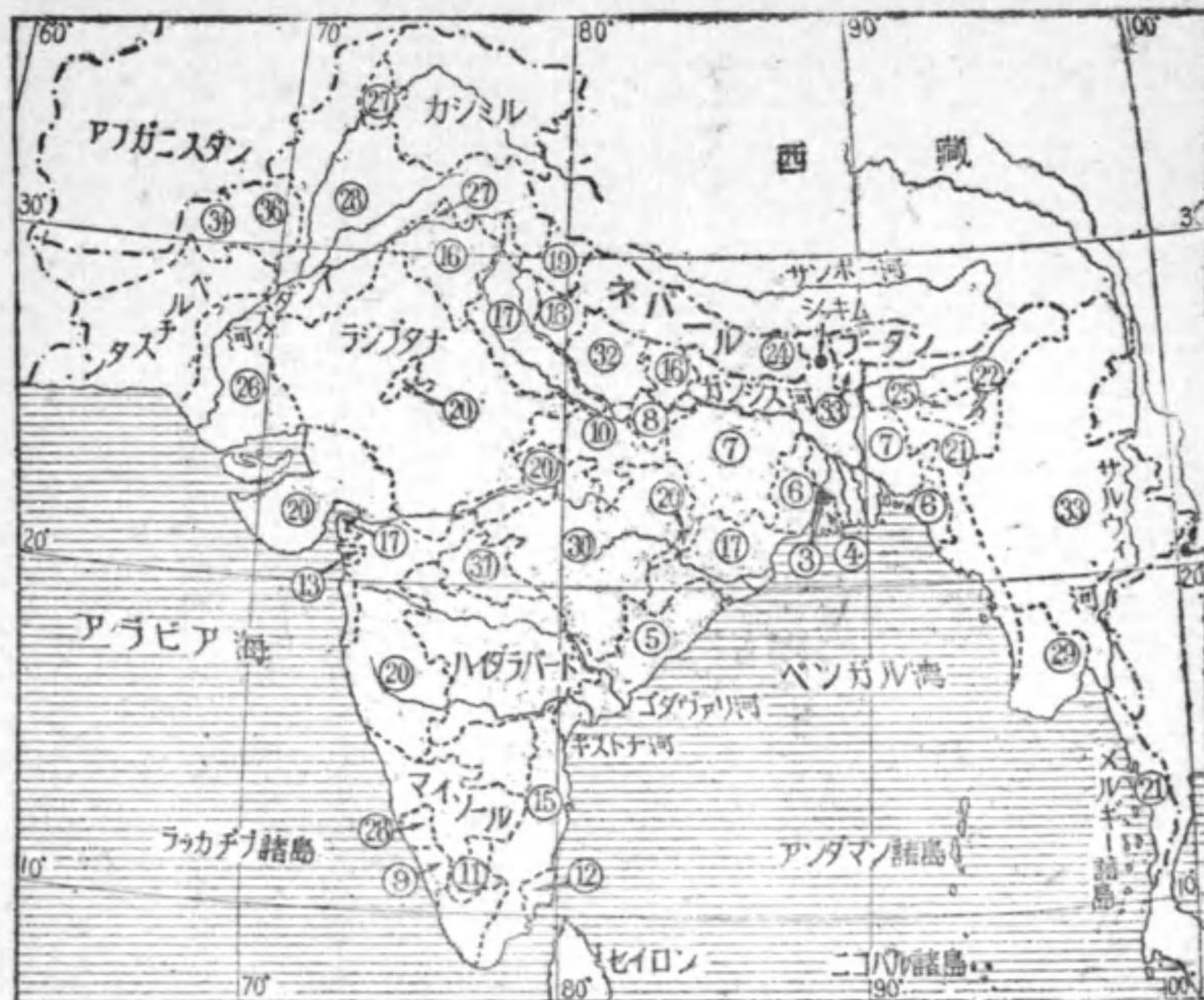
だ。ハイダル・アリの英邁と高潔と勇猛とは、チブーの血の中に流れ通ふてゐた。機を見てチブーは立つた。デッカ半島征服と反英行動は親譲りの政策であつた。一七八九年彼は英國の保護下にあるトラヴァンコールへ侵入を開始した。

コーンウオリス卿は英國議會の宣言などは全く忘却して、兵を大動員した。さらに彼はチブーの侮るべからざるを知つて、マラータ聯邦のペシュワとデッカンのニザムと三角同盟を結んだ。この條件は、征服地は三分しようではないか、といふのであつた。だが、戦端は南方で起つてゐる。軍需品の輸送がしばしば手違ひによつて遅れ、一萬五千の英國軍は時に苦杯をなめた。そしてトラヴァンコールの王はチブーの前に降つた。

この状態に躍氣となつたコーンウオリスは自ら陣頭に立つた。翌一七九〇年、戦ひは第三期戦に入つてゐた。膠着した戦線を破るためには、チブーの首都セリンガパタムの要塞を攻略しなければならなかつた。この頃、形勢を觀望してゐたマラータ軍も來援し、次いでニザムの軍隊もベンガロールへ殺到したが、悪疫と饑饉に悩まされて敗退した。しかし、大軍をもつてとり圍まれたセリンガパタムの明日は豫想できるところである。遂に城の外砦を失ふに至り、チブーは和を乞ふた。停戦條約は苛酷なものであつた。即ち、三千萬ルピーの償金と、マラバール、クールグ、およびサレ

ムの一部の英國への割讓等であつた。

まことに、「印度に於いて、征服の畫策、領土の擴張の方策」をとることマイソール戦役の如きものもなく、それが果して「英國民の希望、名譽および政策に反する處置」であつたのだらうか——そして不思議なことには、(否、當然であるかも知れないが)この「反する處置」をとつたコーンウオリス卿は、その功によつて英國王から侯爵の位をさすけられたのであつた！



【英國侵略一覽圖】

- (1) マドラスパタム 1640 (2) ボンベイ 1661 (3) カルカッタ (カリコタ・チャタナチ・コピンドプール村) 1690 (4) クライヴの采邑 (24パルグナ) 1757 (5) 北部サーカル 1758 (6) プールドワン・ミドナプール・チッタゴング地方 1760 (7) ベンガル・ヒハール・オデッサ 1765 (8) ベナレス 1775 (9) マラバール地方 (クールグを除く) デインデイグル・バラマハル・下部ガーツ地方 1792 (10) アラハバード要塞 1798 (11) マイソール・コインバートル・ウイナード 1799 (12) タンジョール 1799 (13) スラト 1800 (14) ベラリー・アナンタプール・クダバール地方 1800 (15) カルナチック 1801 (16) ゴラクプール・アラハバード・ロヒルカンド・アグラ地方 1801 (17) プンデルカンド・カタック・プローナ 1803 (18) ストレジ及ジャムナ河中間地帯 1809 (19) クマウン地方 1816 (20) サンバプール・ナルヴァダ地方・ベシユワ領・アーマダバード・カンデイツシユ 1817-1819 (21) アッサム・アラカン・テナセリウム 1826 (22) カーシヤール 1830 (23) クールグ地方 1834 (24) ダージリン 1835 (25) ジャインチアパルガナス 1835 (26) シンド地方 1843 (27) ジャランダール・ドーブ・ハザーラ 1846 (28) パンジャブ地方 1849 (29) ベグー 1852 (30) ナダプール 1853 (31) ハイデラバード一部 1853 (32) オウフ地方 1856 (33) デュアール 1865 (34) ケッタ地帯 1876 (35) 上部ビルマ 1886 (36) ベルチスタン 1887

第十五章 英領印度の建設

(千七百九十八年—千八百五十六年)

第四マイソール戦役

コーンウォリスの後任としては、凡庸な財政家に過ぎなかつたショールアについて、ウエレスリー侯モルニントンが印度總督となつた。この年、ナポレオン・ボナパルトとマイソール王チブーとの間に、諒解が成立した。英軍はナポレオンといふ名前だけでも驚いた。この上佛兵が印度に侵入しては、もはや勝味はなくなるに違ひない。そこでモルニントンは着任三週間を出ないうちに、一七九九年二月二萬の英軍にマイソール國進發を命じた。

この戦ひは短期間に終了した。五月四日、ハリス將軍がセリングパタム城を陥した時に、チブー王は屍となつて城内に横はつてゐた。一國の王の戦死によつて一つの會戦が終結を告げるのは悲劇であつた。マイソール王國はかくて滅んだ。されば「ハイデル・アリは王國を受けに生れ、チブーは之を失ひに生れた」のであるが、それは兩者の器量の差ばかりではなかつた。英國の侵略が次々

に功を奏して、全印度が崩壊の一步手前にあつたと言ふことである。

デッカンのニザムは英國と保護同盟を結ぶことによつて、自ら一藩主の身に成り下つた（一八〇〇年）。オウダ地方の大守サダト・アリは彼の負擔である英軍駐屯費の支拂に窮して、土地を割譲せざるを得なくなつた。コラ、アラハバード、ロヒルカンド、ゴラクプール、アザムガル等の膏壤な諸州はルックノウ條約（一八〇一年）によつて英國の領土となつた。カルナチックもナワープの廢位によつて、英領となつた。どこにも英國旗が侵略の成果を誇らしげにひるがへつた。そして、殘る敵はマラータ聯盟だけとなつた。英國はこれまでマラータ聯盟とは、故意に同盟を結び或ひは中立を約して、ひたすらその意に逆はぬやうに努めて來た。と言ふのは、前後に敵をうける不利を避けるためであつた。マイソールを滅ぼした英國は、遂にマラータと戦ふべき秋を得た。

マラータ聯邦の崩壊

マラータ聯邦ではホルカー派が勢力を得てゐた。これに對して從來の統率者であつたプーナの宰相ハジ・ラオ二世は、保護を英國に求めた。英國はベシユワの領土に軍隊を入れて、その慣用手段である駐屯費として土地収入の一部を取得した。このことは、印度精神をもつて建國の基とするマ

ラータ聯邦にとつて、屈辱以外の何ものでもない。ホルカー、ボンストラ、シンジャ等の諸族はこゝに英國の傀儡となつたベシユワを討つべき準備を整へた。第二マラータ戦争は、機先を制した英國側の宣戦布告によつて一八〇三年から三年間、中北印度を舞臺に戦はれた。

モルニトン總督は英軍を二分して、一方はレーク將軍が北進部隊を率ゐ、アリガールからデリーへ進み、シンジャ軍を潰走させた。他の部隊は總督自ら陣頭に立つて、アッセイエの激戦に七倍の敵を倒し、ガイルガールの要塞戦を最後にボンストラ族の降伏となつた。

たゞホルカー族だけが頑張つてゐた。ホルカーの騎兵は峻険の地をたのんで、出沒自在な山岳兵團の長所を發揮し、屢次にわたる英軍の攻撃を撃退した。英軍はホルカーの據るインドール地方を遠巻きにするだけで、あまりにも不屈なマラータ聯邦最終の敵に對して、しばらく休戦に入らざるを得なかつた。しかし、第二マラータ戦争はボンデルカンド、カタック、ブローナのオリッサ州大部分とグワリオール、プーナ等の諸地方の實權を収めることによつて、充分満足すべき戦果を得た。そして空位を保つ莫臥兒帝にアクバール二世を擁立し、英國の代辯者としてのみの地位を興へた。英國の膨張は、今や一日は一日だけの侵略化となつて行つた。

ピンダリ族といふ強敵が中印度に現はれたのは、ジャワを和蘭の手から一度びは奪取したミント

伯に繼いだ、モイラ伯（後のヘースチング侯）の總督時代であつた。ピンダリ族は剽盜の一味であつた。彼等の出沒自在な輕裝で、一日に優に五十哩を馳驅し、朝に市を襲ひ、夕に村を焼いた。數千人のピンダリ族はマルワ地方を根據として、マドラスやボンベイの海岸まで、掠奪を擅にした。その有力者アミル・カンは數十の聯隊と同じく數十門の大砲さへ有してゐた。剽盜と呼ぶべくそれはむしろあまりにも大きな存在であつた。そして、彼等の狙ふところはいつも英國の痛い所であつた。マールタ聯盟の殘存勢力ともひそかに款を通じてゐた。

英國は彼等の横行には實は手を焼いてゐた。が、それが猖獗を極めては、何とか方策を樹てねばならなかつた。一地方の團體に對抗するために、十二萬の大兵と砲三百門を發したといふ記録は、ピンダリ族の優勢さを物語るだけであらう。包圍戰はピンダリ族の敗戦で終つた。

續いてまた新しい反英運動が起つた。孤堡を守るホルカト族と、マールタの殘黨及び一度びは英に降つたが度重なる苛斂誅求に耐へかねたベシュワの首領ハジ・ラオ二世との聯合軍が最後の抵抗を示したのが、第三マールタ戰爭（一八一七年）であつた。それは最早や蠟燭の火の盡きようとする最後の燃焼であつた。

その始めは回教徒の壓政から脱しようとして、次いで英國侵略の巨手に抗したマールタ聯邦は

こゝにまつたく潰え去つた。山鼠のシヴァジをその創始者とする印度精神史上の大きな復興運動も一頓座を見た。英國は、もはや全印度に號令權を有するかに見えた。

外地侵略戰

英國が印度を獲得しただけで満足しなかつたといふことは、ミント總督のジャワ遠征によつても裏書きされる事でもであつた。帝國主義的侵略は飽くなき欲望を發揮するものである。ネパールの出帥（一八一四年十月）もその一つであつた。

ヒマラヤ高原の南、ネパールのグルカ族は十九世紀初頭に、東はブータンの境から西はサトレジ河までをその勢力圏内に置いて、英領オウドとの間に國境線を劃するやうになつた。これは屈強の口實を與へるやうなものであつた。英國は豫て狙つてゐたネパールへの出帥を斷行した。だが、山岳戰に耐へ得るかどうか、危ぶまれた戦力は、第一戰で敗れた。峻險な城塞を守るネパール軍の戦闘力は、遙かに英軍を超越してゐた。軍司令官が斃れ、英軍は敗走した。が、この苦杯は、質より量を誇る英軍を一層大規模な戰鬪へと赴かせた。

まる一年、大動員が行はれた。そしてオクタロー將軍の一部隊がサトレジ河を迂回して、グルカ

のアマールジンを破つたことから、この戦ひの曙光が見られた。一八一六年、セガウリ條約によつて、英國はナイン、タル、ムスレーおよびシムラを獲得し、ネパールに英人理事官を常駐せしめることを批准した。

ネパール出師の結果は、苦戦ではあつたが重要な國境地帯の獲得に成功したものであるとして、英當局者は満足した。そして、この經驗を生かすために、ビルマを第二のネパールとして選んだ。ビルマはかねて垂涎の地であつた。ことに馬來半島の英領化と共に、この夾在する獨立國家の存在は許容できないものであつた。

折からビルマのアヴァ王朝もまた英國の印度進出に對して快よい感情を懐かなかつた。彼等は一八二二年ベンガル州に侵入し、グッカおよびムシルダバードを含む東ベンガル地方を英國側に要求した。のみならず、アラカン沖のジアイプリ島を攻略して、一觸まさに印度内部を窺ふ形勢を承した。時の印度總督アムハースト卿がこの情勢を、ネパール攻略戦と同じ筆法を學んで、宣戰布告まで引きづつて行つた（一八二四年）。

アムハースト總督の頭腦的作戰では、海路からラングーン港を占領すれば、凱歌が忽ち奏される筈であつた。そこでマドラスから遠征隊が送られたが、占領地で彼等は疾病と食糧の不足に攻々と

斃れた。また陸路、ブッサムへ向つたりチャーヅ將軍の部隊は、結局ビルマの本據を衝く陸路行を斷念しなければならなかつた。のみならず、その一部隊はチッタゴンで全滅の悲運に相遇した。翌一八二五年の末、キャンベル將軍の進出によつて、英軍は漸く首都アヴァから六十哩の地點ヤングボに迫つた。まだ悲觀すべき情勢ではなかつた。が、狼狽したビルマ王は、いくらか戦ひにうんで平和を急いだ。英國は戰闘に成功したとは言へなかつたが、平和會議では辣腕を振つた。ブッサム、アラカン、テナセリムの三州を英國領とし、價金百萬磅と決定した。肥沃なこの三州を手に入れるために英軍の費消した戦費は大約千三百萬磅。だが、この取引は安かつた。

サチーの禁止と英語教育

一八二八年、ウイリアム・ベンチング卿が印度總督として赴任した。ベンチングは英國の印度統治といふ大建築の完成者であつた。彼の治政は、それ故、多くの力を内治に振向けることになつた。彼の第一の仕事は財政整理であつた。第一次ビルマ戰役は、その戦果に比較しては些少であつても、東印度會社としては、苦痛な戦費を支出したために、その財政は極度に紊亂してゐた。彼は經費の節減（主として印度兵の給料引下げ）、地租の増徴、新稅の發布（マルワ地方産の阿片に課稅す

る)の三方法によつて、印度財政を再建した。

第二に彼はヒンヅー教徒のサチー(寡婦殉死)を禁止した。アクバール大帝によつて一應停められたかに見えたサチーの習慣は、回教徒の政治が終焉すると、又もヒンヅー教徒間に行はれてゐたのを、ベンチングは一八二九年十二月、執拗なヒンヅー教徒の反對を押し切つて、これが禁止令を發した。

第三に彼が施行したことは英語教育の強行であつた。東印度會社はヘースチングスの頃から多くサンスクリット語の研究やヒンドスタニー語の教育に力を致してゐたが、ベンチングは友人マコーレーの協力を得て、斷固英語をもつて第一の語學と定めたのであつた。これは、印度人から印度精神を失はせ、印度人をして半英、半印の中途半端な「人種」と變貌せしめることになつた。「英國の女學生を笑はせるやうな天文學、背丈が三丈もあつて治世が三萬年もつゞいた王様が一杯ある歴史、糖蜜やバターの海ででき上つた地理、などを公費で援助すべきであるか、否か」とマコーレーが言つた非難は、大きな歴史的文化的批判するべく餘りに西歐的觀點に立ちすぎてゐた。が、ともあれ英語は普及され、英語を話せる印度人は登用された。誰もが英語に無中になり、英人はヒンドスタニー語を知つてゐても、決してそれを用ひなかつた。印度人の精神的弛緩をめざすこの政策は、明

かにベンチングの名を昨日まで不朽ならしめてゐた。そして、印度人の去勢も昨日まで続けられた。

アフガン出兵

ロシアの南下といふ命題は古くから今日まで續いてゐる。そして、アフガニスタンで角逐を争つたのも、ロシアと英國であつた。傳統的な南下政策と傳統的な侵略政策との衝突であつた。

アフガンには度々印度を劫掠したアーマッド・シャー・ズラニの死後、バラクザイ族の首領ドスト・ムハマッドが篡奪王の名を持してゐた。ズラニの遺子はベンジャブ國境のルジアナに通れ、英國の保護をうけてゐた。

アフガン情勢を探りに特使バーンズを送つたのが一八三七年、その翌年にはもはやアフガン出兵が行はれるのであつた。バーンズがムハマッド王と表面上の理由である通商條約の交渉に當つてゐた頃、ロシアの使節もカプールへ來、劃策するところがあつた。バーンズは特使の名にも價ひせず、空しく歸印してオークランド總督にロシア使節の暗躍を告げた。

焦つたのはオークランドであつた。彼は自ら空想した樓上夢で、アフガンがロシアの制壓下に置かれたことを憂へた。そして周圍の反對を押し切つて、ズラニの遺子シャー・スージャを擁立し

て、アフガン出兵を断行した。

カラチからソリーマン山系を越した遠征軍は、七月ガズニの城塞を落し、八月首都カブールに入城、シャー・スージャをアフガニスタン王に就かせた。英國はこの傀儡の王を守るため一萬のベンガル兵を置き、マクナートンを政務官として駐在させた。アフガニスタンは準英領として取扱はれたのである。が、剽悍な山地民族のアフガン人の間では、新しい王は外國の軍隊によつて王位に上つた卑劣漢であると見なされ、英人は侵略者として憎悪された。やがて叛亂が起つた。一八四一年十一月、アフガン人は英人官吏を虐殺して、ムハマッド王の復位を迫つた。その勢ひは決して群衆の集團とは言へなかつた。秩序ある攻撃にあつて英軍は一とたまりもなくアフガンを放棄せざるを得なくなつた。百二十人の婦女子を残して總勢一萬五千の英人はカイバル峠を越えて、ジャラバトへ退去の道についた。が、案内人はアフガン人であつた。彼の巧みな誘導によつて、山奥深く入りこんだ英軍は雪中道を失ひ、加ふるに山間諸族の襲撃をうけて、或ひは戦死し或ひは凍死して、ブライド唯一人しか生存を許されなかつた。

徹底的な敗戦であつた。オークランド總督が被免されたのは當然である。後任のエレンボロー卿はアフガン出兵の失敗を繰返さぬやう英軍を撤退せしめようとしたが、現地將兵は退去の命に反し

て、カブールへ侵入し漸く置きざりの英婦女子の救出に成功した。かうして、第一回のアフガン遠征は、何の得るところもなく終つた。英國はアフガニスタンにはもはや干渉しないことが得策であると知つたのである。

シークの役と第二次ビルマ戦争

傲慢なエレンボローの後を繼いだのは彼の義弟ハーチングであつた。彼の着任、日まだ浅い頃、パンジャブのシーク教徒の間に動搖の兆が見えた。

シーク教はその祖ナック・シャー（一四六年生）が、回教徒に蹂躪された印度の復活を圖るため、ヒンヅー教の刷新を唱へ、唯一神、種姓制度の廢止、等を根本精神として始めた新宗教であつた。勿論、彼等は長い間回教徒の迫害と闘つたが、莫臥兒帝國衰亡の秋に會つて、次第に政治的勢力を増大して來た。一七八〇年ランジット・シング出て、シーク教徒を糾合し、獨立を宣して歐洲風の軍隊を養つた。彼は時に英國と同盟して地の利を占め、時に印度精神を高唱して反英に従つた。首府をラホールに置き、シーク教徒の大きな封建國家がサトレジ河を挾んで英國勢力と對立した。一八三九年、ランジット・シングの死はこの國を失ふことになつたのである。

一八四五年、シーク教徒は幼王デュリップ・シングを擁してラホールに大軍を集結してゐた。その年も暮れやうとする十二月、彼等はせきを切つた勢ひで、サトレジ河を渡つて進軍を開始した。宗派的團結心に加ふるにパンジャブ土民の持つねばり強さによつて、シーク教徒の軍隊はムドキ、フィロズジャー、アリワール、ソブラオン等で英軍を悩ました。輕装半ズボンのシーク教徒たちは、巧みに歐洲兵の戦術をとり入れて、好戦した。

しかし、最後のソブラオンの會戦で遂にシーク軍は敗れた。英軍は首府ラホールを包圍したので、シーク教徒の反抗もこゝで終ることになつた。

英國は賠償としてジュランヅール及びサトレジ河左岸の地を獲得し、幼王デュリップ・シングの主權を認め、加ふるに英國軍隊をラホールに駐屯せしめることを議決した。英軍の將ロレンスは一八四六年シーク教徒聯合會よりパンジャブ地方の施政を委任されたので、パンジャブ地方は實質的には英國政府の版圖に編入されたと同じことであつた。これが第一シークの役の戦果であつた。

だが、シーク教徒はまつたく鎮壓されてしまつたのではなかつた。彼は内に不満を藏して、上邊は英人に恭順を装つてゐたにすぎなかつた。一八四八年、ダルハウジー卿が總督となつた時には、シーク教徒の不满はやゝ表面的に蔓延してゐた。その上悪いことには、彼等を巧みに操縦してゐた

ロレンス將軍が、病氣のために歸英してゐたことであつた。

ロレンス將軍のゐない英軍は、彼等にとつては唯、侮蔑にしか價ひしなかつた。暴動はムルタンに起つて、英人士官が二名殺された。そして、これに呼應して全シーク教酋長が蹶起した。パンジャブは忽ち戦火の巷と化した。英人憎惡の念は、アフガン騎兵が援軍として馳せ參じた。十二月、ゴー將軍はムルタンを占領し、ついでラムナガル、チリアンワラに於てアフガン兵を破つた。

翌一八四九年三月二十九日、第二次シークの役は、幼王デュリップ・シングの廢位と全パンジャブ州の併合によつて、英軍の上に勝利者の榮冠が輝いた。

——また戦争が待ち構へてゐた。第二次ビルマ戦役である。

第一次ビルマ戦役によつて、その大部分の肥沃な國土を失つたビルマは、大いに國力を涵養して來るべき復讐戦に備へてゐた。英人はそれかあらぬか事ごとに傲慢を極め、ビルマ人は犬猫のやうにこき使はれた。ことに官吏の態度は驕慢であつた。反感と反撥が凡てのビルマ人の心理の中にあつた。

この時ラングーンで英商人及び英船員が暴徒によつて虐殺され、これを救援に向つた英艦も亦侮辱された。こゝに於て英艦隊は砲列を並べてラングーン港を封鎖し、パッセイン(五月)ベグー(六

月)と進撃し、十月にはプロームを陥し十二月、英印度總督はベグーを併合することを布告した。二三の英人の死は、ベグー一州に匹敵することになったのである。これが第二次ビルマ戦役であつた。またダルハウジー卿は「權利消滅の教書」を發布した。これは藩王國の主權を嫡子なき場合には英國が剝奪するといふ一方的な法律であつた。このため、嗣子なき藩王は僅かに私有財産だけを養子に與へることが許されるのみで、國富も國土も國民もあげて英領として奪ひ去られるのであつた。サクラ王國(一八四九年)ナグプール王國(一八五三年)等由緒あるマラータの王國は次々と姿を消して行つた。この例は實に枚擧に暇がないほどである。

英國の膨張年表

十九世紀の英領印度建設といふ一聯の英國膨脹史は、この狭い場所によく物語ることは到底不可能であつた。われわれはその主要なものについて、いさゝかの管見を費やしたのみで、既に近世から現代史へと轉換すべき大きな主題の前に到達したやうである。われわれの素通りしなければならなかつたやうな事どもも併せて、簡單な年表によつて、熾烈を極めた植民地獲得といふ膨脹史を再びこゝに検討して見ようと思ふ。

- 一七九八年 モルニントン卿、總督となる。ナポレオン、チプーと商議を開始す。シーク教徒の首領ランジット・シング、ラホールの支配者となる。
- 一七九九年 第四マイソール戦役。カナラ地區英領となる。マハラージャ・クリシュナ、マイソール王國の玉座に就く。彼は往昔のマイソール朝の代表者であつた。
- 一八〇〇年 ニザムとの保護同盟。東印度會社はハイデラバードを外敵の侵略から防衛し、その代償として土地収入を得る。ニザムは駐屯費を負担する。
- 一八〇一年 カルナチック地方併合。(七月)
- 一八〇二年 ホルカー族のためにプーナを追はれたベシエワと「バッセイン條約」を締結。
- 一八〇三年 第二マラータ戦争。カタック、プローナ占據後合併す。
- 一八〇四年 ホルカー族との戦ひ。
- 一八〇五年 レイク將軍ブハートプールを攻撃して成らず。ブハートプール王と協定なる。シンジヤ族との條約にてガリオール及びゴフリー地區の一部を得。ホルカー族との條約はプーナとブッデルカンドの讓渡をうく。

- 一八〇六年 莫臥兒帝アクバール二世即位。ヴェローラの印度兵叛亂を起す。
- 一八〇七年 ミント卿、總督となる。
- 一八〇九年 カプール王シウジャ・ウル・ムルクと協定成立。カシュミール獨立國となる。
- 一八一〇年 東印度諸島侵略を志し、アンボイナ及びパンカ諸島を攻略。
- 一八一一年 ジャワ遠征。オランダ軍を敗りこれを占領す。
- 一八一三年 モイラ卿、總督となる。
- 一八一四年 ネパールへ出兵して敗戦を喫す。アンボイナ、パンダ諸島及びジャワ島をオランダに返還す。
- 一八一六年 第二ネパール役。グルカ族ムクワンプールにて敗退、英國はネパール領クマウン地方を領有することによつて終る。
- 一八一七年—一八一八年 ビンダリ族撃滅さる。第三マールタ戦争。プーナ、ナグプール、インドールのマールタ諸族一齊に烽起する。既に頽勢蔽ふべくもなく、次第に敗退す。ランジット・シング、ムルトンを領有す。
- 一八一九年 シンガポール島をスタンフォード・ラツフルスの献策により侵略す。ランジット・シ

- ング、カシュミールを併合。
- 一八二三年 アムハースト、總督となる。
- 一八二四年 第一次ビルマ戦争。
- 一八二五年 ヤンダブ條約によりビルマ戦争終る。アッサム、アラカン、テナセリム併合。
- 一八二六年 ブハートプール攻略。
- 一八二八年 ベンチング、總督となる。
- 一八二九年 ベンチング、サチー禁止令を發布。
- 一八三一年 マイソールの紛争により、直接統治となる。
- 一八三三年 特許條令により自今ベンガル總督は印度總督と呼ばれ、印度の領土は英國王の委任によつて東印度會社政府の名の下に統治することになつた。
- 一八三五年 オークランド卿、印度總督となる。
- 一八三七年 莫臥兒帝ムハマッド・バハヅル・シャー即位。
- 一八三八年 第一アフガン役。
- 一八三九年 「パンジャブの獅子」ランジット・シング死す。

- 一八四〇年 シンドの回教王反英の舉に出づ。
一八四一年 カプールの叛亂。英軍潰滅してアフガン出兵失敗す。
一八四二年 エレンブルグ卿、印度總督として赴任。アフガンより撤退す。
一八四三年 シンドの戦ひ。ナビヤー將軍、ミアニ及びハイデラバードにて大捷す。シンド併合。
一八四四年 ハーチング卿印度總督となる。
一八四五年 トランクバール及びセランプールのデンマーク植民地を買収。第一シーク役。
一八四六年 デュリッパ・シング、ラホールの王となる。ジャランダール、ドーブ、ハザール併合。
一八四八年 ダルフージ卿、印度總督となる。第二シーク役はじまる。
一八四九年 英軍、ムルタン占領。チリアンフーラの會戦にて砲四門、聯隊旗三基を失ふ。蓋しアフガン出兵の國境戦とシークの役はともに英軍の完全な敗戦記録である。後にゴフ將軍グジェラートにてシーク軍を敗る。この結果、パンジャブ地方を獲得す。サータラ藩王國、嗣子なく没收す。
一八五二年—一八五三年 第二次ビルマ戦争。ベグーの併合にて終る。
一八五三年 ナグプール及びジャンシー、ともに「權利消滅の教書」により英領となる。
一八五六年 オウドのナワーブ・ワジールを廢位せしめ、オウド地方を領有す。

第十六章 印度獨立戦争（印度兵の大叛亂）（一八五七年）

カニング卿

ダルハウジ總督の後を繼いで赴任したカニング卿の双肩には、英國の負擔の凡てが懸けられてあつた。歐洲では、英國はロシアとの間にクリミア戦役（一八五四年—一八五六年）が勃發してゐた。西亞では波斯のアフガニスタン出兵があり、ヘラートを奪取されてゐた。そして、東亞では支那にアロー號事件があつて英支の間に干戈に訴へて解決すべき問題があつた。

クリミア戦役は印度軍中の英人部隊をこの方面に廻させるの餘儀ない事情となつた。加ふるに支那の戦線もまた豫備隊を要求してゐた。そして、アフガニスタンの狀勢も逡巡を許さなかつた。カニング卿は波斯出兵をアウトラム將軍麾下の軍隊をもつてした。英軍は波斯灣のブッシヤイアを占領し、續いて波斯軍を破つた。このため波斯のアフガン出兵は敗れ、翌年パリ條約によつて、ヘラートからの撤兵が行はれた。依然としてアフガニスタンは印度（英國）とロシアとの緩衝地帯にと

どまつてゐた。

カニング卿の内治は前任者の政策を踏襲し、産業の振興、福祉施設の充實、西歐文明の移入を旨としてゐた。電燈や蒸氣機關が、印度民衆の半ば好奇の眼に映じ、半ば恐怖の心を植ゑた。郵便制度ができて電線を傳つて電報が人の意志を傳へることも、印度人の素朴な觀念には納得がいかない何か神聖を犯すものがあつた。銀行もできた。工場も建てられた。みんな新奇なものばかりであつた。

——そして基督教が、改宗者だけに官吏として登用の道が開かれるのだ、と言つてゐるやうに、蔓延した。

印度精神の昂揚

西歐文明の移入は必然これに對抗する國粹精神の昂揚をうながすものである。ラージャ・ラム・モホン・ロイの唱導した「梵教會」^{ブー・サマ}が、この種の運動の嚆矢であらう。ロイは一八二八年に、英印文化の調和を目的として梵教會を設立した。彼は説いた——印度へ侵入したあらゆる宗教的、社會的な異國文化を排除するためには、古代の吠陀^{ヴェダ}の根本精神に歸ることが必要である、と。そして梵

教會をアリヤン古來の印度精神の傳統をうけつゞ宗教團體として生長させたのである。

註* 彼は一七七二年ビハール州バトナに生れ、その生涯を基督教に對抗すべきヒンズー教の確立に費し、一八二三年英國に客死した。

この運動は彼の死後、チャンドラ・セン、デヴェンドラナート・タゴール（詩人タゴールの父）等によつて受けつがれたが、宗教的改革から社會的改革へと次第に移行していつた。

續いて一八五一年にはラムゴバル・ゴース及びチャンドラ・ムーカルジー等が同志をつのつてカルカッタ英印協會を創立した。これは歐洲自由主義思想の洗禮をうけた印度の若き世代が、英人の専制政治と飽くなき搾取を排撃するべく立つた政治結社であつた。この情勢はやがて各地に擴大して行き、ベンガル印度協會、マドラス革新會、ボンベイ協會等の設立となり、民族自覺の氣運をうながした。と、同時に印度人經營の諸新聞の記事も著るしく反英的となり、大衆の目覺めを側面から助けた。今や、澎湃たる反英熱が、印度人の心中に奔めいて來た！

英國史家は「一八五七年の印度傭兵の叛亂」と言ひ、印度人はこれを「印度獨立戦争」と呼んでゐる。その語彙の異なるやうに、この事件の記述にも大きな相違がある。それは確かに、單なる叛亂などでは在り得ないものであつた。英國はその印度統治史の上で、この時ほど危機に當面したことはなかつた。まさしく國をあげての「獨立戦争」であつた。

如何にしてかういふ戦ひが行はれたか——もはやそれらの原因を説くことは屋上屋を架する類であらう。が、再びこゝに記さうとするのは、一に歪められた印度史の修正を願ふや切なる著者の感慨がさせる業である。

最初に宗教的な反撥があつた。ペンチングのサチー禁止令や寡婦の再婚を許す法令は、古習を守るヒンヅー教を破壊するためのものと思はれた。それに、加ふるに基督教勢力の増大があつた。改宗者は官界を泳ぎ、ヒンヅー教徒や回教徒には出世の門は固く閉ざされてゐた。英語教育の普及が、またそれに拍車をかけた。印度人は半英國人にならなければ、——さうするのが東印度會社政府の意志であるかの如くに——恐らく生存を許されなくなるやうな恐怖感があつた。

英國は古來行はれて來た醇良な土地制度を破壊した。のみならず、抵當に入つた土地を賣ること、を許す新しい法律が、多くの土地所有者を破産させた。しかも地租の増徴は、農民の全生産の五割から七割五分を政府に提供しなければならなかつた。貧困が始まつた。商工業者は産業革命による英國製品が流入するので、手をこまねいて失業を待つばかりとなつた。ペンチング總督の報告書には「印度の貿易不振は史上その比を見ない悲惨な結果を生じた。紡績工の骨が印度の平原を白色に變へてゐる」と述べられてゐる。

回教徒の不滿は、かの莫臥兒帝國の形式的な存在にあつた。有名無實な莫臥兒帝を再び世に出す日、即ち英國勢力を驅逐して、回教帝國の再建がその凡ての願望であつた。

藩王たちの動搖はダルハウジ總督の歴史的な發言から起つた。男の嗣子をもつことは必ずしも人爲のよくするところではない。にも拘らず英國は養子をもつて王位を繼承させることを認めなかつた。これは武器を用ひないもつとも悪質な侵略行爲であつた。前例は數へきれない程ある。そればかりか、オウドの大守國老ナワブの廢位は、悪虐な英人の假面をぬいた表情だと、今さらのやうに印度人達は恐れおののひた。誰もが明日の日の自分とその國の運命を豫想することができなかつた。

そして、不敗を誇つた英國軍のアフガン出兵の無殘な失敗や、シークの役の敗戦があつた。英軍

不敗の傳説は破れたのだ。若しい主脈起したならば……、誰もがさう思つた。英人部隊は國外の戦線へ動員されて手薄であつた。婆羅門僧と藩王や舊藩王の暗躍がつゞけられた。耐へに耐へた英國の暴政を一舉にくつがへす日、侵略者を國外に驅逐する日——その待望の日が、一觸即發の危機を孕んで、誰の目にも刻一刻と近づいて來るのが見えた。

その近因

ベンガル印度兵軍は比較的高い種姓の出身者ばかりが集まつてゐた。そして、彼等はしばしば反抗の素振りを見せた。カニング總督は、驕慢不遜のベンガル傭兵の慢心をためようとして、ベンジャブ地方のシーク兵をベンガル軍に少しづつ配備した。結果は却つて逆効果でしかなかつた。ベンガル兵とシーク兵はことごとくに衝突した。超ゆべからざる種姓の溝を、それを否定するシーク教徒は平然として蹂躪するやうな結果となつた。一つの井戸を共用するやうなことが、しばしば争ひの要因となつた。そして、秩序を無視した英國當局に對する呪咀が、次第にベルガン兵の間に高まつて行つた。

その頃、軍の裝備を改めるために、新しいエンフィールド銃が與へられた。ダムダムの兵器工廠で

作られた弾丸の薬夾には、それを銃孔にはめこみ、やうに油が塗つてあつた。そして印度人たちは、發射するときに長い習慣で、弾丸の尖の火薬の部分で装填するのであつた。

誰ともなく、薬夾の油は牛の脂だといふ説が傳はつた。牛はヒンヅー教徒にとつては唯一の神聖な動物であつた。これは宗教の神聖を犯したことであつた。

この噂は回教徒の軍隊には、豚の脂が塗つてあるのだと喧傳された。豚は回教徒の特に忌み嫌ふ動物である。そして、この二つの噂は、政府が彼等の宗教に對してさういふ背信行爲を行はせるのは、やがて彼等を基督教徒に改宗させる前程であるのだ、といふ結論に達した。牛か、豚か——何れにしても動物性の脂が用ひられてゐたこの薬夾の事件は、火のやうに燃え擴がり、政府を狼狽させた。

カニング總督は印度兵自身がこの薬夾に塗る植物性油脂をつくることを許して、當面を固塗しようとした。が、これは却つて噂の眞實性を裏書きする逆効果しか生まなかつた。そして一層燃えひろがつた噂は、新エンフィールド銃を採用したのは、舊來の種姓を打破しようとする謀みである、と言ふのであつた。一部のものがこの銃の操作を拒否した。彼等は英雄のやうに所罰をうけた。そこで騒ぎはまた一としきり大きくなつて行つた。

一八五七年の一月にはブラックポールの兵營に放火事件があつた。二月、三月にはムシルダバードやバーハンポールの大隊に暴動が起つた。五月にはオウドの聯隊も動搖した。上官の命令に従はぬもの、意識的な怠業、さらに殺傷沙汰さへもひき起された。もはや爆發は必至であつた……。

一八五七年五月十日

五月十日の午後、決定的な暴動がメールートMeerutの聯隊で勃發した。上官に反抗したベンガル回教徒兵は營倉を破壊して、彼等の同志を救ひ、英人士官を殺害した。叛亂兵はやがて英人兵舎に迫つた。ヘウィット將軍が呆然自失してゐるうちに、印度兵はメールート市街へ流れこみ、英人を見つけ次第殺傷して進んで行つた。日頃の壓政の恨みを晴らし英國の羈絆を脱しようとする彼等にはほのぼのとした希望があつた。彼等は怒濤のやうにデリー近郊の村落に侵入した。どの村でも歡呼の聲に迎へられ、農民の加はる數は見ると増大していつた。それは恰も雪達磨の膨脹にも似てゐた。彼等の部隊は俄かに強力な印度兵と農民義勇隊の集團となつた。騎兵部隊が先驅して、行く先々の民衆を集めた。

五月十一日、早くもメールート南方四十哩にある莫臥兒帝國の首都デリーは、叛亂兵によつてい

ち早くも占められた。そして彼等は名ばかりの莫臥兒帝ムハマッド・バハヅル・シャーMuhammad Bahadur Shahを擁立した。叛亂の報は電波にのつて飛び、または人の口から口へ囁やかれていつた。メールートMeerutの英軍は抗し難いとして自ら火藥庫を爆發させた。カウンポールCum Poreに、ラツクナウRajpuraに、オウドAwadhに——一ヶ月ほどのうちに下ベンガルを含む北部印度は大動亂の巷と化した。どこでも英人軍は孤立無援の状態となり、城塞に、兵舎に立て籠つて、印度兵の復讐の彈丸を抗がねばならなかつた。多くの藩王たちや廢位された大守の後裔が蹶起した。彼等は進んで叛徒の指揮をとつた。ナナ・サヒツNana Sahibやタンチア・アリTantia Puri、アーマッド・ウラーAmir-ul-Ulugh等はその中で優秀な人材であつた。地主もこれに呼應した。そして更に多くの農民義勇隊が編成された。中部印度へも動亂の波紋がひろがつて行つた。その輪はだんだん大きくなる。もう少しで全印度が起つところであつた。

註* 彼はマールタ聯邦のベシユワ家の養子で、養父の死後その領地を沒收された。ナナ・サヒツ

は通稱で、本名はダンヅ・パンといふ。

** 卓越した指揮者として、この戦争中衆望を集めた。

*** 廢位されたオウドのナワブ・ワヅール。彼も自ら陣頭に立つて農民隊を組織した。

反英軍にとつて一つの弱點は、この烽起を急速に傳達する方法を失つてゐたことである。官設の電信機關は彼等の前には閉ざされてゐた。そこで當然立つべき所でも、未然に防がれた場合もあつた。南部印度の狀態がそれであつた。カルカッタでも暴動が起るべきところを、エルジン將軍の支那派遣軍を途中から上陸させて戒嚴令を敷いたために、暴徒はゲリラ的にしか活躍できなかった。西北の邊境ベシャワールやラホールでは英軍司令官が印度兵の武装解除を行つたため、武器を失つた彼等は遂に立たなかつた。パンジャブ地方もローレンス將軍に先手をうたれた。これらが「全」印度的な戦闘とならなかつた若干の齟齬であつた。

だが、烽起した地方では、何れも勇敢に闘つた。そして殆んど英軍を窮地に追ひ込んだ。もう一息といふところであつた。そこへ英國側の援軍が到着した。

雄圖つひに成らず

デリーの英兵は一部の城塞に據つて籠城した。長い對峙が、時々戦闘によつて破られるやうな持久戦に入つた。英人指揮官も或ひは斃れ、傷いた。もはや最後の瞬間が迫つた時に、ニコルソン將軍麾下の英救援軍がデリーを遠巻きにした。九月十四日、有利な態勢と優秀な武装とによる總攻

撃は、英軍司令官の戦死にもめげぬ猛襲を繰返し、つひに印度兵の圍みを解かせた。莫臥兒帝バハヅル・シャーも今は一叛徒として囚れの身となつた。思へば長い莫臥兒帝國もこゝにその終焉を告げたのである。彼は後にラングーンの獄窓につながれ、その多難な後半世を送り、獄屋の人として死んだ。

カウンプールでは三ヶ聯隊の印度兵が、英人長官の威嚇的な砲撃のために、完全な叛亂兵と化しナナ・サヒップの指揮の下に、市街を包圍して英軍を文字通り袋の鼠とした。そこには一陣の殺伐な風が流れた。六月二十七日、カウンプールの防衛軍は降伏した。その直後、アラハバードを占領したネイル將軍の攻撃軍が進攻して來た。ネイル將軍はアラハバードからカウンプールまで、彼の通過する道路の兩側の木々に一本のこらす虐殺した印度人の死體を吊り下げながら進軍したと言はれてゐる。

ラツクナウでも英人は駐劄官邸に籠城した。第八十七日目の九月二十五日、ハヴロック將軍の増援隊が官邸に入つた。だが、アーマッド・ウラーを指揮官とした農民と印度兵の聯合軍はなほ頑強に圍みを解かなかつた。翌年三月、キャンベルの救援軍が漸くこの攻撃を挫折させるのに成功した。グワリオールやジャンシーの舊マーラタ軍の反英は徹底してゐたので、英軍は遁走し、これが回

復に多くの勞苦を拂はなければならなかつた。

オウド地方はもつとも氣勢をあげた據點であつた。タンチア・トビの神速な用兵はしばしば英軍を敗走させ、困惑させた。全オウド州の一齊に立つた鐵の結束であつた。だが、この一聯の勢力もひとり孤立してはもはや雲霞の英軍の前には、及ぶべくもなかつた。のみならず、英軍は新手の本國部隊の來印と相俟つて、オウド全州を蹂躪した。暫くゲリラ戰が続けられた。が、優秀な指導者タンチア・トビの捕縛（一八五九年四月）とそれにつぐ虐殺により、叛亂の火は煥のやうにいぶるばかりで、やがて死灰の冷靜に戻つた。

企圖の挫折とその檢討

かくて印度獨立戰爭は雄圖つひに空しかつた。そして、印度人の英人殺害に數百倍する、英人の恐るべき暴虐が始まつた。カニング總督は「公平と宗教上の寛容を基礎として印度統治を圖るべく今回の動亂に参加したものと雖も、直接英人を殺害した者を除き、他はことごとく赦免する」ことを發表した。そして、民心がやゝ収まつたと思ふと一方では集團的な虐殺が行はれてゐた。罪もない印度人が、老幼男女を問はず、毎日々々拘引された。

老人及び婦女子が叛逆罪を犯したものと同様（けい）に犠牲にされたといふことは、英國議會の記録や印度總督の諸文書によつて知られる。……英國人は彼等を一人も容赦しなかつたこと、黒色人をひどい目に會はすことは面白いほど樂しみな氣嗜らしであつたといふことを大言したり、記録に留めることをためらはなかつた。……

數日後、軍法會議の裁判官や監督官たちは、一日中腰かけ通しで、老衰した印度人達を絞殺に處すといふ判決を下しつゞけた。單なるいたづらから叛徒の旗をみせびらかし、銅羅を打たうとした數人の少年達は訊問され、死刑に處せられた。……

英人たちによる義勇絞殺隊は各地方をのし歩き、素人死刑執行吏にもこと缺かなかつた。ある紳士はマンゴの木を絞首臺に使ひ、象を吊下げ臺に用ふるといふ藝術的なやり方で息の根を止めた數の多いことを誇つてゐた。この野蠻きはまる裁判者たちはまるで見世物か何かのやうに、印度人を八の字形に裂き殺したりした。

（ケイ、ウイルソン共著「印度兵大叛亂の歴史」）

そして、あらゆる印度人の家庭から、武器といふ武器は言ふに及ばず、刃わたり六吋以上の切れものは、ナイフ一挺といへども持つことは許されなくなつた。武器を失つた印度志士の反抗がこの時から始まつたのである。

この擧の蹉跌はどこにあつたのであらうか——われわれは暫くそれを検討してみよう。第一に印度兵が去勢された莫臥兒帝を擁立した失敗であつた。印度獨立といふ大旗の下になら、當然あらゆる被壓迫大衆が参加すべきであつたのに、いくつかの例外があつた。

ハイデラバードのニザム領では宰相サラル・ジャングの鎮撫のために騒起の時期を失つた。莫臥兒帝國から獨立したニザムは、莫臥兒帝の再起を欣ばなかつた。ベンジャブのシーク教徒から成る有力な部隊が英軍に投じたのも、過去の辛らい回教帝國下の政治を嫌つたためであつた。彼等にとつては莫臥兒帝はむしろ仇敵に等しい存在であつた。ネパールのグルカ族が積極的に印度兵を攻撃したのも同様な理由であつた。

第二に藩王や舊藩王を指導者としたところにこの戦争の弱體性があつた。彼等は戦況非なるときカニング總督の發した「藩王の領土の保證と傳統の承認」といふ宣言に、もろくも裏切を頻發させたのであつた。

第三に有力な海上部隊を保有してゐなかつたことであつた。そのため、南印から或ひは海路はるばる英本國からの救援軍の上陸を洪手して許さざるを得なかつた。

第四に相互の聯絡の不備があつた。第五に武器の優劣が甚だしかつた。印度兵は舊式の武装であつたのに反して、英人兵には強力な火器があつた。

だが、果してこの最初の印度獨立戦争が、「一人の惡漢が九人の馬鹿をそそのかしておいて、もうお前たちは引返すことができないほど深味に入つたぞと言つた」ことによつて起つたものではなかつたことだけは確かである。印度を印度人の手にとり戻すこと——こんな當り前な考へ方さへ、今もなほ英國史家から、そんな氣持は爪の垢ほどもなかつたやうに描寫されてゐるのである！

だが、悲しいかなこの企圖は挫折し、印度は再び英國の桎梏のもとに喘ぎつゞけなければならなかつた。

戦ひの喜悅に際會する勇士は幸ひなり、今や光榮と正義とは求めずして來たり、天門はかれのために開かれたり。

されど、汝、もしこの義の戦ひを回避せば、これ義務を抛ち名譽を捨つるもの、汝は罪を脱れず。

汝の醜名は代々に語りつがるべし。高貴の血族にとつて、醜名は死にも勝るべし。

(婆伽梵歌・第二章)

第十七章 英帝直轄統治時代

(千八百五十八年—千九百十九年)

歴史の中斷

莫臥兒帝國最後の皇帝ムハマッド・バハヅル・シャーが廢位され、ラングーンの獄屋につながれた時から、印度の歴史はしばらく中斷されるのである。もはや主權が存在しなかつた。そして、「印度」といふ地域は英國の屬領にすぎなかつた。長い侵略の歴史を残した東印度會社はこゝに解體した。印度は英國王の直轄統治地となり、印度總督は同時に印度副王と呼ばれた。これから行はれる政治も、それから外地への侵略も、ともに英國植民地のことに屬する。それ故、印度史はこゝに中斷を餘儀なくされるのである。そして、新しく書き綴られるであらう印度の歴史は、今や現實の問題となつてゐる反英抗爭の成否にかゝつてゐる。印度には黎明が訪れてゐる——英國勢力および英國人の印度撤退が實現した曉にこそ、新しい印度史の第一頁が始まるのである。

歴史の中斷期——それも言ふならば英國植民史と、反英抗爭として血涙をもつて綴られた獨立運

動史であるが——は印度獨立戦争の失敗から始まり、漸くいま終らうとしつゝある。われわれは、再び年表の形式を借りて、一世紀に垂んとする印度史の中断期をひもどくとしよう。

大叛亂のまだ終焉しない一八五八年には東印度會社の名が「印度良治法案」の議會通過によつて永遠に消されてしまつた。そして英國政府の内閣には印度事務大臣が置かれ、初代の印度總督兼副王としてカニングが任命された。彼は這般の大叛亂に際して、英國が費消した戦費四千萬鎊を東印度國債として發行し(一八五九年)その負擔をすべての印度人の上に置いたのである。「印度叛亂によつて印度の財政が極度に混亂に陥つてしまつてゐる際に、英國は印度に對して、英國増援軍の本國を離れて以來の全費用のみならず、出發前六ヶ月間の經費をも要求した(ウインゲート卿)」のであつた。

一八六二年(皇紀二五二二年)にはエルジン卿が總督兼副王(以後は單に總督と呼ぶ)となつた。この年、ラングーンの獄舎にあつた莫臥兒廢帝バハヅル・シャーは淋しく死んだ。大莫臥兒帝國の名實ともなる最後の日であつた。

アフガニスタンへの觸手

一八六三年 エルジン卿は在職一年餘にして北方旅行中グルムサラで客死した(十一月)。

一八六四年 ロレンス、總督となる。彼は叛亂のときにシーク軍を率ゐて、パンジャブ地方の動搖を巧みに鎮壓したことによつて有名となつた將軍であつた。

一八六五年 ブータンの征服。その軍費補償金として、デューアール地方を物納せしめることに成功した。

一八六六年 オリッサの大饑饉。まだ道路や鐵道が整備されなかつたので、救濟の手は意外にひまどつた。加ふるに、米國南北戦争の餘波をうけて、綿花の取引が亂調子となり、破産者が續出した。

一八六九年 メイヨー卿、總督となる。前任者が「巧妙な傍觀」をしてゐたアフガニスタンに對して觸手をのぼし、アムバラでアフガン王シエル・アリと會見した。だが、彼は對アフガン政策を實行する前に、一八七二年一月二十四日、アンダマン群島の流刑地を視察中、一囚人によつて暗殺された。

一八七二年 ノースブルック、總督となる。

一八七四年 ビハールの饑饉。

一八七六年 リットン、總督となる。英國の對アフガン政策を携へて赴任した彼は、直ちにアフガン王シエル・アリに英國公使の駐劄を強制した。しかし、ロシアと英國に挾撃された形のアフガン王シエル・アリは容易に返事をよこさなかつた。

一八七七年 英國女王ヴィクトリア女帝が印度皇帝の稱號を冠する即位式舉行。この年、デッカ地方、マドラス、ボンベイ地區に大饑饉があつた。そして同じ年、アフガン出兵が行はれた。

シエル・アリは遂にロシアの使節を受け入れたので、リットン卿は英國使節(チェンバレン)一行を送り、これを強制的にアフガン朝に駐在せしめようとした。が、一行はカイバル峠でアフガン守備隊のために入國を阻止された。そこで英國は強硬手段に訴へることとなり、第二アフガン戦役が十一月勃發した。英軍はジャラバード及びカンダハールを奪ひ、アフガンの王シエル・アリは戦火を避けて、邊境に病歿した。

一八七九年 ガンダマック條約(四月)により、英國は先王の子ヤクブ・カンの主權を認め、英國理事官をカプールに駐在せしむることになつた。そしてアフガニスタンの外交は英人理事官の同意を得ることが必要となつた。のみならず、タラム、ピシン及びスイビ南部地方を英國に割譲しなければならなかつた。アフガン人はこの條約を屈辱的なるものと思つた。

アフガンに對するリットン總督の思惑は次のやうなものであつた。即ち、アフガンを往古のやうにカプールとヘラートとカンダハールの三つの國々に分割するといふのが彼の方針であつた。

かういふ英國人の考へに想倒すれば、その年に勃發したカプールの英人理事官とその護衛兵との殺害は、それがアフガン軍隊の反英抗争であつたことを理解することができるであらう。が、この衝動の結果はアフガンにとつて幸しなかつた。英軍にはフレデリック・ロバーツといふ頭張りの利く若い將軍がゐたからである。カプールは直ちに奪回され、ヤクブ・カンは王位から退かなければならなかつた。

一八八〇年 リットン總督は英本國の内閣更迭によつて桂冠した。後任は、リボン卿であつた。そして、アブダラーマン・カンがカプールの主權者として擁立された。彼はシエル・アリの甥であつた。リボン卿はこの新しい王にカンダハールを還附しようとした。このためにマイワンドの英國軍隊は王位競争者であつたアユブ・カンのために集團的復讐をうけた。カプールからカンダハールまで三百八十里を、二千八百の歐洲兵と七千の印度兵とからなる救援軍が、僅か二十三日間に強行的に進撃したので、指揮官ロバーツ將軍の名前が戦史に残つたのである。アユブ・カンは王位をあきらめなければならなかつたし、英軍はアフガン戦線から撤退することになつた。

一八八一年 マイソールの藩王が廢位され、回教國が古い傳統のヒンヅー王を迎へることになった。
一八八二年 綿製品の關稅を撤廢し、綿花輸出稅を廢止した。このことは、産業革命以來の英國の
ランカシャー紡績製品の印度進出を意味してゐる。印度の紡績業は無稅の英綿製品に壓倒され、
印度棉花は英國人の都合でいつも勝手な値段がつけられることになった。

國民會議派の誕生

リボン總督治下の時代に、その立案者の名によつて呼ばれるイルバート法案といふ法律が提議された。これは印度に於ける英人は印度の法律によつて支配さるべき旨を規定する英印同權論であつた。もとより印度人の歡迎するところであつたが、計らずもこの法案は在印英國人の猛烈な反對に遭遇しなければならなかつた。

リボン卿の心では、かくすることによつて英國の印度への正義を示さうとしたものであつたが、英國人には劣等視した印度人と席を同じうするやうな印度法の適用をうけることは屈辱であると考へられた。それは支配階級の威嚴を損ふものである、といふ理由のもとに政府官吏の中でさへ公然と反對の意志表示をするものさへあつた。そしてイルバート法案は英人裁判の場合には歐人の陪審

制度によることを留保條件として一八八四年に成立したが、これでは何のために一つの法律を出さねばならぬかその解釋に苦しむ底の骨抜き案となつてしまつたのである。

このことから、印度人たちは支配階級として尊敬を拂ひつゝあつた英人の正體をはつきり認識するやうになつた。口に正義人道を唱へながら、彼等のすることといへば、自己の利害の前にはいかなる歪曲をも敢てするといふ本性が暴露されたのである。

加ふるに、民族意識の昂揚に努めたいくつかの宗教運動があつた（前章参照）。中でも、ラムクリシュナ・パラマハンサとその弟子スワミ・ヴィヴェカナンダによる「ラムクリシュナ運動」は人々の心に激情の嵐をまき起してゐた。彼等の主張によると、眞實の神の實現たるや、基督教牧師たちによつて迷信であると輕蔑されてゐた傳統的なヒンヅー教の禮拜方法を復活することによつてのみ行はれるものであるとして、古代ヒンヅー精神の復活を高唱したのであつた。

以上の覺醒運動はやがてベネルジの組織した印度協會による印度國民大會（一八八三年）がカルカッタに開催されるに至つて、一そう大衆的に躍進しなければ置かなかつた。この形勢を見てつた英當局者は、このまゝ放置しては一大政黨と發展する虞ある印度國民大會をして一應解消せしめ、一種の御用團體を組織させて大衆の反英思想を和げる方策をとるに至つた。

そこで登場したのがアラン・ヒュームといふ退職官吏であつた。彼はリットン總督時代に内務長官や農商務長官を勤めた男で、比較的印度人間に多くの知己をもつてゐた。ヒュームはダフアリン總督(リボン總督は一八八四年辭任)の旨をうけて、澎湃としておこつた民族主義に對する緩衝機關を作りあげた。これが今日までの國民會議派の前身なのである。

一八五八年十二月二十八日——全印度から參集した七十二名の有志によつて、パネルジを議長とした第一回國民會議がボンベイに於て開催された。「われわれの欲するところは政府の基礎を一層擴大し、印度人に適當かつ正當の參政權を與へられんことである」といふ微温的な決議を行つたのみで、その用語に英語を用ひるなど、國民會議の性格はあくまで御用團體の域を出なかつた。謂つてみれば、民族主義といふよりもそれは自由主義の温床にすぎなかつた。

第二回はカルカッタに、第三回はマドラスに——と順々に印度の主要な都市で開かれる國民會議は、何かぬるま湯につかつたやうな氣持を印度人に與へつゝも、順調に發展して行つた。だが、やがて彼等にも目覺める日が到來せずにはゐないのである。

第三次ビルマ戦役から日露戦争まで

一八八五年 ロシアとアフガン間に衝突がおこつたが、戦火に訴へることなく、外交的に解決された。だが、戦争は別の方で起つた。第三次ビルマ戦役である。上部ビルマ地方に押こめられてゐたビルマ國王チボーは、曾て二回に亘る會戦によつて英國に没收された失地の恢復を念願としてゐた。が、彼單獨の力では如何ともなし難い問題であつた。こゝに、印度支那に本據をもつてゐた佛蘭西のビルマ後援といふ事態が惹起して來た。

東亞に於ける英佛の植民地争奪戦は、またこゝでも行はれようとしてゐた。そしてビルマ政府の反英的態度は、商會社に對する苛赦ない科料の取りたてによつて窺ふことができた。英國はこの間の事情を察知して十一月十四日、兵を發してビルマを印度の一部とすることに成功した。チボー王はボンベイ海岸のラトナギリに追放され、マンダレーを含む上部ビルマの戴定はなつたが、爾來、英國は剽悍なビルマ人のゲリラ戦術にあつて、長期の掃蕩戦を続けなければならなかつた。

一八八七年 英領ベルチスタン、印度との連合なる。

一八八八年 ハワラ遠征。英遠征軍シッキムより西藏人を追ふ。ランスダウン卿、總督となる。

一八八九年 ビルマ掃蕩戦終る。

一八九〇年 支那はシッキムに對する英國の保護權を認む。

一八九一年 マニプール遠征。アッサム州内マンプール王國に叛亂勃發して、國王は英領に遁れ、國內まつたく騒亂と化したので、總督ランスダウンはクイントン將軍を送つてこれが鎮壓を命じた。が、將軍および麾下の軍隊は叛徒の篡奪王に計られて虐殺された。そこで、マンプールへの大がかりな遠征が行はれた。これを「アッサムの變」といふ。

一八九五年 エルジン卿、總督となる。チトラルの内紛に乗じて、英國は英兵の駐屯を承認させた。

一八九六年 全印度に饑饉と疫病が蔓延した。

一八九七年 ビルマを副總督の治下に置く。ワジリ、スワチ、モフマンド、アフリジス等のアフガン國境諸族が反英の兵をあぐ。

一八九九年 カーン、總督となる。ヌシキ地區及びベルチスタンのニアバット、英國の支配をうく。

一九〇〇年 大饑饉。

一九〇三年 八萬四千二百人が疫病のために死んだ。

一九〇四年 西藏遠征。八月首都拉薩を占據し、五十萬ルビの償金を約させた。この年、疫病による死者百二萬九千人。日露開戦す。

第二革命運動——チラツクの擡頭

明治三十七、八年（一九〇四、五年）に亘る日露戦争に於ける日本の輝かしい勝利は、全東亞人の血をわき立たせた。印度人たちはこの捷報を聞いて、改めて己れの周圍を見廻した。改めて自分たちの置かれた場所を考察したのである。そして、彼等は深く反省せざるを得なかつた。

一躍アジアの盟主となり、世界の日本と飛躍した神國日本の英姿を仰いで、彼等印度人もアジア人である誇りを知つた。まさに日本は全東亞に生氣を吹きこんだのである。新しい希望の光が燦として東方から光り輝いたのであつた。印度人は目覺めた、そして自信を得た。と同時に、そこには革新的な指導者、パール・ガンガダー・チラツクが現れた。

チラツクはプーナに生れ、ボンベイ大學に數學、歴史及び法律を學び、特に十六、七世紀のマラータ史を専攻し、その頃既に心中に反英思想を懐いてゐた。彼は卒業するや、プーナで「ケサリ」（獅子の意）及び「マラータ」の二新聞を發行して、民衆に政治思想を鼓吹してゐた。そしてマラータの英雄シヴァジを崇拜し、シヴァジの救國濟世の精神をうけつぐことこそ、印度を愛する所以であると、熱烈な筆を振つて説いてゐた。